
世界に噛み付く鬼、夜空を仰ぐ獣、慟哭の夜叉

陽炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に噛み付く鬼、夜空を仰ぐ獣、慟哭の夜叉

【Nコード】

N4185T

【作者名】

陽炎

【あらすじ】

《完璧捏造設定》グダグダながらも平和な万事屋に突然訪れた謎の女性。どうやら長年音信不通だったらしく、銀時、桂、坂本、そして高杉の昔馴染らしい。

彼女が今更現れたのは何故なのか？彼女の背後に見え隠れする悲しい過去は？

そして、万事屋、真選組は徐々に壮絶な騒動に巻き込まれていく・・・。

第1部は高杉メインで、第2部は神威メインになってます。

プロローグ

あの手が大好きだった。

戦場においては刀を振り回して敵をことごとく粉砕する、強い手。

私の頭に触れて髪の毛をぐしゃぐしゃと引っ掻き回す、温かい手。

そして、手よりも、その手を差し出してくれる、

あの人が好きだった。

・・・その手が、優しさを失ったのはいつごろだっただろうか。
ただひたすらに血を求め、破壊にしか生きがいを見出さなくなった
のは。

私の頭を引っ掻き回してくれたその手から、血の臭いが染み付いて
取れなくなっただのは。

いや、それだけじゃない。

・・・あの人の目に、悲しいまでの狂気が宿るようになったのは。

・・・いつからだった・・・？

私が、声が枯れ果てるほどやめてくれと叫べば、彼が悲しい獣になることもなかっただろうか。

いや、きつと、やめはしないだろうし、私はそんなことはできない。

だって、私には――。

プロローグ（後書き）

内容薄っ！！！！

ドア開けたら何かが始まるってベタ以前にもはや日常

江戸中の無法者が集まる無法都市、かぶき町。

その町に君臨する四天王、女帝お登勢の経営するスナックの上には、「万事屋銀ちゃん」という看板が掲げられている。

「万事」の名の通り何でも屋であるが、依頼はめったにやってこない。故に、

「ほら、銀さん！ダラダラしないで仕事してください、仕事！」眼鏡をかけた15、6歳の真面目そうな少年、新八が毎日のように怒鳴っている。

怒鳴っているのは、どうやら机に背を向けた椅子に座っている人物らしい。

「んなこと言ってもよオ、依頼が無いんだからしゃーねーだろ？」そう言ってくるりと椅子を回して新八を見やったのは――
銀髪の男、坂田銀時。

年のころは26〜28歳、あちこちが飛び出したくるくるの天然パーマ。

意外に整った精悍な顔立ちをしているが、死んだ魚のような目がその顔立ちを台無しにしている。

しかしよくよく見ればその体は鞭の様に無駄なく引き締まり、只者ではないことが伺えた。

何よりも紅く染まったその目は、奥に獣を宿していた。

「じゃあ、仕事をするためにも、まず宣伝活動を行ってください。」

「んなの面倒くさくてやつてられつかよオ。」

「何言ってるんですか！家賃、もう2ヶ月もためてるんでしょ！いい加減に払わないと本当に追い出されますよ！」

「ソーアル。ダメガネの言うとおりに。いい加減にしないとマダオからゴキブリに落ちるアル。」

相槌を打ったのは赤髪青目で大食漢、絶滅寸前の用兵部族夜兎の少女、神楽だった。

「神楽ちゃん、賛同してくれるのは有難いんだけど、ダメガネつてやめてくれる？泣きそうになっちゃうから。」

「女はナ、一言一言に棘でも刺しておかないとあつというまに食われるか弱い生き物ネ。自己防衛手段ヨ。」

「オイ神楽、『か弱い』って辞書で引いて、対義語に『神楽』って書いとけ。」

「何を言うアル銀ちゃん。この世に私ほどか弱い女はいないネ。」

「・・・そしたら世の中の99.9%の生き物はか弱くなるよ。」

「黙れダメガネ。メガネを水道のヌメリに落としてそのまま歯磨きしてうがいするヨロシ。」

「ダメガネ言うなつってんだろがアアアアアアアアアアア！つかなんだよその地味な嫌がらせはアツアツアアアアアアア！」

万事屋の雰囲気はバトルロイヤル的な雰囲気になったその時。

ピンポン

「「「・・・・・・・・・・あ。」」」

至極のどかなインターホンが響き渡った。

「あ、お客さんですかね？僕出てきます！」

「おい新八、新聞なら『うちは朝日ですから』って断っておけよ。」

「怪しげな宗教勧誘だったら、『うちはゴルゴン教ですから』って言うといいアル。」

「神楽ちゃん、そっちのほうが怪しげだと思うよ？」

ぱたぱたと玄関に駆け寄りながら新八はツッコむ。
そして、ドアをガラガラと開けながら、

「はい、どちら様ですか？」
と言った。

ドアの前に立っていたのは、
深い藍色の目と髪の、美しい女性だった。

ドア開けたら何かが始まるってベタ以前にもはや日常（後書き）

グダグダだ・・・。

昔の知り合いって誰だかわかんなくなったりする

「あの、何の御用でしょうか？」

とりあえず新八はその女性に話しかけてみた。が、

「・・・・・・・・・・。」

「あ、あの・・・・・・・・。」

その女性は黙っている。新八は返答がないのにちよつと焦りつつ、もう一度話しかけた。

「ご依頼ですか？それとも別の用ですか？」

「・・・・・・・・・・。」

「あのう・・・・黙ってないで何か言ってくれませんか？」

相変わらず黙っている藍の女性に対して新八が言つと、女性は困つたような顔をして首を振つた。

「いや、首を振られても・・・・・・・・。」

「新ハイどうしたアルか？新聞や宗教の勧誘じゃなくてシロアリ駆除の詐欺でも来たアルか？」

新八が対応に困っていると、神楽がひよつこりと顔を覗かせた。

「あ、神楽ちゃん。いや、この人全然喋ってくれなくて・・・・。」

「ほオホオ。新手の『無言詐欺』ってやつアルな。」

「いや意味わかんないよ神楽ちゃん。無言でどうやって騙すの？」

「男は口数の少ない女が好きネ。そうやって従順な女を演じて金を騙し取るアル。」

「全く喋らなかつたらそもそもコミュニケーションからして始まらないよ?」

そうして新八と神楽で漫才を繰り広げていると、

「おいおい何だよおめーらー。新聞勧誘でも宗教勧誘でもシロアリ駆除の詐欺でも無言詐欺でもなくてグダグダ会話して適当に話を伸ばす詐欺ですかこのヤロー。」

銀時が頭をボリボリかきながらやってきた。

「「あ、銀さん(ちゃん)。」」

「!!--!」

「んだよオメーら。どーしたんだよ?」

「いえ、お客さん(?)が来たんですけど一切喋ってくれなくて・・・。」

「無言詐欺アル。」

「だから誰なん」

銀時がひよいと玄関を覗き込んだ。

その瞬間、銀時の動きがピタリと止まった。

「お前・・・晶あかりか!?!」

—— 晶と呼ばれた女性は、銀時を見てほっとしたように頷いた。

「え？銀さんの知り合いなんですか？」

「昔の女アルか？それとも禁じられた愛の末に生まれた隠し子アルか？」

新八や神楽の言葉が聞こえていないように、銀時はまじまじと女性—— 晶を見つめている。

「・・・まあいいわ。上がね。」

驚きから立ち直ったのか、銀時は晶に背を向け、居間に向かって歩き出した。

「ちょっと待ってください銀さん！晶・・・さんって銀さんの何なんでしょうか？」

「そーアル！ちゃんと説明するネ！」

抗議する2人の横を、晶がスイツと抜けて銀時についていった。

「あ・・・ちょっと！」

新八と神楽も慌ててその後を追ったのだった。

再会は喜べるもんじゃないとね（前書き）

今思ったこと。

たぶんこれ、相当長く続く。

再会は喜べるもんじゃないとね

「とりあえず座れや。」

「……………（コクッ）。」

銀時が応接間のソファーに座ると、その前のソファーに晶は座った。その前に、サツと新八がお茶を出し、ササツと神楽とともに銀時と同じソファーに座った。

「……………銀さん、何なんですかあの人。」

「ちゃんと説明するヨロシ。」

神楽と新八が詰め寄ると、銀時はボリボリと頭を引っかいた。

「何だつて言われてもねエ……………昔なじみだよ。」

「……………昔なじみ??」

昔なじみつて……………桂さんや坂本さん、高杉さんたちみたいなの？
チラリと目の前でお茶を啜っている女性ひとを盗み見た。

—————
どういう繋がりで、こんな美人が？

さつきは焦っていたのであまりよく見ていなかったが、この晶という女性は中々の、いや相当な美人だ。

年は18〜20歳といったところ。一瞬黒かと間違えるほど深い藍色の髪は、うなじのあたりでくくりに結ばれ、腰まで流れている。髪だけでなく目の色も深い藍色で、肌は抜けるように白い。

体のラインも均整がとれ、ほっそりしている。

着物は地味な深緑だが、髪と瞳の色によく映えており、とても似合っていた。

要はアレだ。100人中100人が振り返るような美人なのだ。

なのだが。

妙に瞳に翳りがある。まるで、奥底に深い悲しみ、いやそれ以上の憎しみを押さえ込んでいるような。

新八がそれに気がついた瞬間、晶が一瞬でこちらを見つめた。

その瞳に獣の光が映った気がして——新八は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

「晶さん・・・でしたよね。」

新八が言つと、晶はゆつくりと新八を見た。

「何の御用でここまで来たんですか？」

しかし、晶が反応を取る前に銀時が口を開いた。

「オイ新八、お前まだ気がつかねエのかよ。」

「？何のことです？」

「晶はな、喋れねえんだよ。」

「・・・・・・え？」

新八と神楽が晶を見ると、晶はこくりと頷いた。それで今までの不自然な態度の説明がついた。

「喋ってください」と言った新八に対して困った顔で首を振ったのは、「喋りたくても喋れない」といいたかったのだ。

「……無神経なことを言っ、すみませんでした。」

新八が頭を下げると、神楽もそれに習って頭を下げた。

晶は手をブンブンと振った。まるで、「気にしなくてもいいよ」と言う様に。

「んで、こっからが本題だ。」

珍しく顔を引き締めた銀時がそう切り出した。

「お前、確かアイツについていったんじゃないのか？今までどこにいたんだ？」

「……（ヒュッ パンツ ト シュッ）。」

銀時が問いかけると、晶は変なジェスチャーのようなものをし始めた。ウ●トラマンみたいなポーズをとったかと思えば平成仮面ラ●ダーみたいなポーズを取ったり、様々である。

「……そうか。どつりで紅桜の時、見かけなかったわけだな。変だとは思ってたが。」

「あの、銀さん。」

「ん？何だ？」

「……話の流れに全くついていけないんですけど……。」

どうやらこの変なジェスチャーはオリジナルの手話らしいが、新八には一切意味が分からない。
神楽に至っては酢昆布を両手に持ち、口にありえないほど詰め込み、果ては耳と鼻にも刺している。

「イーんだよ、オメーらにや分かんなくて。」

「ちよつと、言いわけないでしょうが！」

新八が怒りかけたその瞬間。

ガラガラッ

「こんにちはー。鍵開いてたんで入っちゃいましたけど、銀時くんいますかー？」

小学生かと突っ込みたくなるような挨拶で勝手に玄関からずかずかと上がりこんできたのは——巷で有名な攘夷志士、もとい指名手配犯の桂小太郎&相棒のエリザベスである。

「おいッラ！勝手に入ってくんじゃねえよ！」

「ッラじゃない桂だ！銀時！今日こそお前を攘夷し」

桂の声は、銀時の向かいに座っている晶を見てピタリと止まった。

「……………あ、きら……………か？」

「……………（コクン）。」

晶が頷いた瞬間、桂の顔がみるみる笑顔になり始めた。

そして晶に歩み寄ると両肩をガシツとつかんだ。

「晶か！ずいぶん可愛らしいおなごになったではないか！しかしお前、どこにいたんだ？アイツについていったんじゃなかったのか？」

「……………（ヒュツ パンツ ト シュツ）。」

「……………ふむ。そうだったのか。どうりでな。しかし、本当に久しぶりだな。」

桂が満面の笑みを浮かべ、晶を見つめる。晶も嬉しそうに顔をほころばせている。

まるで、仲のいい兄妹の再会のようなだった。

「だから意味わかんないっていつてるろーがアアアアアアアアアアアアアア！！」

とうとう新八の大シャウトツッコミが炸裂したのであった。

再会は喜べるもんじゃないとね（後書き）

読みにくいなあ・・・

どうすればいいんだろう？

積もる話が多すぎるともう分かんなくなる

「・・・というわけで、落ち着いていろいろ詳しく説明してくれま
すか？」

新八の大シャウトツコミが大炸裂したあと、片方のソファーに新
八、神楽が座り、向かいのソファーに銀時、桂、晶が座った。

「まず、晶さんは銀さんや桂さんの何なんですか？」

「ソール。アッキーナについて説明するネ。」

「「アッキーナ!？」」「」

某アイドルまんまのあだ名に3人の男は驚いた声を出した。晶はぽ
かんと口を開いた。

「コ、コホン。よし、俺が説明しよう。」

桂が咳払いをして、話し始めた。

「こいつの名前は『与謝野 晶』ってな。昔からの知り合いだ。」

「昔からって・・・晶さん、だいぶ年下じゃないんですか？」

確かに、晶は最低でも7は銀時たちより年下である。子供の時に知
り合ったとは考えづらい。

「どこで知り合ったんですか？」

「禁断の関係とかアルか？」

新八と神楽が言った瞬間——晶の表情が凍りついた。
銀時と桂はいち早くそれに気がつき、慌ててごまかし始める。

「あ、ああそうだよ。禁断ってゆーか、まあそういう系な。」
「う、うむ！似たようなものだ！」

晶の表情と銀時たちの異常な焦りぶりを見た2人は、それ以上何も言わないことにした。

「じゃあ、それは置いて、晶さんはここへ何しに来たんですか？」

「……（スツ）。」

「だから、手話じゃ分かりませんってば。」

またしても手話をしようとした晶を遮って新八は言った。

「しょーがないですね、ここは俺が彼女の手話を訳しましょう。」

「エ、エリザベスさん！？本当に分かるんですか？」

「なめてもらっちゃあ困るぜ。こう見えても俺は宇宙手話解読検定の1級を持ってるんだよ。」

「どこで取れるんだよその資格！」

「……（パ スタツ ビームツ ピース シュバツ）。」

「さて、本題に入る。今日ここに来たのにはもちろん理由がある。銀時や桂、できれば坂本にも会いたいと思って来たが、妙な噂を聞いたもので、それをお前達に知らせたくてやってきた。風の噂で聞いたことだから確証は持てないが、その割には信憑性の高い情報だ。」

「あの、動作が短い割にやけに内容が濃すぎる気がするんですが。」

「作者が手話の動作の描写、書くのめんどくさくなっただけだろ。」

「……（タタタン　くるっ　グッ　パシンッ）。」

『単刀直入に言おう。鬼兵隊が江戸を狙った大規模な爆発テロをたくらんでいるという噂だ。』

「「「！！！！！！！！」」」

銀時、新八、神楽の顔にいつせいに動揺が走る。桂だけは落ち着いた様子で、「やはりな」と呟いた。

「俺もその情報をつい最近手に入れてな。それを銀時たちの耳に入れようかと思いやつてきたのだが……お前も同じだったか。その噂はそこまで広まっているのか？」

「……（ひょいっ　てくてく　どーん）。」

『裏街道を歩いていればどの連中もそれに関する話しかしていない。表でも一部のものはその話をしている。』

「なるほど、裏ではそこまで広まっているのか……。」

「ちょ、ちょっと待つアル！爆発テロって、具体的にどういうことアルか！？」

神楽が慌てて聞いただと、両方とも困ったような顔をした。

「・・・あくまで噂なのだ、詳しい内容は分からん。だが、鬼兵隊はテロのことをおおっぱらに宣伝するようなバカ共の集まりではないし、そもそも全くの無関係者が流した局地的な噂ならばここまで広まる事も無いのだ。とすれば・・・。」

鬼兵隊が自らその噂を流した、ということ。

だが、何のために？

テロというのは不意打ちだからこそ意味を成すものだ。如何にもな噂を流しては、「俺達の起こすテロを警戒してください」と言っているようなものである。

しかも、ここまで大々的に噂を流せば、

「・・・（とんっ　びゅんっ）。」

『真選組もすでに嗅ぎ付けている。』

「・・・訳が分かんねえな。」

銀時は頭をぐしゃぐしゃと引つ搔き回した。

「結局、ということなんですか？」

「分かりやすく説明するアル。」

「・・・（ツツツ　バシッ）。」

『江戸が近いうちに焼け野原になるかもしれない、ってことだ。』

「「！！！！！！！！」」

新八と神楽はいきなり突きつけられた言葉に何も言えない。

「・・・本当にそうだった場合、お前達はとうするのだ？」
桂が銀時と晶に意見を仰いだ。

「どーもしやしねーよ。ただ、アイツが俺の国の領域にまで手エ出すってんなら・・・。」

銀時の目に、獣が宿る。

その紅の瞳に映るのは、かつて同志であった、隻眼の男なのだろう。

「・・・そんときゃあ、全力でヤツをぶった斬りに行く。」

——高杉イ！俺達は次会った時あ、仲間もクソも関係ねエ！

全力で、テメエをぶった斬る！！！！

「・・・そうか、気があうな。」

桂がどこか自嘲気味に笑った。そして、晶を見る。

「お前はどつするのだ？」

「・・・・・・（ぐっ ばんっ）。」

『お前達が鬼兵隊や宇宙海賊春雨相手に大暴れしたことも風の便りで聞いた。』

・・・・アイツに、なにを言ったのかも。』

「お前、その情報どつから仕入れてきてんだよ。」
銀時が軽くあきれたような顔をした。

「・・・・・・（しゅたたたっ どむっ だむっ）。」

『気持ちは分かる。分かるが・・・・私はお前たちのようには割り切れない。』

それに・・・・私は、
あいつを・・・・。』

「・・・・・・」

1人の攘夷志士と1人のマダオは、何も言わなかった。
下手に言えば、晶が傷つくと分かっていたからだ。

一方、1人の眼鏡をかけた少年は眼鏡をなぜか油で揚げ、1人のチヤイナ少女は酢昆布にいちご牛乳をかけていた。

ぶっっちゃければ、めっちゃくちゃ動揺していたのである。

積もる話が多すぎるともう分かんなくなる（後書き）

晶の元ネタが誰か分かりますよね。

銀魂に歴史を踏んだ女性キャラを出すとしたらこの名前しかないと思っていました。

・・・にしても、展開早過ぎないか・・・？

前の話題をじっくり引きずるヤジっているよね（前書き）

打って変わって視点は真選組です。

前の話題をしつこく引きずるヤツっているよね

ここは真選組屯所のとある一室。

天気も良く、空には雲がぽかりぽかりと浮かんでいるだけで、なんとも平和な雰囲気が漂っていた。

屯所のどこからか、活気のある稽古の掛け声も聞こえてくる。

だが、その部屋には平和な雰囲気になぐわぬ雰囲気にも包まれていた。

「……んで、何か分かったのか？」

ふう、と煙草の煙を吐き出したその人物は、真選組副局長、土方十四郎。

数多の女性を虜にする端麗な貌に、今は鋭い表情を浮かべている。

「今のところは何にも分かってない状態ですね。」

目の前に座っている地味な顔をした青年、山崎が答えた。

真選組の監察である彼は、本当に真選組かと疑いたくなるほど地味で特徴が無いが、だからこそ今まで危険な諜報的な任務もこなせてきたのだろう。

「本当に噂だけで、何の尻尾も掴めないんです。ていうか、何でこんな噂が流れているのか不思議ですよ。」

「……ま、そーだろーな。」

土方は特に責める様子も無く、虚空を見つめて言った。

「鬼兵隊が動き始めているのは事実のようなんです……不明確な点が多すぎます。」

「ああ、分かってるよ。」

そう言つて土方は煙草を最後に思い切り吸い込むと、灰皿で火種を潰した。

「じゃあ、それとは別件だ。・・・万事屋と攘夷志士どもの関わりについて、何か分かったか？」

山崎ははあ、と溜息をついた。

真選組が関わる前に終わつた、紅桜の事件。あのあと、山崎は土方に「万事屋について調べろ」と言われて一応できる限り調べて、報告書（というか作文）を提出した。
が、すぐに土方に「ふざけんな」と報告書（作文だけど）をたたき返されてしまった。

その後、暇を見ては万事屋について調べていたのだった。

「調べられる限り調べましたけどね・・・少なくとも今は攘夷活動を行っている証拠は無いですよ。桂とは何らかの関わりを持っているらしいですけど。」

「・・・今は？」

「・・・ちよつと、気になることが出てきましたね。」

山崎はいったん息を吸い込むと、話を切り出した。

「副長、攘夷戦争に参加した4人の英雄を知ってますか？」

「あ？確か・・・」

狂乱の貴公子 桂 小太郎

螺旋竜 坂本 辰馬

闘鬼 高杉 晋助

白夜叉

だろ？」

「はい、ですが、白夜叉に関しては一切が謎で、誰だか分からない・・・と思ってました。」

「思ってた？」

「攘夷戦争に参加したことがある人に、聞き込みに行ったことがあるんです。」

いろいろ質問したら、その人は知っていることを全て話してくれたのだ、というと、土方が珍しく感心したような顔をした。

「ほオ・・・攘夷戦争に参加してた生き残りがそもそも少ない上に、やつらは過去を語りたがらないって言うじゃねエか。どうやって聞き出したんだ？」

「腹を割って話したら泣いて哀れんで話してくれました。」

「・・・てめエ、何を話したんだ？」

「いえ、特に何も。ただ、『怖い上司がいてちゃんと聞いてこないと問答無用でぶっ殺される』って言ったんです。」

「あとで本当にぶっ殺してやる。とりあえず、続きを話せ。」

「やだなあ、嘘は言ってませんよ。それで、聞き込みをしたら・・・。」

—— 白夜叉・・・白銀の髪を紅に染め、戦場を駆ける姿はまるで夜叉みてエだった・・・。

—— それこそ修羅のように、紅い瞳をしててな・・・。

「白銀の髪に赤い瞳・・・か。」

「ちょうど万事屋の旦那にあてはまるんです。」

白銀の髪、ましてや紅の瞳をもつ輩など早々いない。

「桂や高杉とは恐らくその時代に知り合ったのでしょうが、今は攘夷活動とは完全に手を切っているようですね。」

「・・・そうか。ご苦労だったな、そして死ね。」

土方がジャキ、と刀を構えた。あ、さっきの言葉、本気だったんだ。

つてやベエヤベエ！本気だよこの人！

マジで殺す気だよ！

話をそらすんだ俺！何か、何か関連性のある話題・・・！

「そ、そういえば、もうひとつ、その人からおもしろい話を聞かして！」

「おもしろい話？」

土方が眉をピクリと動かしたのをこれ幸いに、山崎は話を続けた。

「ええ！実はかなり後期の攘夷戦争で、名を馳せたモンがいるとかで！」

「そんなモンの何が珍しいんだよ。多少名前の売れたヤツなんてい

くらでもいるだろうが。」

「はい。ですが、そいつは当時、どう見てもまだ12、3くらいの少年^{ガキ}だったそうで！」

「ガキ？何でそんなのが戦場にいんだよ。おかしいだろ。」

「そこらへんは詳しいことは不明なのですが・・・そいつ、鬼兵隊の副隊長やってたとか。」

「ふん、それで？」

「まだ子供なのに戦いぶりが尋常じゃなく強くて、まるで獣みたいだったそうで。」

ついた2つ名も、『藍獣姫』なんです！」

「は？姫？何でだよ、そいつ少年じゃなかったのか？」

「そこが変なところなんですよね・・・。」

山崎が言い終えると、土方はちよつと考え込んだ。

あ、やった、これ逃げられるっば

「まアいいわ。とりあえず山崎、死ね。」

くなかった。

前の話題をしつこく引きずるヤツっているよね（後書き）

話が急すぎやしないだろうか……。

ちなみに辰馬の「螺旋竜」と高杉の「闘鬼」は完全にオリジナルの二つ名です。

宴会大好きです。（前書き）

手話の動作がなくなったりしますが、気にしないでください。
作者がめんどくさくなっただけです。

宴会大好きです。

「すみません、取り乱してしまつて。」

「ちよつと慌てちゃつたアル。」

とりあえず眼鏡についた衣を全てこそぎ落とした新八が眼鏡をかけながら（まだ油っぽい）言えば、酢昆布いちご牛乳掛を食べて全部りバーズした神楽もすまして言つた。

「……（ストトト タタツツ パンパンツ）」

『いや、いきなりやつてきてこんな話をした私も悪かつた。そろそろ暇しよう。』

「え？帰るんですか？もうだいぶ暗いですけど。」

実は、動転した新八と神楽をなだめるのに数時間かかり、気がつけば夜の闇があたりを染めていたのだった。

「アツキーナ、こんな暗い時間に女が一人で歩いたら危険ヨ。泊まつていくヨロシ。」

『いや、でも……』

「銀ちゃん、いいよネ？」

神楽が銀時を見ると、銀時は面倒くさそうに答えた。

「ま、こんな話をしたあとじゃアな。心配になるのもしゃーねーよ。泊まつてけ。」

『しかし……。』

「晶、お前も分かっているだろう。もしも何かあったら……困るのは俺達ではない、お前だぞ。」

『・・・ああ、分かった。厚意に甘えさせもらっつ。』

そう言つて、晶は頭を下げた。

数時間後――。

「ぎやはははは！にしてもお前本当にどこで何してやがったんだよ！！！」

「え？ネクロゴンドでメガドライブしてた？あははははは！！！」

「酢昆布でギガドライブのメガドレインアルか？」

「違うぞリーダー！！肉球でギガドレインが天竺だ！ぶははははは！！！」

『・・・・・・・・・・なんでこうなった・・・・・・・・？』

何故か万事屋は宴会場と化し、床には酒瓶が転がり、晶を除く全員がグデングデンに酔っ払っていた。

銀時がどこからか酒を引っ張り出してきて、そのうち桂と飲み比べをすることになって、そうしたら2人が酔っ払って、止めようとした神楽と新八が巻き添えを食らって酒を飲まされ――こんなつた。

ちなみに晶は酒にかなり強いらしく、焼酎を5杯ほど飲んでいるが

頬に紅ひとつ差していない。

「ういつつく！おい、もっと酒・・・ってアレ？もう無いじゃん。」

「む。まだ足りんぞ！誰か買ってきて来い！」

「・・・仕方ない、私が買って来よう。」

「あ、じゃ私も行くネ。アッキーナ一人じゃ心配アル。」

「ごめんね、よろしくう！」

普段より遙かにテンションがあがっている男3人を置いて、2人は万事屋を出た。

「ふうふう・・・綺麗な月アル・・・。」

「・・・（スタタタタタタタ）」

『ああ、本当だな。』

（注意！神楽はなんやかんやで晶の手話が理解できるようになってるぞ！）

夜空には天蓋全てを光で埋め尽くそうとするかのように月がまぶしく光っていた。

神楽は隣に立つ晶をそつと見た。

月の光を浴びて佇んでいる晶は、この世のものとは思えぬほど美しい。

——しかし、やはりどこか、憂いを帯びている。

「あ・・・あのネ、アッキーナ！」

神楽が決心したように名前を呼ぶと、晶が「ん？」と言いたそうな顔で振り返った。

「アッキーナは、銀ちゃんたちとどこで知り合ったアルか？
・・・昔に、何かあったアルか？」

――昼間のときのように、晶の顔が凍りついた。

が、それはあくまでも一瞬で、すぐに哀しそうな笑顔を浮かべた。

「・・・（すいつ　くいつ）」

『何で、そう思ったんだ？』

「銀ちゃんと・・・同じ感じがしたアル。」

『同じ・・・？』

「辛い辛い・・・過去を背負って、世界をいっぱい憎んで、それでも・・・」

強く生きてる人ネ。

神楽がそういうと、晶は一瞬驚いたような顔をした。
が、すぐに笑顔になった。

さっきのような哀しい笑顔ではなく、大輪の花が咲き零れるような

美しい笑顔。

「・・・・・・・・（へっ）」

『ありがとう・・・・・・・・。』

「ほら、早く大江戸マートに行くネ！」
『あ、ああ分かった。走ろうか。』
「OKアル！」

2人で走りながら神楽は考えていた。

あんな哀しい顔で微笑まれたときに悟った。
この人は今、何も語ってはくれないだろうと。

——でも、それはあくまで——今<いま>だ。

この人が、自分から話してもいいと思ったときに、黙って聞いてあげればいいんだ。

月が、笑いかけるようにまぶしく光っていた。

宴会大好きです。（後書き）

誰か・・・。

誰か話の構成力を私に分けてくれ・・・。

赤と青が混じれば紫だけど、藍色だったら？

「ふわぁ・・・大江戸マート、閉まる寸前だったネ。」

「・・・（がさがさ ストツ ブンブン）」

『これだけ買って帰れば、切らすことはないだろう。』

一升瓶に入れられた日本酒を何本も抱えながら、2人は大江戸マートを出た。

「ふぁぁぁぁ・・・そーだ、アッキーナ！」

「・・・？」

「海でも見に行くアル！」

神楽は思いついたように言うと、晶の手を引っ張って走り出した。

「・・・（うみ・・・？）」

大江戸湾の夜の海は昼間とは別の輝きを放っていた。

昼の海が透明感あふれるサファイアの輝きだとするなら、夜の海は光を星のようにちりばめて輝くアメジストのように美しい。

「うつほー！やっぱり海は綺麗アルなー！」

「・・・。」

何の反応も取らずにじっと海を見つめている晶に、恐る恐る声をかける。

「・・・アッキーナ、もしかして海が嫌いアルか？」

その声で我に返ったのか、はっとしたような顔になった。

「……………（ブンブンツ キュイ パタパタ ビシツ）」
『いや……………そうじゃなくて、初めて海を見たものだから……………』
「アッキーナ、海を見たことが無いアルか？」
「……………（こくつ）」

そう答えたあと、晶はまた視線を海に戻した。

「意外アル。なんとなくアッキーナは海の女って感じがしたネ。」
「……………（ビシツ ふわっ）」

『私が生まれたのは山だったから。育ったのも、今まで見てきたのも山や内陸部ばかりだ。』

「ふゝん、そうだったアルか。」
ちよつと神樂がにやけた顔になる。晶は「？」という顔をした。

——過去を少しでも語ってくれたことで、晶が心を開いてくれたみたいで嬉しかった、というのはここだけの話である。

そうやって海を眺めながら話しつつ、数分がたっただろうか。
もう帰ろう、と思って周りを見渡した神樂は、妙なものを見つけた。
男が一人、歩いているのである。いや、もちろんそれだから妙というわけではない。

妙なのは男が腰に刀をさしていること。廃刀令が出ているこのご時世に刀を腰に差しているものなど、真選組か、攘夷浪士しかないないが、男は真選組の隊服を着ていない。

ろっが。

「ど、どうしようアッキーナ・・・！」

「・・・（ビシッ　くいつ）」

『お前は万事屋に戻れ。』

「アッキーナはどうするアルか？」

晶はビシッと舟を指差した。その瞬間、手話を使つまでも無く、神楽は晶の意図が分かった。

「一人で乗り込むつもりアルか！？駄目アル！殺されるかもしれないアル！」

宇宙最強の傭兵部族、夜兎の神楽でさえやられてしまったのだ。

今の舟にあのときいた連中がいるかは分からないが、なんにしる危険すぎる。

「ちょっと待つアル、銀ちゃんを呼んでくるネ！」

立ち上がるうとした神楽を、晶が止めた。

「・・・（わらわらわら　ふらふら　ぶちっ）」

『呼んでどうするつもりだ。今のあいつらはグデングデンに酔っ払っている。それに、呼んでいる間にやつらが別のところに行ったらどうするつもりだ。』

「・・・！！」

確かにそのとおりだ。

「・・・（くいつ　ばたばた　しゅっ）」

『私が中に乗り込む。大丈夫だ、絶対に帰ってくるから。』

「で、でモ！」

なおも言い募る神楽を無視して、晶は話を（手話で）続けた。

「……（まるっ いち にくいっ ぶんぶん どたどた）」

『明日の正午になって私が戻ってこなかったら、銀時たちにすべてを話せ。そして、ここに来い。』

「でモ………！！！！」

「……（がしっ くいっ ぱたん ブンブン）」

『いいから！私はそんな簡単にやられる女じゃない。』

「………分かったアル。」

肩を掴まれ、どこか必死な目で見つめられ、神楽はとうとう折れたのだった。

赤と青が混じれば紫だけど、藍色だったら？（後書き）

何か・・・紅桜の話と似てないだろうか・・・。

予備っつーのは何かと役に立つもんだ（前書き）

・・・あの、昨日気がついたんですが、晶の名前、「黄泉魂」を
かいている晶さんと字も読みも一緒でした。

気がつかなくてすみませんでした。わざとではなかったんです。

予備っつーのは何かと役に立つもんだ

神楽が走り去ったあと、その小さな背中が見えなくなるまで晶は見送っていた。

完全に見えなくなった後、もう一度、舟を見た。

見れば見るほどかい。だが、幕府公認の印がついていないところを見ると、やはりただの船ではない。
船から音が殆どしないのも不気味だった。

晶は深く、静かに深呼吸をすると、音を立てずに船に入っていた。

（広いな・・・。）

外見に違わず、その船の中はとてつもなく広かった。
晶が入った倉庫のようなところはかなり広く、あちこちにつन्दあるコンテナが小さく見えてくるほどだった。

（爆弾はないのか・・・？）

爆発テロに使うという爆弾らしいものはおいていない。
火薬の臭いはかいだことがあるから、それらしいものがあれば分かる。が、それらしい臭いが全く無い。

（どうなっている・・・？）

そう思いながら晶がコンテナの角を右に曲がると――。
(何だ、これは!?)

そこにあつたものは、全長が約25メートルはあろうかという巨大な何かの塊だった。
全体を黒いビニールシートで覆われているためにそれがどういうものなのか、よく分からない。

が、晶の勘が告げていた。

コレハ危険ダ。

触ツチャダメダヨ。

ソレノ全体カラ凄マジイ陰ノ気が発散サレテル。

(これ、爆弾か? 火薬の臭いが全く無い。でも……。)
爆弾なんかより遥かに危険なものだ。
何なんだ!? 鬼兵隊はこれを使って何をしようとしている!?

晶の背中を冷たい汗が流れ落ちた、刹那。

「！！！！！！」

突如感じた、ピリピリとした殺気。

瞬間、晶は後ろに跳ねた。次の一瞬、晶が立っていたところに銃弾の雨が降り注ぐ。

「あー！外れたッス！ちくしょー、せっかく気配を殺して近づいたのにー！」

コンテナの影から現れたのは、派手な金髪に大胆に肌を露出させ、両手に銃を構えた着た若い女。

鬼兵隊の『紅い弾丸』と言われる、来島また子だった。

「お前、何なんスか？鬼兵隊のモンじゃないッスね？侵入者ッスか

！」

「・・・・・・。」

「何か言えやコラアアアアアア！シカトかアアアア！」

何か言えといわれても・・・喋れないんだから仕方ない。

「ちっ！とりあえず死ね！」

ズガンッ！ズダダダダダダダダ！

また子の両手の銃から放たれる弾丸を後ろに跳ねてかわしていく晶。弾丸をよけることに関しては問題は無い。だが、

「ん？何の音だ？」

「銃の音だ！来島さんが発砲してるのか？」

「侵入者だ、侵入者がいる！」

銃弾の音があまりにも凄まじく、内部にいた連中に気づかれてしまったらしい。

（くそ！早くケリをつけて逃げなくては！）

遠く離れてまた子の弾を避けていた晶だが、一気に距離を詰める。

また子が一瞬ひるんだスキについて、左右に動いて攪乱させると、懷に飛び込んだ。

「！！！」

ドスッ

次の瞬間、また子の体が3メートルほど吹っ飛ぶ。

鳩尾に肘を思い切り叩き込んだのだ。

ついでに二丁拳銃を奪うと、反対方向へ遠くくに投げた。

（早く、逃げないと・・・）

すぐに走り出した晶。しかし、

「いたぞー！あそこだー！」

「侵入者だー！」

声が轟き、大人数の足音がバラバラと別々の方向から聞こえてくる。

まもなく、十字路に追い込まれ、全ての道をふさがれてしまった。

「何だ！？女か？・・・とりあえず生け捕りにしろ！いけ！」

「「「おおー！！！」」」

手に手に刀を持った男達が飛び掛ってきた。女だからといって手加減する気は無いらしい。

刀を構えて突っ込んでくる男の太刀筋を避け、首筋に手刀を叩き込み、鳩尾に肘を突っ込む。

小柄だが素早く動く体を利用した戦法だった。

だが、だんだんと限界が近づいてくる。

息は上がるし、敵は数限りなくあるようで、向かってくる男達が途切れる様子は無い。

（まずいな・・・このままでは・・・）

相手の体を捌きながら考える。そして、袖の内に手を伸ばし、あるものに触れた。

――使うか？

――いや、こんな雑魚相手に使うほどではない。

――第一、人が死んでしまう。

――もう・・・人が死ぬのは・・・。

晶がそうやって考えていた時、右腕に鋭いものを刺したような痛みが走った。

「・・・・・・・・!？」

見てみると、そこには大きな羽のついた針のようなものが深々と突き刺さっていた。
気づいたと同時に体が鉛をつけたように重くなり、意識が朦朧としてきた。

——何だ、これは!？

最後の力を振り絞って周りを見ると、コンテナの上に、誰かに支えられてまた子が立っていた。

「まっ、麻酔銃ッスよ・・・予備として、一応隠し持ってるんス・・・。」

——ああ、こうなるなら初めからあれを使えばよかった。

そう考えている意識も、闇の中に沈みつつあった。

予備っつーのは何かと役に立つもんだ（後書き）

似てる！似すぎてるよ、紅桜の展開に！
誰か助けてください。（土下座）

無くして諦めかけてた物が見つかる(テンション上がる(前書き)

そのうち番外編で神威と晶を絡ませたいと思っている今日この頃。

無くして諦めかけてた物が見つかるとテンション上がる

鬼兵隊の艦内にて、3人の男が月を眺めていた。

「河上さん、あれの用意は万端なのですか？」

おもむろに口を開いたのは、武市変平太。

生粋のロリコンで、巷で「ねえあの目どうなってるの？ていうか瞬きしてるの？」と噂されている男である。

「万端でござるよ、武市殿。やるときは、あれをターミナルに向かってぶつ放すだけでござる。」

河上と呼ばれた男は答えた。

素肌に革ジャンを羽織り、背中に三味線、そして「シャカシャカシヤカ・・・」と音の漏れるヘッドホンを耳につけ、サングラスをかけている彼は、「何あいつ？和風だか洋風だか統一しろよ」と見知らぬ他人にはよく思われている。

「クク・・・楽しい祭りになりそうじゃねエか。」

先ほどから黙り込み、煙管を揺らしていた男が楽しそうな笑い声をあげた。

年のころは20代後半。あまり高くはない身長に加え、包帯で半分が覆われているものの端正な顔立ち。細身の体は、逞しいというよりはむしろ華奢な印象を持たされる。

しかし、1つしかない男の眼は、狂った獣のそれだった。

敵に噛み付くと同時に己にも爪を立て、全てを破壊しつくさんとする獣。

彼の名は、高杉晋助——幕府から「もつとも危険な攘夷志士」と恐れられている第一級テロリスト。

派手なテロを好み、それに一般人が巻き込まれようと気にかかることは無い。
暗く破滅的で、しかしカリスマ性溢れる彼に、自然に人は集うのだった。

「ええ、確かにね……しかし高杉さん、あなた、どこであんなもの手に入れたんです？」

武市が不思議そうに問うた。が、口を開いたのは高杉ではなく河上だった。

「交渉したのは拙者でござる。なんでも天人あまんとの中の一部族、白狐族びゃうこの新型らしくてな。丁度実験台が欲しかったようで、タダ同然でもらいつけたのでござる。」

「なるほどね……実験を軽々しくできないほど、危険なものということですか。」

「ま、そういう取り方もできるでござる。」

クク、と笑い声がして、河上と武市が高杉を見ると、彼は肩を揺らして笑っていた。

「構やしねーよ。あれは、この腐った世界を終わらせるにはうつてつけどろーが。この醜い世界を醜く終わらせる・・・最高じゃねーか？」

振り返って2人を見た高杉は、何かに取り付かれたような眼をしていた。

「それに関しては異論はないですがね・・・。」

武市は空を仰いだ。美しい満月が輝いている。

「地球からの月が眺められなくなるのは、残念ですね・・・。」

「同感でござるな。宇宙からも見れるでござるが、地球で見るのはまた格別でござる。」

高杉も天を仰いだ。

「前にこの月を見たときは、かぐや姫でも降りてくるかと思ってたんだがな。とんだじゃじゃ馬姫だったぜ。今度降りてくるならかぐや姫の方がいいね。」

しばらく3人は黙り込んだ。しかし、ドアの向こうからばたと足音が聞こえ、

バアンツ！

「失礼します！晋助様、火急の用があつて参りました！」

ドアを勢い良く開け、駆け込んできたのはまた子だった。

「どうしたんです、また子さん。」

「あ、武市先輩！実は、侵入者が1人入ったんス！」

「侵入者？・・・全く、満月の晩は侵入者が多いでござるな。」

河上はやれやれという風に肩をすくめたが、高杉は無反応だった。

「今はどうしているんですか？殺しましたか？」

「いえ、麻酔で眠らせてあるんスけど・・・そいつ、やたら強くて軽く30人はやられたツス。」

「む？なかなかの手練であるようでござるな。どのような男なのでござるか？」

「いえ、男じゃないツス。自分と同じくらいの女ツス。」

高杉の肩がぴくりと動いた。

「女？もしかして男じゃ馬姫でござるか。」

「この前来たような可愛らしいお年頃の少女ではないんですね・・・。」

「黙ってください武市変態。で、どうするんスか？殺しまし」

また子は最後までいうことができなかった。唐突に高杉が口を開いたからだ。

「女だてらに1人で鬼兵隊の船に乗り込むたアいい度胸してんじゃねエか。顔が見てみたくなった。」

来島、と高杉が呼ぶとまた子は「はい!」と返事をした。

「その女をここに連れて来い。」

「はい、今すぐつれてきます!」

また子がバタバタと出て行った。約30秒後、

「こいつです!」

とまた子がドアをけて入ってきた。手でかなり大き目の手押し台車(柵つき)を押しており、その台車の上には、うつ伏せの状態になった若い女が乗っていた。

「む、顔が見えんでござるな。来島殿、悪いが仰向けにしてくれるか?」

「りょーかいッス!」

また子が足で適当に仰向けに転がすと、武市がまた子を嗜めた。

「また子さん、若い女性を足で蹴るとはあなたそれでも男ですか。」

「女ッス!何でそんな親切なんスカ!?そいつ、少女じゃないッスよ?」

「フッ何を言うのですまた子さん。少女じゃなくても、あなたよりずっと美人じゃないですか。」

「んだとゴルアアアア!!--!」

騒ぎ始めた2人を置いて、河上は女の顔を覗きこんだ。
深い藍色の髪、透けそうな肌に長い睫毛を見た河上は、ほうと息を
もらした。

「かなりの美人ではござらんか。まるでかぐや姫のようだ。本当に
このおなごが、30人もやったのでござるか？」

「嘘じゃないツスよ！自分が麻醉銃で打たなかったらどうなった
か！」

「ふむ・・・しかし侵入者は侵入者。どうするでござるか、晋助？」

河上がそこでようやく反応の無い高杉を見た。

「晋助？一体どうしたでござる？」

河上の不思議そうな声に、来島と武市も喧嘩をやめ、高杉を見た。

高杉は、珍しく瞳を見開いて驚いた顔をし、女をただただ見つめて
いた。

しかし、やがて口角があがり、笑みを形作った。

その顔はまるで、長いこと無くしていたものを見つけたようだった。

「晋助様・・・？」

また子が高杉に呼びかけると、高杉はゆっくりと口を開いた。

「この女は殺すな。・・・来島、こいつを俺の部屋に今すぐ運んでおけ。武市、お前もだ。」

「え？・・・はいっ！りよ、りよーかいッス。」

「何で私まで・・・。」

来島と武市があわただしく出て行くと、高杉はもう一度月を見上げた。

「昔の知り合いでござるか？」

河上が問うと、高杉はぼそりと呟いた。

「月に帰ったかぐや姫が、戻ってきたってところだな。」

その顔にほんの少しの悲しみがよぎったのを、河上は見逃さなかった。

無くして諦めかけてた物が見つかるテンション上がる(後書き)

うん・・・。

高杉は動かしづらいなあ・・・。

町ではったり知り合いに出くわすと話すことが無い

神楽はポテポテと歩いていた。

「アッキーナ……。」

晶に気おされるようにして走り出してから、10分はたった。
でも、段々と頭の中をもたげてきた黒い暗雲に、足は自然とのろ
ろと遅くなった。

——もし、私が銀ちゃんを呼びに行ってる間に、アッキーナが
やられちゃったら？

——全てが手遅れになってしまっていたら？

そんなことを考えているうちに、神楽の足は止まってしまった。

「駄目アル……駄目アルヨ、アッキーナ……。」

——あれだけ大きい船だ、恐らくあの船には幹部達が乗ってい
る。

——そしたら……銀ちゃんたちを呼んでも、勝てるか分から
ない。

引き返そうか？

そう思って踵を返しかけた足が止まった。

—— 本当に、本当に幹部達が乗っているなら、私が行ったところでどうにもならない。

「どうすればいいアルか……。」

涙腺をちよつとでも緩めれば泣いてしまいそうな自分が情けなくて仕方ない。

追い詰められている。それは事実なのだ。

神樂がぐいつ顔を上げたそのとき、100メートル先に人影が見えた。

「!?!?! アイツは!」

「え・・・・・・・・・・？」

恐る恐る振り返った瞬間。

「ジミイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！」

「うぶおつつつつ！！！」

腹に思いっきり抱きつき（ていうか殺人頭突き）をかましてきた赤い塊と共に、山崎は思いっきり後ろにすっ飛ばされた。

「な、なにす・・・・。」

「ジミー！お前で良かったアル！この状況では一番役に立つネ！」

「つて、え？神楽ちゃん？」

赤い塊をよくよく見てみれば、万事屋の居候、神楽だった。

「なんでこんなところにいるの？」

「そんなことどうでもいいネ！それより、それより・・・・！」

顔を上げた神楽が急にぼろぼろと涙をこぼし始め、山崎は焦った。

「え！？ちょ、何があったの？」

「早く、早くしないと、晶がア・・・・・・・・！」

とりあえず山崎が為すべきことは、泣き始めた神楽を宥め、少しずつ話を聞きだすことだった。

「え！？鬼兵隊の船！？マジで！？」

何とか座り込んだ神楽を宥めて（ソーセージあげたら落ち着き始めた）、話を聞きだした山崎は驚いた。

——鬼兵隊が！？いきなり江戸に！？何でだ？

「今はそれより晶アル。やばいことになってるかもしれないネ。」
「いまだに涙目でもっしょもっしょとソーセージを頬張っている神楽が答えた。」

「ていうかその晶って人、一人で乗り込んで行っちゃったの？何で？止めなかったの？」

山崎が立て続けに質問すると、神楽はうつむいてしまった。

「理由は分からないネ。でも、船が鬼兵隊の物らしいって分かったとき、晶の顔色が変わったアル。ヤメヨウヨって言ったのに、聞かなかったネ。必死な顔、してたヨ……。」

あのときの晶の必死な顔を思い出す。

何かに追い詰められたような、焦ったような顔。

——鬼兵隊の連中に、大切な人でもいるのだろうか。

黙り込んでしまった神楽を山崎はしばらくじっと見つめていたが、

やがて腰を上げた。

そして、座り込んでいる神楽に手を差し伸べた。

「とりあえず、この話は俺だけの手には負えない。とりあえず、真選組に行こう。」

「え……？」

神楽が戸惑ったような声を出すと、山崎は苦笑いした。

「いつもいつもふざけてるように見えるかもしれないけど、俺達は立派な警察なんだ。」

「悪者達の成敗と、一般市民の平和を守ることが、仕事なんだよ。」

神楽は山崎の顔を見た。いつもは気弱そうで地味な顔が、今は強い瞳をしている。

「……ジミーのくせに、生意気アル。」

神楽が山崎の手を握って立ち上がると、山崎はにっこり微笑んだ。

町ではったり知り合いに出くわすと話すことが無い（後書き）

神楽はいつも大人ぶっているような子ですが、いざというときは素直に大人に頼る子なんだと思います。

どんな用件にしろ呼び出されるのって肩身が狭い

水に沈んだ物体が浮かび上がるように、眠っていた銀時の意識は浮上してきた。

「っ・・・痛エなあ・・・。」

ガンガンと痛む頭を手でさすりながら起き上がり、ゆっくりと辺りを見回すと、どうやら今のソファで眠っていたらしい。新八と桂が床やソファに寝ているのが見えた。窓から射す日光の具合から、どうやら昼の12時くらいであることが伺える。

「えーっと、昨日は確か、酒飲みまくって、酔いつぶれて・・・。」

「ていうか何で酒飲んだんだっけ？神楽は？どこ行った？

「っーか誰かが来たような・・・。」

頭の中にぼんやりと浮かんできたのは、藍色の髪をした――

思い出した！酒が足りなくなっって神楽と晶に買い出しに行かせたんだった！

あの2人は！？どこにいるんだ！？まさか帰ってきてないのか！？急いで隣の部屋を見に行くと、そこには誰もいなかった。

ジリリリリリリリリリ！ジリリリリリリリリリリリリ！

銀時が本気で焦り始めたそのとき、滅多にならない黒電話が元氣よく鳴り響き始めた。

「はい、万事屋です！」

飛びつくように受話器を取ると、受話器から流れてきた声は想定外の声だった。

「……………あ、ああ、分かった。すぐに行く！」

一通り話した後、銀時はたたきつけるように受話器を電話に戻した。

「おい、新八！ヅラ！さっさと起きろ！」

足で寝ている新八と桂を蹴っ飛ばして起こす。しばらくして、もそもそと、

「んん、何ですか銀さん。今何時ですか？」

「肉球……肉球はどこだ……。」

銀時と同じように痛む頭を抑えながら、2人がようやく起き上がった。

「あれ、僕、昨日泊まっちゃったんですか……姉上に連絡入れるの忘れてた。」

「むう……俺らしくもない、昨日はだいぶ酔っ払ってしまったらしいな……。」

まだ寝起きでぼんやりしているらしい2人に、銀時は単刀直入で言った。

「神楽と晶が昨日の晩、酒を買いに行かせてから戻ってきてねエ。」

その言葉に、2人の顔色がみるみる変わっていく。

「え？本当ですか！？何で！？」

「ま、まさか鬼兵隊に関わったのでは・・・！」

動揺する2人に、さらに銀時は言葉を重ねた。

「晶はどこに行ったか分からねエが・・・神楽は昨日の晩から真選組の屯所にいるらしい。」

「え？何ですか？」

「理由は知らないが、とりあえず俺は神楽を迎えに行ってくる。・・・話したいこともあるらしい。」

「ぼ、僕も行きます！」

慌てて新八が立ち上がると、桂もすつくと立ち上がった。

「俺も行こう。リーダーや晶がどうなったのか知りたい。」

「か、桂さん！？何言ってるんですか、あなた指名手配犯ですよ！？」

「そーだゾラ。てめえはおとなしくここで待ってる。」

珍しく「帰れ」ではなく「ここで待ってる」という言い方をした銀時に、ただならぬ緊迫感を感じた。

「ヅラじゃない桂だ！それに関しては心配はない。変装をしていく。」

「「変装・・・？」」

「もうそろそろ着くな。」

「いや、あの、桂さん。その格好、指名手配犯じゃなくても不審人物として捕まるような・・・。」

「そーだヅラ。何でよりによってそんな格好なんだよ。まだヅラ子とかの方がマシだ。」

銀時と新八が苦々しく見つめていた桂の格好は――

「だって、この方が入りやすいではないか。」

「いや、確かに前に土方さんにはめっさ食いつかれてましたけど・・・何でマリオなんですか。」

「マリオじゃないカツオだ！」

「もーいーよ。確かにそのカツコの方が入りやすいよ。それでいい

よ。」

そんなこんなで銀時、新八、マリオ・・・じゃなかったカツオが話している間に、真選組屯所が見えてきた。

そして、門の前に人が立っているのが分かった。

3人が近づいていくと、その人物が煙草の煙と共に言葉を吐き出した。

「よオ万事屋。酒臭エな、昨日どれだけ飲みやがったんだ。」

「うつせーよ。テメエには関係ねえだろ、多串くん。」

「誰が多串だコラ。関係あるから言っただるが。」

門の前に立っていた人物——土方は3人を正面から見据えた。

「・・・まあ良い。とりあえず中に入れ。」

「お邪魔しマース。」

「フン、相変わらずバ・・・あれ！？何時ぞやのマリオが何でここに！？」

「俺の知り合いなんだよ。中に入れてやってくれ。」

「そ、そうなのか・・・あの、サインくれませんか？」

「いや、サインはちよつと・・・。」

「しつこいですね、土方さんも。」

何やかんやでいつものノリで屯所内に入っていく一同。

銀時の隣に並んだ土方が、ぼそりと囁いた。

「鬼兵隊がらみの話だ。どうやらテメエらの知り合いが、鬼兵隊の船に乗り込んでいったらしい。」

どんな用件にしろ呼び出されるのって肩身が狭い（後書き）

話が全然進展しないよ（泣）

他人の子供を宥めるのって大変だ（前書き）

週間アクセス数が増えて嬉しそうです！

他人の子供を宥めるのって大変だ

昼間に屯所を飛び出した山崎が万事屋のチャイナの手を引いて戻ってきたのは、夜中の2時ごろだった。

たまたま外で見廻りをしていた総悟がそれに気がつき、いつものようにチャイナにちょっかいを出そうとしたらしいが、何を言っても噛み付き返してこなかったらしい。

どこか萎れていて、幼い子供のようにただ山崎の手をギュッと握り締めていただけだったという。

その雰囲気になだらぬものを感じた総悟は、寝ていた俺を起こ（枕元でバズーカをぶっぱな）して、2人を俺の前に連れて来た。

とりあえず山崎をたたっ斬ろうとしたが、丁度帰ってきた近藤さんに「まあまあ」と、宥められ、山崎が「チャイナの話聞いてほしい」と言っけきやがったから、仕方なく話をきくことになった。

どうせ万事屋と大喧嘩して家飛び出してきたんだろうと思っていたが、手に持っている酒瓶が妙だった。

——そして、チャイナがぽつりぽつりと話し出した内容に、真選組はひっくり返るほどの大騒ぎになった。

「——つーわけで、まアこんな感じだ。」

「いやいやいや、何が『こんな感じ』なのかさっぱり分からないからね？多串くん。」

土方が一通り、神楽が真選組屯所に来たわけを説明したが、結局のところ、何がどうなっているのか分からない。

今、銀時ら3人は土方に案内されて屯所の廊下を歩いている。

「そういえば、なんだか屯所内が騒がしいような・・・。」

新八があたりを見回しながら言った。確かに、いつもと比べてバタバタと物音がうるさいし、隊員たちがやたらに走り回っている。

「んで、神楽がいる部屋はどこだ？」

「もうそろそろだ。・・・あ、着いた。」

土方が襖を開けると、そこには珍しく正座してうつむいている神楽と、その正面に座っている山崎と総悟がいた。

「よオ、神楽。何かあったのか？」

銀時がいつものように呼びかけると、神楽はガバツと顔を上げた。みるみる内に眼が潤んでいく。

「銀ちゃん・・・新ハイ・・・ツラア・・・！」

次の瞬間、神楽は銀時に抱きついていた。

「うわあああん！アッキーナがア、アッキーナがアア！」

「ちょ、ちよつと待て神楽。何があつたのか説明しろ！」

「落ち着いて、神楽ちゃん、晶さんはどうしたの？」

「リーダー、んまい棒をやろう。」

ひつく、ひつくと泣きじゃくりなが（んまい棒かじりなが）ら、神楽は昨晚あつたことを説明し始めた。

「・・・あのバカが。一人で乗り込んで行きやがったのか。」

神楽の話を聞き終わってすぐに、銀時は舌打ちした。

「昼の１２時までに戻ってくるって言ってたアル。でも・・・ずっと戻ってこないヨ。」

「晶さんに、何かあつたんだ・・・。」

新八と神楽がうつむくと、それまで黙っていた桂が口を開いた。

「その船があつたとかいう場所には、行ってみたのかね？多串くん。」

「

「土方です、マリオさん。いや、一応その場所に隊員を派遣したんですけど・・・。」

大勢の隊員が行ったとき、船はすでになかった。いや、いなくなる直前だった。

遠目にだが、確かに飛び去る巨大な船が見えたのだという。

その船には、幕府公認の紋章がついていなかったそうだ。十中八九、巷で騒がれている鬼兵隊の船に違いない。つまり、鬼兵隊が動き出したということである。

「つまり、その晶とか言うヤローは、船に乗ったままだつてことさア。約束を守れてねえってことは、恐らく中にいた連中にとっ捕まったんだらうよ。」

総悟がため息と共に言うと、たちまち神楽は意気消沈した。

「私のせいアル。あの時、無理やりにも止めればよかったネ……。」

「かつ、神楽ちゃんのせいじゃないよ!」

神楽を慰め始めた新八を尻目に、銀時は桂に話しかけた。

「ヅラア、どうするよ。」

「ヅラじゃないカツオだ。どうもこうも……情報が少なすぎる。」

「だが、ひとつだけはつきりしてることがあるぜ。」

「何だ?」

「高杉^{アイツ}が……晶に会ったら……何するか分かんねエぞ。」

「!!--!!」

少し焦ったような顔の銀時を見て、桂は息を呑んだ。

「くそつ……アイツを外に出すべきじゃなかった!」

桂がドン、と壁を叩き、後悔するように怒鳴った。

「あのとき・・・アイツは俺達が引き取るべきだった！」
「無理だよ。」

激しく後悔している桂に、銀時はぼそりと呟いた。

「アイツは何を言っても、高杉についていったらうな。」

その後ろでは、土方、総悟、そして山崎が、2人を鋭い眼で見つめていた。

他人の子供を宥めるのって大変だ（後書き）

読みにくい気がする。

自分を語ってもいいが、他人を知ったように語るな（前書き）

何か、この話、かなり長くなる気がする。
気がするって言うか、もはや確定。

自分を語ってもいいが、他人を知ったように語るな

落ち込んだ神楽と新八が別室に移ってから、土方は口を開いた。

「さつきからお前らの話を聞いていると、テメエらや晶ってヤローは高杉と関わりがあるらしいな。

……知ってること全部、話してもらおうか。」

「何でテメエなんかと話さなきゃいけないんだ、あゝあ？」

早速睨み合いを始めた2人を止めたのは、桂……じゃなくてカツオだった。

「やめろ銀時。多串くんは警察として間違ったことは言っていない。

「土方です、マリオさん。」

「でもよオ、ツラ……」

「ツラじゃないカツオだ。多串くん、君が警察として職務を全うしようとしているのは分かる。だが、全てを語れというのは勘弁願いたい。自分のことならいい、だが……他人を知ったように語るのは、武士として恥ずべき行為だ。」

「ですが……。」

「やめときなせエ、土方さん。」

止めたのは沖田だった。

「ルイージさんが言ってることは間違ってますぜイ。話せること

だけでも聞いときゃいいでしょう。」

めずらしく正論を言う沖田に、土方も口を閉じた。

「とりあえず旦那とマリオさん、座ってください。」

山崎が言つと、2人はおとなしく座った。銀時はちゃっかり机の上にある饅頭に手を伸ばしている。

「じゃあ、まずは・・・テメエらと高杉の関係を教えろ。」

土方が言つと、銀時はじろりと土方を見た後、饅頭を頬張り、面倒くさそうに答えた。

「・・・攘夷戦争のときに、一緒に戦つてたことがあんだよ。」

「『白夜叉』としてか？」

その瞬間、2人の間に凄まじい緊張感が流れた。しかし、次の瞬間には、銀時は何でもないように

「何の話だかさっぱり分かんねエな。」

そついう銀時を、桂はじつと見つめていた。

「・・・まアいい。じゃあ、晶つてヤローは高杉の何なんだ？さっきの話の内容だと、道でばったり会つたような関係じゃないみてエだな。」

「それに関しては俺が説明しよう。」

それまで黙っていた桂が口を挟んだ。土方が頷いたのを見て、話を続ける。

「・・・晶は、高杉が戦場で拾ってきた子供なんだ。」

「は？何でガキが戦場なんかにいるんだ？」

「うつせーな、テメエに話す筋合いはねーだろ。」

「あゝあ？」

また喧嘩しそうになった2人を山崎がまあまあと宥めて、桂はさらに話を続けた。

「それに関する話は置いておくが・・・まあ、命の危機に瀕していたところを高杉が助けたらしくてな。」

命の恩人として、高杉のことをとても慕っていたんだ。」

「『いたんだ』？」

「・・・攘夷戦争が終わった後、アイツには帰るあてが無かった。だから、高杉が引き取ったんだ。」

「今はどうしてるんだ。」

「殆ど家出同然に高杉の元から飛び出して、静かに暮らしていると
言っていた。」

「攘夷活動には？」

「今は恐らく関わっていないだろう。争いごとが嫌いなヤツだったからな。」

「そうか・・・。」

土方は吸っていた煙草を灰皿で潰すと、桂に礼を言い、立ち上がった。

「とりあえずガキ共連れて帰れ。情報が入ったらまた連絡する。」

土方が部屋を出て行くと、山崎もそれに倣って出て行った。沖田も続こうとしたが、途中で振り返った。

「チャイナを門の前で見たとき、別人かと思いやしたぜイ。いじつてみても萎れるだけでつまないったらありやしませんよ。」

旦那、と呼びかけた。

「何だかよく分かりやせんが、晶ってヤローをさつさと連れ帰してください。真選組の仕事をこれ以上増やしたくないんでネイ。」

というと、出て行った。

「あれでヤツらは納得したのか？」

桂が銀時に問うと、珍しく真面目な顔で銀時が答えた。

「納得するワケねエだろ。だが、これ以上話すつもりなんざねーよ。」

銀時が言うつと、桂も頷いた。

「・・・俺達とはかく、^{アイツ}晶の過去は、ホイホイ話せるほど軽いモンじゃねーんだ。」

自分を語ってもいいが、他人を知ったように語るな（後書き）

・・・晶の過去、どうやって書いていこうかなあ・・・。

他人を説得するのは骨が折れる（前書き）

感想をひとことでもくださったら嬉しいです。

他人を説得するのは骨が折れる

別室にいた新八と神楽を連れ出し、4人は帰り道を歩いていた。相変わらず神楽は元気の無いままで、新八も困ったような顔をしている。

慰めの言葉は全て言い尽くした——そんなところなのだろう。

ぼてぼてと歩いていた神楽がピタリと止まり、3人もそれに倣った。

「銀ちゃん・・・新ハイ・・・ツラア・・・。」

すでに泣きすぎて腫れぼったくなった瞼に、雫がたまる。

「ゴメン・・・ゴメンネ・・・私がアツキーナを止めてたら・・・こんなことに・・・。」

今にも雫をこぼしそうに眼を潤ませていた。

だが、神楽の頭の上に、温かくて大きな手が2つ乗つけられた。銀時と桂だった。

「てめエが気に病むことじゃねーよ、神楽。」

「全くもってそのとおりだ、リーダー。船に乗り込んでいったのは、アイツの意志。アイツが選んだことだ。」

縫るように、神楽は2人を見上げた。

「晶のヤツ、いざとなったらてこでも動かないからなア。」
「うむ。冷静なフリをしておきながら、一度スイッチが入ると勝手に動き出す、困ったやつだった。」

「それに・・・」

「ああ、どれだけ止めようとも、晶は乗り込んでいったらうしな。」

「・・・高杉^{アイツ}に会うために、な。」

「うむ。」

——いいから！私はそんな簡単にやられる女じゃない。

「ねえ、銀ちゃん・・・。」

神楽が呼びかけると、「ん、どした？」といったものに気の抜けた返事が返ってきた。

「アツキーナ、船を見つけたとき、必死な顔してたネ。」

「・・・そうかア。」

「高杉と・・・昔何かあったアルか？」

新八は「神楽ちゃん・・・」と呼びかけた。

桂は、ただ黙っていた。

しばらくして、銀時が言った。

「アイツが帰ってきたら、その時に聞けよ。」

その言葉に、神楽と新八は満面の笑みを浮かべた。

「帰ってきたら」。助けるつもり、満々なんだ。

桂も後ろで苦笑している。

「オラ、とっとと帰るぞ。とりあえず情報収集でもすつか。」

「「はい!!」」

「フン・・・昔から本当に素直ではないな。」

4人の影が、長く伸びていた。

他人を説得するのは骨が折れる（後書き）

短い・・・話が進まない・・・

嫌な記憶をフツと思い出したりするのってやだ

—— しんすけ、しんすけ！

「晶、どうした？」

そういつて笑いながらぐしゃぐしゃと頭をかき回す大きな手。

—— 連れて行ってね、一緒に。

笑顔だった高杉の姿が変わった。派手な着物を着て、血の臭いをぷんぷんさせている。

—— その血の臭い・・・どうしたの？

「晶ア・・・天人も地球人も大差ねェんだよ。俺は壊していく。この腐った世界をな。」

—— え・・・・・・・・？

「ほら、お前も一緒に行くんだよ。」
血にまみれた手が差し出された。

—— 嫌・・・こんなの、しんすけじゃない・・・。

「そうか、お前まで俺を拒むか・・・なら好きにしろ。」
そう言つて、私に背を向けて歩いてゆく。

—— 何で・・・私を置いていくの・・・？

——嫌！置いていかないで！私を独りにしないで！

「なら、俺と同じ道来い。」

——そんな・・・無理だよ。

——だって、その道には、破滅の臭いがするよ・・・。

——ねえ、戻ろうよしんすけ！今なら間に合うよ！

「もう遅いんだよ。後戻りなんてな。進むことしかできねエ。」

——待つて、待つてよしんすけ！

しんすけはどんどん真っ暗な道を歩いていく。

そして、私の周りは完全な闇に包まれた。

——嫌だ・・・嫌だよ、しんすけ・・・。

——私は、どうすればいいの・・・？

「・・・・・・・・！！」

私は目を覚ました。麻酔薬の影響か、頭がガンガンと痛む。

「・・・・・・・・。」

ここはどこだ・・・？

窓を見ると、外はもう真っ暗のようだった。

起き上がると、体にかけられていた布団が落ちた。

あたりを見回すと、ここがどことなく暗い、しかし広めの部屋であることが分かった。

床には畳がきつちりと敷かれ、窓際には大きな机が置かれている。

部屋の入り口はどうやら障子になっているらしい。

あとは刀が数本壁に立てかけられ、箆笥が一つ置かれているだけで、殺風景な部屋だった。

そして、下を見て目に入っただのは、上質なものらしい敷布団と掛け

布団と。

両手についた、手錠。

足に重たい感覚があったので布団をまくれば、重い鉄球のついた足枷。

「!!!!!!!!!!」

がちがちと引つ張つてみても、当然のことながら取れない。

誰が、誰がこれを私に——？

「よオ、目エ覚めたか？ 晶。」

「!!!!!!!!!!」

顔を上げると、一番会いたくて、会いたくなかった人がそこに居た。

「5年ぶりか・・・久しぶりだなア？」

高杉晋助・・・いや、しんすけが。

狂った獣の笑みを浮かべて、部屋の入り口に立っていた。

嫌な記憶をフツと思い出したりするのってやだ（後書き）

短いッスね。

多分、次回は長くなる。

再会（前書き）

注意！

この先激しくは無いけどR15描写があります！
読んでもから文句言われても一切責任は負わないので気をつけてください。

しんすけがじろじろと私の顔を見た。冷や汗が流れると同時に、顔が赤くなるのを抑えられない。

「5年前はただの小娘だったかなア・・・随分いい女になったじゃねエか。」

「・・・・・・・・。」

ニヤリと笑って私の髪を手櫛で梳く。低めの体温が頭皮を通して伝わってきた。

幼いころは髪に触られるだけで嬉しくて仕方がなかったのに・・・今はその手から、微かな血のにおいがする。

そうやってしんすけはしばらく黙って私の髪を手で梳いていたが、やがて静かに口を開いた。

「5年前・・・何で俺の元から消えていったんだ？」

「・・・・・・・・!!!!」

言っただけで欲しくなかった言葉。同時に、言ってもらわなくてはいけないかった言葉。

「まだ喋れないままだったんだな。・・・まアいい。大方の予想はついてるしな。」

俺が怖くなっただんたろ？だから逃げただんたろ？」

「！！！！！！」

違う、と言いたかった。

手話でもいい、自分が5年前にしたことの理由を説明したかった。

私は耐え切れなくなり、しんすけの瞳をまっすぐ見据えた。

それがいけなかったのかもしれない。彼の瞳に映った私は、縋るような顔をしていたから。

気がつけば、世界が反転していた。

布団の上に頭が叩きつけられたせいで痛くはなかったが、少し状況が分かるまで時間がかかった。

上を見ると、そこにあっただのは天井ではなく、しんすけの顔だった。憎しみに駆られたような、悲しんでいるような・・・愛がその瞳をよぎったのは、気のせいだろうか。

「んな顔で、俺を見るんじゃないっ・・・！」

あっという間に顔と顔の距離が零になり、噛み付くような口づけが降ってきた。

「・・・んっ・・・！！」

唇がこじ開けられ、生暖かい舌が入ってくる。自分の舌も絡め取ら

れ、息ができない。

口内を荒々しく動き回る舌の動きを止める事ができず、だんだん力が抜けていく。

「ふ・・・・・・・・ん・・・・ふぁっ」

唇がようやく離されたとき、私は深い呼吸を繰り返しながら何故、と涙で潤んだ瞳でしんすけを見上げた。

「クク・・・そそる瞳してやがるなア、オイ。」

そう言うとしんすけは私の着物の襟を、一気に開いた。首筋から胸までが露になる。

「！！！！」

何とかして覆おうとする私の手をしんすけは片手でつかみ、頭上にまとめる。

「いい体してんじゃねエか・・・雪みてエに白い肌だな。」

そして、私の首筋に唇をよせた。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・。」

チリツとした痛みと共に、しんすけの舌が首筋を舐めてだんだん下降してきているのが分かり、背中にぞくりと何かが走った。

「声が出ないのは残念だがな、その表情だけでも十分おつりがくるぜ。」

その声で何とか体中の力を振り絞り、何とか逃れようとするが、所

詮は男と女。力の差は赤子でも分かる。

「無駄だ・・・抵抗したところで逃がしやねえよ。」

そう言つてさらに口が下降し、胸に到達した。

下着も剥ぎ取られ、胸の飾りを口に含まれる。

「・・・つつ・・・！」

「感じてやがんのかよ、ヤラシいなあ、オイ。」

くつくつと笑いながらなおもそこを舌と唇で愛撫し続け、左手で片方を揉みしだいた。

体の力が抜け、だんだん息が荒くなってくる。

空いている右手は膝から太股までをなであげ、裾を開こうとしていた。

「・・・!!!!!!」

突然膨れ上がった恐怖に、私の目からは自然と涙が零れ落ちていた。

こんなの・・・こんなの、昔のしんすけじゃない・・・。

いつの間にか私の意識はプツンと弾けた。

再会（後書き）

裏描写って上手く書けない。

人は死ぬまで歩き続ける生き物（テストに出るぞー）（前書き）

誤字脱字等があったら教えてください。

そんなこんなでもう3時。

（銀：作者って『そんなこんな』って言葉好きだよな、2回目じゃねえか。）

（新：いやでも、一番好きな言葉は（笑）だそうですよ。）

（銀：生粋の変人だな。）

（新：ええ、何でも『学校で一番のバカ』と自他共に認めている変人ですから。）

（作：すみませんでした。）

3人はまた万事屋に集合していた。

「いろんな人に聞いてみたんですが……。」
「びつくりしたアル。」

なんと、鬼兵隊の噂に関しては聞き込んだ人の殆どが耳にしたことがあるのだという。

詳しい内容は分からないが、近いうちに大規模なテロが行われるらしいということを、不安げに語っていた。

「そうか……。俺も地球屋に聞いてみたんだがな……。」

地球屋は裏の世界に精通している。一般人の耳にはなかなか入らない情報を持っていた。

——確かな情報ではないけどね、明日、大江戸ターミナルで何か起こすとか聞いたよ。とは言っても本当に一部のモンしか知らない噂だけだね。

——最も、他にもテロが行われる場所は噂でちらほら上がってるし、そんなに目立つところではあるとは思えないけどね。

「ターミナルですか・・・確かにテロを起こす場所としては目立ちすぎですね。」

「結局不確定な情報ばかりネ。」

2人がため息をついたが、銀時はどこか遠くを見つめながら言った。

「・・・高杉^{アイツ}は派手好きだからな。ターミナルは丁度よく目立つ。多分、標的はターミナルだ。」

「高杉さんのこと、よく知ってるんですね。」

新八が言うと、銀時は何も何も言わずに黙り込んだ。

その紅い瞳に映っているのは、無邪気に遊んで、当たり前のように共に居た幼少時代なのだろうか。

「とりあえず、明日、ターミナルに行ってみましょう。」

「そうネ。行ってみようヨ。」

2人が言うと銀時もようやく反応を見せた。

「・・・ああ。行ってみないことには始まらないな。」

そのとき、

ピンポン

「こんにちは、銀時くんいますかー？」
「ヅラかア・・・新八、開けて来い。」

はい、と言って立つた新八は約20秒後、桂を伴って応接間にやってきた。

「ヅラア、何か分かったことあるか？」

「ヅラじゃない桂だ。あまりいい情報は入ってこなくてな、難儀しているのだ。」

んだよ使えねえヤツ、と言い捨てた後で、銀時は告げた。

「明日、ターミナルに行くぞ。」

「いきなり何を言う銀時、そこにヤツが来るという確証でもあるのか。」

「無えよ。けど・・・。」

アイツなら、そういう派手なところでやりそうだと。

そういった銀時に、不意を突かれたような顔をする桂。しかし、すぐに

「ああ、アイツならそうするだろうな。」

2人の顔は、まだ子供の新八と神楽では読み取れないほど、複雑な感情をかもし出していた。

人肌のぬくもりが一番安心する

ゆっくり、あくまでもゆっくりと晶の意識が覚醒し始めた。

起きたはいいが目を開けるのも億劫で、目を閉じたままぼんやりしていた。

——ああ、起きなきゃなあ……。

——でも、眠いな……。

晶はとても温かくて心地よいものに全身を包まれていた。そのぬくもりが手放しがたくて、起きる気になれない。

——もうちょっと、寝ててもいいか……。

そう自分を納得させて、晶は目を閉じたまま温かいものにすりよった。

「んだよ、積極的だな。誘ってんのか？」

頭上から降ってきた声に、一瞬で眠気が吹き飛んだ。

ぱちりと目を開ければ、そこにあっただのは白い掛け布団ではなく、男の逞しい胸板。

恐る恐る上を見上げれば、ニヤリと唇を歪めた高杉が一つしかない目で見下ろしていた。

「起きたか。随分熟睡してたみてエだな。」

「——つつつつつ!!!!!!????」

反射的に飛び退こうとする。しかし、腰に回されている意外に強い手がそれを許さない。

それでもジタバタと暴れていたら、少しだけ緩められたので、とりあえず高杉と目を合わせた。

「……………」

晶のほうが高杉より背が低いので、どうしても見上げる形になる。つまり、あのニヤニヤ笑いのまま見下ろされているのだ。

真っ赤に染まった顔でどうにか睨むと、肩を揺らして高杉は笑った。

「ククク……寝顔の方が無防備で可愛らしかったぜえ？」

「!!!!!!」

——まさか、ずっと見てたのか!?

さらにジタバタ暴れると、ようやく手を離された。

刹那、布団から飛び出て壁際による晶。

どうやら添い寝していたらしいこと、寝顔を見られたことを知った晶の顔は、驚きとそれ以上の羞恥によってりんごの様に真っ赤に染まっていた。

高杉は相変わらず薄笑いを浮かべたままゆっくり起き上がった。

「何恥ずかしがってやがんだよ。小せえ頃はよく『怖い夢見た』とか言って布団にもぐりこんできたじゃねえか。」

——昔の話だ！昔の！！！

必死で否定のポーズを取りまくる晶を、高杉はしばらく面白そうに見つめていたが、やがて部屋を出るために襖まで歩き、ピタリと足を止めた。

「そうだ、この部屋は俺んだ。見張りをつけてあるから、逃げ出すとするんじゃねえぞ。」

振り返ることなく言っと、高杉は部屋を出て行き、襖を閉めた。

——え？しんすけの部屋？

——そうか、だからこんなに上質な布団も・・・。

ふっと自分の手元を見れば、はずれない手錠。

蘇って来たのは、昨日の夜の記憶。

「・・・・・・・・！！」

あのときのどうしようもない恐怖が蘇ってきて、思わず頭を抱える。

私、あの後気を失って・・・どうなったんだ？

何だったんだ・・・あのときのしんすけは・・・。

——んな顔で、俺を見るんじゃねえっ・・・！！

あときのしんすけは、間違いなく憎しみに駆られた目をしていて、それは仕方ない。憎まれても仕方の無いことをしたのだから。

——けど・・・さっきのしんすけは・・・。

まるで、昔みたいに優しさにあふれていたような・・・。
気のせいかな？気のせいなのか！？

——しんすけ・・・一体しんすけは・・・。

私のこと、どう思ってるの？憎んでは、いないの・・・？

[illegible]

「遅かったでござるな、晋助。」

「あア。ちよつとな。」

甲板には、万斎、また子、武市が集まっていた。

「計画に支障はねえな？」

「そちらの準備に関しては問題ありません。」

「いつでも出来るッスよ！」

威勢よく答えたまた子にククツと笑いながら、高杉は全員に告げた。

「計画は予定通り明日の正午に決行する。油断するなよ。」

「了解！」

全員がそう言う、高杉はどこかに歩いていこうとしたが、万斎がそれを止めた。

「待て、晋助。あのおなごはどうしたのでござるか？」

残った2人に緊張が走った。ずっと気になっていたが、聞けなかったことだ。

何より、下手なことを言えば生死に関わる。

高杉はしばらく黙っていたが、「俺の部屋に居る、逃がすなよ」とだけ言って、再び歩こうとした。

「あのおなごは、晋助の何なんでござるか？」

「じ、自分も知りたいッス！」

「私もですねえ。」

意を決してまた子や武市も言ったが、高杉は振り返ろうとはしなかった。そして、歩き出した。

「・・・あのおなこのリズムは不思議だ。とても澄んでいて凜としているが、どこか儚げで弱いところもあれば、濁流のように荒々しい。だが、芯が一本通っていてな、決して折れない強さを兼ね備えている。」

そして、と万斎は続けた。

「晋助のリズムと、波長が合っているのござるよ。」

「クク・・・そーかい。」

高杉は皮肉げに笑ってその場を後にした。高杉の姿が見えなくなつた途端、また子が頭を抱えた。

「あーもー、分かんないッス！あの女は一体何なんスカ！」
イライラと頭をかきむしるまた子。昨日は気になりすぎて、夜も眠れなかったのだ。

——あの女、一体何なんスか！？

「落ち着きなさいまた子さん。確かに妙ではありませんがねえ……。」

「

「晋助は言っておった、『月に帰ったかぐや姫が戻ってきた』と。かつて晋助と親しかったが、離れていった者だったのではないか？」

万斎が言つと、また子は怒り始めた。

「許せないツス！晋助様から離れるなんて何様ツスか！あの女、シメてくるツス！」

「落ち着けまた子殿。そうかもしれないと言っているだけでござる。」

「

万斎とまた子が言い争っていると、武市はやれやれと肩をすくめた。

「そんな言い争いをしてても仕方が無いでしょう。高杉さんは、『逃がすな』とは言いましたが、会いに行くなどは言いませんでしたよ？会つて、お話を伺ってみればいいじゃないですか。」

「……そうツスね。そうしましょう。」

「うむ。拙者も行くぞ。」

時刻は10時。テロまで、あと22時間。

人肌のぬくもりが一番安心する（後書き）

やってしまった・・・。

雰囲気になぐわないと分かっているけどどうしてもやりたかった
寝ネタ。

顔文字のφってどう検索したら出てくるの？

「・・・・・・・・・・。」

晋助の部屋だというところで、晶は何もすることが無く、暇を持て余していた。

最初は逃げ出そうとしたが、この船には晋助が乗っている。

何より、手錠と足枷がとてつもなく邪魔だ。

下手に逃げ出そうものなら、晋助は今度こそ何をするか分からない。なら、晋助がこの船からいなくなるまで待てばいい。

結論に至ったとき、「あれ？てことは今暇なんじゃね？」と晶は気がついた。

というわけで、ひたすら暇なのだ。

「・・・・・・・・・・。」

ぐきゅるるるる・・・・・・・・。

——お腹減ったなあ・・・・・・・・そういえばずっと何も食べてないなあ・・・・・・・・。

考えていると、突然、襖の向こうに気配がした。

「し、晋助様の部屋に入るの初めてッス・・・・緊張するッス！」

「あまり面白くないでござるよ。」

「酷く殺風景ですからねえ。」

「????？」

3人分の話し声が聞こえてきて、襖が突然開いた。

そこに立っていたのは、倉庫で襲ってきた女と、ヘッドホンをつけた男、目がイッちゃってる男だった。

女のほうは手に食事の乗った盆を抱えており、どん、と晶の前に置いた。

「よう、2日ぶりッスね、女。」

「!!!!????」

いきなりガン飛ばしてきた女に戸惑っていると、目がイッっちゃってる男が言った。

「およしなさいまた子さん。驚いていらつしやるでしょう。」

「うるさいッス武市先輩!この女は敵なんスよ!」

「でも、あなたより美人ではないですか。」

「いっぺん死んで来いやアアアアア!」

晶をそっちのけで喧嘩し始めた2人をよそに、ヘッドホンの男はジロジロと晶を見つめていた。

「ほう・・・こうして見るとやはり美人でござるな。おぬし、名前は何と言う?」

「そ、そうッス。名を名乗るッス!」

「.....」

「シカトかアアアアア!」

またもやギャーギャー暴れ始めた女を宥めながら、ヘッドホンの男は晶に言った。

「もしや、おぬし、喋れないのではないか?」

「……………（コクコク）」

「へ、そ、そうだったんスか？」

それを見たまた子がようやく落ち着く。

「む、どうりでな。本当に一言も言わないものだから変だとは思っていたが。」

「ふむふむ……あ、私、武市変平太と申します。以後よろしく。」
「拙者は、河上万斎でござる。」

「……来島また子ッス。」

——何なんだ、こいつら。本当に鬼兵隊なのか？芸人じゃないのか？

晶が当惑と疑いの眼差しを向けていると、また子が言ってきた。

「で、あんたの名前は？」

「……………（ひゅいつ　すとんっ　たっ　びっ　ぐっ　パタパタ）」

「手話で分かるかアアアアア！紙に書けやアアア！！」

「ほう、与謝野晶さんというんですね。いい名前です。」

「へ？先輩、分かるんスか？」

「舐めてもらっちゃあ困りますね。それでも私、宇宙手話解読検定の準2級を持ってるんですよ。」

「どこで取れるスんかその資格！」

言ってからまた子は、あれ、この台詞どっかで聞いたような？と首を傾げた。

「さて、そろそろ本題に入るとしよう。」

やっと真剣な声を出した万斎がそう切り出した。

「武市殿、通訳を頼む」と言つと、しばらくためてから口を開いた。

「——晶殿、おぬし、清純派アイドルとしてデビューする気は？」

「……は？」

予想外の言葉にしばらく絶句したあと、また子はヘッドホン侍にツッコんだ。

「何考えてんスカ！言うことが根本的に間違ってるツスよ！」

「いや、これだけの美人を放って置くのはもったいないでござろう。お通とユニットを組むとか……。」

「ふむ、確かにその意見には賛成ですね。」

「黙れ変態&ヘッドホン侍！！！」

「……（すたんっ たたんっ くいつ）」

『何言ってるのこの人（笑）』

「いやアンタも何言ってるの！？手話で話してんだよな！？なんで（笑）！？」

「そういわずに考えてみてくれ m（——）m」

「何やってんだヘッドホン侍！アンタも顔文字か！」

「……………(ぶんぶん)」
『(ゞノ・・・)(ムリムリ』

「どうやってんだアアアアア！何でそうなるんだアアアアア！」
「これだけ言ってるのに…… プンポン○(*＜△＞)○”()
」

「あんたも何やってるんだアアアアア！張り合ってるのか？張り合
ってんだろ！」

「……………(ストトツ)」
『なゝ(△)(ノん(△ノ)だゝ) (ノと(ゝ (こ
ゝ() (ノらぁ』

「テメエも張り合うなアアアア！さりげにクオリティ高いのがムカ
つく！」

「ノ)°。0?(ゝアリエナイ!!。0。(0?0)三(。0。0?)。0
ニヤニヤ・ジャニヤゝイ!!」

「いい加減にしるテメエらアアアアアアアアアア!!」

また子の大シャウトツツコミが炸裂した後、ようやく顔文字百連発
大会が終わった。

「……………んじゃ、本題に入るツスよ。」
こほんと咳払いをして、また子は晶にに詰め寄った。

「アンタ、晋助様の何なんスか？晋助様とどういう知り合いなんスか？」

「！！！！！！」

顔を歪ませた晶に、男二人が畳み掛ける。

「確かに女遊びの激しい方ではありましたがね、高杉さんは特定の女と深い関係を持つことはなかったのですよ。」

「晋助がおぬしを見たときの驚きっぷりも半端では無かった。どういう関係なのでござるか？」

しばらく晶は黙り込んでいたが、やがて答えた。

「………（どんっ すいっ）」

『………命の恩人だ。』

「………命の恩人………？」「………」

思わぬ回答に3人は拍子抜けした。

もつと何かこう、高杉に捨てられたとか幕府のうんたらだとかそういうのを連想してたのだ。

「………（ばたっ すちゃっ ヒュヒュヒュ すいっ）」

『しんすけがいなかったら私は死んでいた。……大切な、恩人なんだ。』

「そつでござったか………しかし、なら晶殿は晋助の元から離れた？」

「!!!!!!!!!!」

何でそれを知っている、という顔をした晶に、万斎は言った。

「『月に帰ったかぐや姫が戻ってきたってところだな』——晋助はそう言っていたでござる。」

「……（ぶんぶん　ストトタ　パン　ひゅい　ひゅっ）」

『かぐや姫なんて大したモンじゃないけど……私は……』

ただ、逃げただけだよ……。

哀しそうに言う晶に、3人は何も言わずに部屋を出た。

しばらく晶は動かなかったが、やがて盆に乗った昼食に手をつけ始めた。

「結局あの女、何だったんスか？」

「そりゃ、猪女より美人で、しかも丁度いいお年頃の」
「黙れ武市変態。」

万斎だけは何か考えているようだった。

「・・・少し、ほんの少しだけ調べるとするか。」

顔文字の^φってどう検索したら出てくるの？（後書き）

読みやすい文章の書き方を教えてください。

遠足の前は早く寝るんだぞ

〈万事屋〉

「うーい、明日は8時に家出るから7時半には集合だ。9時には寝るよ。」

「遠足じゃないんですから。」

「そうアル、晶を助けるきっかけになるかもしれないアルよ!」

「うん、そうだよな。じゃあ神楽ちゃん、その箱は何?」

「何って、酢昆布アル。」

「結局遠足気分じゃねーかアアアアア!」

「落ち着け新八くん。んまい棒あげるから。」

「「お前いつのまに居たの!?!?!」」

〈真選組〉

「何か、分かったことはあったか? トシ。」

「いや、山崎にも探らせたが、確かな情報は入ってない。」

「そうか。まあそうだよな……。」

「……嫌な予感がしますねイ。」

「どうした、総悟?」

「……なんとなくですが、明日、何かある気がするんですア。」

「当てになんねえなア。」

「何だよ、箆笥の角に小指ぶつけて死ねよ土方コノヤロー。」

「総悟オオオオオ表に出るオオオオオ!」

くまた子&武市く

「今日は月が見えませんか。」

「そッスねえ・・・あれ、万斎先輩は？」

「調べ物があるとかですよ。」

「ふん、そッスか。」

く万斎く

「これだけしか資料がないでござるか・・・流石にこの短時間では限度があるでござるな・・・しかし、殆どが不明ではないか。」

く晋助&晶く

「ククッ・・・今日は1日中部屋に居たのか。逃げ出すんじゃないかと思つてたんだかな。」

「・・・。」

「明日はいよいよ作戦決行の日だぜ。」

「!!!!!!」

「お前はここにいろ。そんで・・・この世界が壊されるところを見てろ。」

「!!!!!!」

「だがその前に・・・」

「???」

「一緒に寝るぞ、布団に入れ。」

「・・・!! (ブンブンッ)」

遠足の前は早く寝るんだぞ（後書き）

晋助のキャラが跡形も無く崩壊してる・・・。

夏のおやつにグミ持ってくと溶けるよ（前書き）

本当に夏のおやつにグミ持って行ったら、溶けました。

夏のおやつにグミ持ってくと溶けるよ

まあ何やかんやあって、万事屋一同&桂はターミナル前に集合していた。

（新：何やかんやって何ですか、何があったんですか。）

（銀：アレだよ、もう描写書くのが面倒になったんだよ。）

（新：曖昧な言葉好きなんですよ、作者は。）

（作：すみません、生まれてきて。）

（新：何だよそのネガティブな倒置法はアアアア！）

「あの、着いたはいいいんですが・・・どこから入るんですか？」

「・・・・あ。」

そういえばそうだった。ターミナルに行くことに重点を置きすぎて、どうやって入るか忘れていた。

関係者以外は入ることができないというのに。

万事屋一同が黙り込むと、桂がフツと笑った。

「心配するな、俺にちゃんとした案がある。」

カッシーン・・・カッシーン・・・。

「いやあ、桂さんが言うからどんなふざけた案かと思ってたんですが、今回はかなり真面目なシリラスパートらしいですね。安心しました。」

「俺はいつだって至って真面目だ！」

「つーか、作者のネタが底を付きかけてるだけアル。」

「こら神楽、それは裏の世界の事情だから言っちゃ駄目だぞー」

今、一同は地下水路を歩いていた。

ここからターミナルの地下につながる道があるからと、桂が案内してきたのだ。

前にターミナル爆破を計画していたときに、調べておいたらしい。

「む、着いた。」

桂はいったん立ち止まり、後ろを振り向いた。

「いいか、ここからターミナルの地下水路に入り、そこから天井裏まで忍び込むが・・・ここから先は私語厳禁だ。下手に喋って見つければ、どうなるか分からんぞ。」

桂の顔がいつになく真剣なのに気がついた3人は、ただ黙って頷いた。

（そーいや、テロに使うのってどんな爆弾なんだ？ふつーのやつか？）

（普通のってことはないでしょう。きっと、凄い破壊力のあるものなんでしょうね。）

（ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲くらいたるか？）

（だから結局何なのそれ？）

3人がいつものようなやり取りをしていると、桂がぽつりと声を漏らした。

（そういえば・・・風の噂で聞いたことがある。）

（（（???）））

（宇宙の彼方に存在する一族に、白狐族というのがあってな。武器の開発で有名な星なのだが・・・何でも新しい武器を開発して、どこぞの組織に売り渡したという噂だ。）

（んだよ、その新兵器って。）

（うむ、爆弾の類では無いらしいのだが・・・爆弾以上にやっかいな代物だという話だ。）

（え、どういことですか？）

（詳しいことは分らんが、何でも、人の心につけこむ種類の武器だと聞いた。）

（（（・・・？）））

「ヅラじゃない桂だ!!」

丁度換気口があつたので、銀時がそれを蹴破つて降りる。それにならつて3人も飛び降りた。窓から見たところによると、どうやら上の階まで来てしまったらしい。

いきなり現れた怪しい4人にかまうことは無く、天人も地球人も逃げていく。

「何だ・・・!?どうなっているんだ・・・!?」

桂が呟くと、突然背後から声が響いた。

「まだ残っている連中がいたのか!とつと出て行け!」

「「「「!!!」」」」

後ろを振り向くと、腰に刀を差した攘夷浪士らしい男が5人、銃を構えていた。

「貴様ら、鬼兵隊の者か・・・!」

「そんなことはどうでもいい!さっさと出て行け!」

「!?!?!」

—— おかしい。どこから忍び込んだかは知らんが、こいつらは鬼兵隊の連中だ。

—— テロを起こすというのなら、人質を取っておいた方がいいに決まっている。

なのに、何故追い出すんだ！？

「さっさと出てい……」

「やなこつた。」

「「「「「！！！！」」」」」

5人の浪士はあっという間に銀時に倒されてしまった。

「銀時、これは……。」

「分かんねエが、とりあえず行くぞ！」

「「はい！」」

「あ、ああ！」

銀時、新八、神楽、桂は階段に向かって走り出した。

夏のおやつにグミ持ってくと溶けるよ（後書き）

この後の話がなかなか浮かんできません・・・。

グロテスクって、どういう意味？（前書き）

テスト週間に入るのでこっから連載が2日に1回とかになってく
と思いますが、見捨てないでください。

グロテスクって、どういう意味？

「どうなってんだ、こりゃあ・・・！？」

大江戸ターミナルを見上げた土方は思わず声を上げた。

「ターミナルの近くに変な船が現れた」という通報を受けてきてみれば、ターミナルの付近は大騒ぎになっていた。

その船は最上階に近いところで止まり、開けられた着陸場から中に入ってしまったとのことだ。

——つまり、ターミナル内に敵がいて、そいつが手引きしたということ。

その船がばら撒いたらしいビラが当たり一面に散らばっており、それを拾い上げてみれば「鬼兵隊」の文字がでかでかと書かれていた。

——ちっ、こんな時間にテロを起こすとはな。

「俺の言ったとおりになりやしたねイ。」

隣では、総悟がターミナルを見上げていた。

「ああ、当たってほしくはなかったがな。」

「・・・妙だと思いませんかイ。」

「あ、？」

隣を見ると、総悟はいつになく真面目な顔をしている。

「ターミナルに上手く忍び込んだんだったら、中に居る連中を人質にとつて幕府にどんな要求でもすればいい。だが、中に居た連中は

皆追い出されてやがる。・・・高杉のヤロー、何を考えてるんでイ。

」

「確かにな・・・。」

「た、大変です副長！」

「どうした？」

慌てて走ってきた隊員に土方が問うと、堰を切ったように喋り始めた。

「中に忍び込んでいた鬼兵隊の者がやったらしく、ターミナルの窓、ドア、水路等全てがロックされています！中に入れません！」

「それこそバズーカでもぶっぱなしやあ良いじゃねえか。」

「い、いえ、ターミナルのガラス、壁などは全て特別製なので、簡単には壊せません！」

「じゃあなんだったら壊れるんでイ。」

「それこそ松平さんのまっちゃん砲でも撃てば壊れますが、そうした場合、江戸が火の海になります！」

「・・・万事休すってやつかよ。」

土方が忌々しげにターミナルを見上げると、てっぺんの付近に妙なものが見えた。

「総悟、てっぺんに何か見えねえか？」

「あ？瞳孔開きすぎな土方コノヤローの見間違えじゃないですかイ？」

「ちげーよ！！！！何か、黒っぽいような、紫みてエな・・・。」

「えー・・・ってホントだ、あった。」

総悟も見上げてみると、てっぺん付近に確かに黒っぽい物体が見える。

——ていうか、アレ…………。

「……何かどんどこなくなつて来てやせんかい？」

「んだありや！？生き物か何かか！？」

土方が目を剥くのも無理は無い。そのグロテスクな塊は、だんだん巨大化しつつあり、ターミナルのてっぺんを覆い尽くすまでになりつつあった。

しかも、凄まじく黒くて嫌な空気を辺りにばら撒いている。

その空気が下降し、土方たちの辺りまで届くと思わずその場に居た全員が顔をしかめた。

「何だこれは……嫌な気分になりやがる。」

「土方コノヤローが吐き出す煙草の煙吸い込んだときより嫌になりまさア。」

「とりあえず殺すのは後にしといてやる。」

土方は総悟に一応ツツコンでおいたが、どんどん酷くなる空気に鼻と口を手で覆った。

臭いとかそういうことではなく、空気そのものが酷く淀んでいて、むせそうになるのだ。

「おい、誰かマスク買ってこーい。」

総悟が叫んだが、返事は返ってこなかった。
代わりに来たのは、今にも泡を吹きそうなほど焦って走ってきた山崎だった。

「山崎、マスク買ってこいやー。」

「お、沖田隊長！それどころじゃないんです！ターミナルの上に乗ってるアレ！」

「あ？アレがどうかしたってのか？」

「副長！そ、それが、急遽調べてみたら、相当ヤバい代物で・・・！」

「！？？どういうことだ、詳しく説明しろ！」

「は、はい・・・！」

「・・・・・・・・と、言うわけなんです!」

「くそっ、マジかよ・・・・ヤベエじゃねえか!」

「どうしよつもありますんねィ。」

「言ってる場合か、下手したら・・・・・・・・。」

江戸どころか地球が滅びるんだぞ!

子供から目を離しちゃダメダメ

周囲の騒がしい喧騒で、晶は目が覚めた。

はっとして体を起こせば、傍で寝ていたはずの晋助（添い寝しようとか言われて断ったのに眠気に負けていつの間にか一緒に寝ていた）はどこにもいなかった。

日の入り具合から、まだ午前中であることが分かった。

——しんすけは、どこに行った？

注意深く、耳と神経を尖らせる。すると、喧騒に混じって誰かの声が聞こえてきた。

「高杉さんたちはもうターミナルへ出発したそうだ！」

「ところで、例の物は平気なのか？」

「大丈夫だ。ちゃんと途中で誤作動しないように船に積んでいったらしい。」

「とうとう、俺達の悲願が叶うな。」

「ああ、あれさえあれば、江戸の陥落なんてあっという間だ。」

——そうか、しんすけ達はもういないのか……。

晶は、袖の内にそつと手を伸ばし、何かを取り出した。

一見たところによると、ちよつと太目の鉄棒くらいの大きさしかない、円柱状のものだ。

——ならば、おとなしくしている必要も無い。

そう思い、行動を起こそうとした直後、部屋の片隅に置かれている文机に紙と墨、筆が置かれているのに気がついた。

しばらく躊躇った後、晶は筆を手にとった。

数分後——。

紙に何かを書き終えた晶は、立ち上がった。

——行くか……。

晶の瞳に、獣が宿った。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オン!!!!!!!!!!

突如船全体に響き渡った、凄まじい破壊音。

「なっ、何事だ!」

「船底の方から音がしたぞ!」

「行ってみよう!」

バタバタとたくさんの船員達が集まっていく。

「な——!?!」

船底に集まった船員達は、思わず我が目を疑った。

目の前で上がるのは、もうもつたる土煙。

船底に置かれていた色々な荷物は壊されており、あちこちに血を流した他の船員達が倒れている。

そして、土煙の向こうには、

直径2メートルはあろうかという槍を手に携えた、晶が立っていた。
いや、正確には槍ではない。

なぜなら、それには、棒の両端に青龍刀のような巨大な刃がついて

いるからだ。

返り血を浴びた晶はどこか冷たく、哀しげで、

美しかった。

「全員で取り囲め！そしていっせいに攻めろ！」

その掛け声で、船員達がいっせいに晶を取り囲む。

「や——」

やれ、と言おうとした男の声は、途中で止まった。

それは、晶を輪のように取り囲んだ一番内側の男達が、一瞬で血を流して倒れたからだだった。

中心で、晶は何事も無かったかのように檣についた血を振って払った。

あまりにも速過ぎて、目で追うことすら敵わない。

恐怖で動けなくなった男達に、何もせず、晶はただ進もうとした。

男達はその雰囲気圧倒され、道を割って彼女を通した。

「・・・・・・・・。」

晶が辿り着いたのは船で一番深いところだった。
そこには、2、3人乗りの小型の船が十数隻並んでおり、晶はその一つに乗り込んだ。

「・・・・・・・・。」

そして―――――入り口を開けると、船に乗って空に飛び出した。

火遊びなんてやっちゃいけません（前書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます！

できればお名前を教えて欲しいです！

火遊びなんてやつちゃいけません

ターミナルの最上階は、ガラス張りになっていた。

そこで、高杉たちは今もなお巨大さを増しつつある塊を眺めていた。

「どんどん大きくなるでござるな．．．。」

見上げた万斎が感心したように吐息を漏らすと、高杉が笑った。

「ククク．．．それだけこの国が腐ってるってことだ。」
来島や武市も黙ってそれを見つめている。

そして、高杉は消えるように呟いた。

「こいつが完成するまで、あと2時間だ．．．。」

そのとき、鬼兵隊の一人が慌てた様子で走ってきた。

「た、大変です高杉さん！」

「どうしたア？」

「中に居た奴らは殆ど追い出したのですが．．．まだ残っていた連中がおりまして、そいつら、最上階に向かってきています！」

「誰だア？」

「白夜叉と桂、紅桜のときのガキ共です！」

高杉を除いた全員に緊張が走った。

高杉だけは相変わらず楽しそうに笑っている。

桂の声に切迫感が混じったのがわかり、他の3人にも緊張が走った。

「分かった、必ず何とかしてみせる！」

そういつて桂は電話を切った。

「おい、ヅラ！何があつた？」

「な、何かやばいことでもあつたんですか！？」

「さっきの振動と関係あるアルか？」

口々に言う3人を宥めて、「階段を上がりながら説明する」と言う桂。

階段を駆け上がりながら、桂は説明し始めた。

「さっきの振動だが、恐らく鬼兵隊の者が地下に振動性爆弾でも仕掛けたのだろう。だが、問題はそこではない！高杉のヤツ、とんでもないものを地球に持ち込んでくれた！」

「なんだ、それは！？」

「俺がさっき言った白狐族の新型兵器、『えんぞう焰憎』というらしいのだが、それは、人の負の思念を吸い取って成長する！」

「それが何なんだよ！」

「焰憎は人の恨み、妬み、悲しみ、憎悪、破壊衝動などを吸収して、それを自分の体内で数百倍から数千倍にまで膨れ上がらせ、一気に解き放つ！」

「だから何なんだ！」

「まだ分からののか！それがこの世界中に解き放たれたとき、人々は負の心々に執りつかれて理性を失い、お互いを殺しあうんだ！」

「「「！！！！」」」

3人が立ち止まる。

「・・・外から見ている仲間によると、どんどん大きくなってきているらしい・・・このままでは、あと2時間と持たん！」

「ど、どうすればいいんですか！」

「ぶっ壊せないアルか！？」

新八と神楽が焦ったように言うと、桂はつぶやくように言った。

「焰憎は外側からの攻撃は一切効かない。とすれば、内側から壊すしかない。だが・・・そう一筋縄ではいかんだろう。」

桂は苦々しげに言った。
だが、

「一筋縄でいかないから何なんだよ。」

言ったのは、先頭を歩いていた銀時だった。

「それしか道が無いんならその道を通つ走るしかねエだろ。『もし失敗したら』なんて考えてる暇はねえんだよ・・・ツラ。」

そう言つて銀時は振り返つた。その瞳には、恐怖も焦りも一切浮かんでいない。

ただ、確信に満ちた顔をしていた。

「今にも死にそんな顔してんじゃねえよ。簡単に死ぬタマじゃねえだろ、テメエらは。」

銀時に指摘されて、桂や新八、神楽は初めて自分達がとても焦った顔をしていたのに気がついた。

何故だろう、目の前を歩くこの男は普段はただのマダオなのに、今は、

すごく、格好良く見えた。

「・・・ああ、そうだな。俺らしくもなかった。」

「すみません、ちよっと焦ってたみたいです。」

「とつとと終わらせて家に帰って、酢昆布食べるネ！」

銀時はニヤリと笑って、前を向いた。

「ほんじゃ、いっちょ、家出娘と世界を救いに行きますか。」

火遊びなんてやっちゃいけません（後書き）

ユーザー以外の人も感想を登校できるように致しました。

仕事が早めに切り上がると嬉しいよね（前書き）

作者は大江戸ターミナルのことをよく知りませんので、かなり捏造が入ります。

最上階は超硬質ガラス張りだってことになってます。

仕事が早めに切り上がると嬉しいよね

ターミナル付近――。

真選組はへりに搭乗し、焰憎に向かって攻撃していた。

マシンガン、バズーカ、手榴弾などの武器をさっきから当ててはいるが、焰憎には傷一つついていない。

「くそっ・・・！このままだと本当にヤベエぞ！」

土方はターミナルを見上げながらイライラと煙草をもみ消した。

そのとき、

♪プリッキキュア♪プリッキキュア♪

土方のケータイが震えだした。

「もしもし、ああ、総悟か。何の用だ？」

総悟はへりに乗って爆撃すると知った途端、率先してバズーカを構えて飛び立っていったのだ。

『あ、土方さ「ドゴオオオオン」電波悪いな・・・。』

「何でも良いから用件言え。」

『んだよ、土方コノヤロー死「ドカアアアアン」本当に電波悪いな・・・。』

「総悟。俺には見えたぞ。「死」の直後にバズーカが撃たれたのが。」

そんな風にひとしきり漫才を繰り広げたあと、総悟が切り出した。

『あー、さつきちょっと下の階まで行っただんですけどねィ・・・高杉がいましたぜィ。』

「本当か!？」

『はい、あと・・・。』

「あ？何だ？」

『さらに下の階に下つたら・・・見間違いかもしれませんけど、万事屋の連中がいたような・・・。』

「は？万事屋？何でだ？」

『あくまでも予想にすぎやせんが・・・鬼兵隊の船に乗り込んでいた知り合いがいましたよねィ。』

「晶とかいうヤローか。」

『ええ、そいつの手がかりを探しに行っただんじやないですかィ？』

「けどな、鬼兵隊の情報は俺達だって今日まで掴めなかったんだぞ。なんで奴らが・・・。」

『・・・桂がいました。』

「何！？本当か!？」

『間違いありやせん。あのウザったいロン毛、桂です。』

「・・・万事屋と桂の関係が掴めそうだな。」

『それよりも、先に――。』

「あア。こいつをぶっ壊さねえとな。」

土方は、なおも大きさを増してゆく焰憎を、苦々しげに見つめていた。

「面白れえだろうなあ・・・この世界の人間が自分の醜い部分に執り付かれて、殺しあう様は・・・。」

と、そのとき、負傷した鬼兵隊の一人が階段から駆け寄ってきた。

「た、高杉さん！大変です、白夜叉の一味と桂が、まもなくここに・・・！」
「そうか・・・。」

高杉は特に気負った様子は無いが、その他の者には緊張が走った。

「階段につながるシャッターを全て閉めるッス！念のために、階段前に人員配置！」

「はい！」

また子がキビキビと命令を下すと、バタバタと人が動き回った。

ゴオオオオオオン・・・

音を立てて階段に繋がる鋼鉄製シャッターが閉まる。

一応、また子、武市、万斎たちもその前に立つ。

シャッターの裏から、複数の足音が聞こえてきた。

「え？ちょ、何か閉まってますよ？」

「どくアル！ぶっ壊すネ！」

アアン！

突如響き渡った、凄まじい爆発音。

思わずまた子達は顔を手で覆った。

その衝撃に耐え切れず、シャッターに大穴が開いた。

そして、その大穴をくぐって現れたのは――。

「んだよ、僕、今日はお迎えいらないって言ったでしょ？」

「銀ちゃんってボンボンだったアルか？」

「なわけ無いでしょ、だったらこんなマダオになってないよ。」

「いや、分からんぞ。それはそれでマダオになっていたかもしれん。」

「「確かに。」」

「ちょっと、俺に集中砲火ですか？」

遠くからそれを見ていた高杉がニヤリと笑った。

「ま、いいや。ほら、とつとと世界を救って、帰るぞ。」

銀時たちが、飄々とした態度で現れた。

何でも姫ってつければ可愛いとか思うな（前書き）

テスト週間が木曜日でやっと終わります！

何でも姫ってつければ可愛いと思うな

鬼兵隊の者たちが緊張して武器を構える中、銀時が「あ、ちよっと待って」とストップをかけた。

「新八、神楽。ちゃんと押さえとけよ。」

「了解。」

新八と神楽が桂を羽交い絞めにし、その前に銀時が立った。

「おい、銀時、何をする？」

「何をするもへったくれもあるかアアアアアアア！」

「げひゃぶっ！」

銀時が思いつきり桂の右頬をぶん殴った。思いつきり顔が歪む桂。

「な、何をする！」

「てめーがなア！！！」

「え？ちよ、ちよっと待って。何するの？」

神楽と新八が桂の足を片方ずつ掴むと、びゅんびゅんと振り回し始めた。

「や、やめて！吐いちゃう！吐いちゃうから！」

「んじゃ吐けえ！吐いてそんでもって、」

「人気を下げるネ！」

「いやあああー！」

ビュンッ ドゴオン

新八と神樂がハンマー投げの原理で桂を思いつきり投げた。
吹っ飛び、鬼兵隊の人の中に突っ込む桂。

「ったく、バカみてえに威力のある爆弾ぶちまかしやがって。」

「死んだらどうするつもりだったんだ！」

「一生そこで死んでろネ、腐れ電波バカが！」

フン、と息をつく3人。

「いや、お前ら何しに来たんスカ！？仲間なんじゃないツスカ！？」

とうとう耐え切れずにまた子がツッコむ。

「仲間？笑わせんなよ。」

「そうですよ。あんな電波でバカで、」

「うざったいロン毛のヅラ被ってるヤツが、」

「」「仲間なんて、心外だ！」「」

「お前ら本当何しに来たんスカアアアアアア！？」

胸高々に堂々と言い切った3人に、また子は声の限りに叫んだ。

「まあ、落ち着きなさいまた子さん。」

そっいつて武市はまた子を宥めた。

「そこのお美しい少女の方。何をしに来たんですか？漫才をしに来た訳ではないでしょう？」

「銀ちゃん、新ハイ、あいつ私に向かって喋ってるアル。キモいネ。」

「神楽ちゃん、こういうときは無視するんだよ。」

「あーいうのに道端であつても見なかったフリするんだぞ、神楽。」

ほんのちよっぴり目の端に涙を溜める武市。

「いい加減にするッス！その変態に関する意見には賛成だが、その前に聞きたいことがある！」

「酷いですねえ、また子さん。死ね。」

「いや、おめーが死ね。」

ひとしきりギャーギャー騒いだあと、また子は気を取り直して言った。

「お前達、何でここに居るッスか！？」

ようやくシリラスっぽい雰囲気を取り戻し、キツと睨み付けながら言うまた子。

「何でつて言われてもねえ・・・チンピラ集団に飛び込んでいった家出娘と世界を助けに來ただけの通りすがりの通行人Aだよ。」

「通りすがりの通行人が何でテロ中のターミナルの中にいるんスカアアア！」

「ちよつと聞きたいことがあるのでござるが。」

そこでスツと出てきたのは、万斎だった。

「テメエ、伊東の時の・・・！」

身構える銀時。だが、そんな事には構わず、万斎は続けた。

「その家出娘というのは・・・『藍獸姫』、与謝野晶のことではないか？」

「！！！」

少なからず目を見開く銀時。

遠くで、高杉がピクリと反応した。

「え？藍獸姫？どういうことですか、銀さん？」

「アッキーナ、何者アルか？」

それには答えず、銀時は万斎に問うた。

「おい、ヘッドホン野郎。どこで調べやがった？」

鋭い目で見つめる銀時に対し、目をそらさない万斎。

「昨日、急に調べたでござる。だが、殆どが不明な点であったゆえ、確証はなかったが、ビンゴのようでござったな。」

「だったらどうする？」

「どうもせん。ただ、知りたいだけでござる。・・・晋助と、藍獸姫の関係についてな。」

ただ黙って互いを睨み合っていると、突然声がした。

「やれやれ、人の事について無理やり根掘り葉掘り聞くなと、母親に習わなかったのか？」

鬼兵隊の群れに突っ込んでいった桂がいつの間にか復活し、銀時の

傍らに立っていた。

「死んだら潔く成仏しろと、母親に習わなかったのをござるか？」

「あ、それには同感。」

「斬り殺されたいか貴様アア！」

切れる桂。

「ま、それはともかく・・・遠くで薄笑いしてる眼帯くんに用があるんだよ。通せや。」

「それは無理な話でござるな。」

その声と共に、鬼兵隊の者たちが次々と刀を構える。

また子も銃を構え、武市ですら刀を構えた。

「お主らが晋助と会うのは、恐らく永久に無いでござろうな。」

「くそつ、面倒くせえ・・・。」

銀時が木刀を構えると、後ろから声がかかった。

「銀さん、先に行ってください。」

「こんな奴等、私らだけで十分ヨ。」

気がつけば後ろの方では数人の男達が倒れていた。
神楽は傘を、新八は真剣を構えて立っている。

「あつそー。間違っても死ぬんじゃねえぞ。」

「「おう！」」

「銀時！」

気の抜けた声で言う銀時に、桂が厳しい声で呼びかける。

「こんな年端も行かぬ子供達に、この場を任せるのか！」

紅桜のときとは訳が違う。人数差からして大きいのだ。

「安心しろ、こいつら、本編では『夜叉の童^{おに}』って言われてるから。」

「しかし・・・！」

「第一よお、」

桂を遮って銀時は続けた。

「そんな簡単に死ぬほどヤワじゃあ、万事屋やってけないからね？」

「「当たり前（ネノです）！」」

決意溢れる2人の顔を見て、桂も何も言わなくなった。

「鬼兵隊も随分舐められたでござるな。」

「こんなガキにやられるほど、鬼兵隊は甘くないツスよ！」

「全くもって然り。いくらフェミニストといえども、容赦はできませんねえ。」

ガシャガシャと刀を構え始める鬼兵隊の面々。

「行くぞ、ツラア。」

「ツラじゃない、桂だ。」

「死んできたりなんかしたら、」
「ぶっ殺してやるネ。」

そうして――4人は飛び出した。

××つてところがエロいんじゃない。エロい妄想してるヤツがエロい！（前書き）

テストが終わりました！

ストックがもう無いんで厳しいですが、これから少しずつもとのペースで投稿していきたいと思います！

××つてところがエロいんじゃない。エロい妄想してるヤツがエロい！

4人はとりあえずバラバラの方向に散った。

銀時、桂は鬼兵隊の雑兵たちに斬りかかると、たちまち十数人を切り伏せた。

新八、神楽も攻撃をかわしながら応戦しているようだ。

桂に至つては早速どこかに消えてしまった。『逃げの小太郎』と呼ばれるだけはある。

銀時が2人に気を取られた、一瞬。

「晋助の所に行かせる訳にはいかぬ！」
ガキイン！

銀時の木刀と万斉の仕込刀がぶつかり、火花を散らした。

「しつけーなあ！しつこい男は嫌われる、ゼツ！」

力に任せて銀時が木刀を振り抜くと、万斉は後ろに跳んだ。

「このテロは鬼兵隊一世一代のテロ！邪魔はさせぬ！」

またも飛び掛ろうとした万斉に応戦しようとした銀時に、背後から声が掛かった。

「銀ちゃん、かがむアル！」

銀時がかがみこんだ刹那、後ろの神楽が構えていた銃が火を噴いた。
「くっ！」

刀で何とか弾こうとした万斉だが、全部は弾ききれず、一発が肩を掠めた。

「早く行くネ！」

神樂が追い討ちをかけるように万斉に向かって銃を撃ち続ける。

「ああ！帰ったら酢昆布10個買つてやる！」

「30個がいいネ！」

「せめて20個にまける！」

銀時がちらりと振り向けば神樂が笑っていた。

それに笑みを返すと、銀時は周りを蹴散らしながら走り出した。

「ちっ！行かせないッス！」

また子が銃を構えた瞬間、懷に青色が飛び込んだ。

とっさに身をかわすと、さっきまでまた子の腹があったところを振り抜いたのは、刀の柄。

刀を振りぬいた相手を見ると、素早く真剣を構えなおした新八が居た。

「ふん、少しはできるようになったみたいッスね。」

「僕だって、いつまでも護られてばかりではいけないんです！」

そして再び左右に動きながら飛び掛っていく。

また子もそれに応戦する。

一方、武市は――。

「全く、戦うのは嫌いなんです……（ガタブルガタブル）」

端っこの方で小さくなって震えていた。

[illegible]

かかつてくる鬼兵隊を全てさばいた銀時は、あつという間に高杉のところへ辿り着いた。

桂も銀時と並ぶようにして降り立った。

2人が思いつきり睨み付けているというのに、相変わらず薄笑いを浮かべている高杉。

しばらく誰も喋らなかったが、やがて高杉がおもむろに口を開いた。

「見るよ、銀時、ツラ。どんどんでかくなってやがる。これが人の腐った部分を吸って成長することは知ってたんだろ？」

相変わらず黙って睨んでいる2人を見てクツクツと笑いながら高杉は続けた。

「それだけこの世界が腐ってるってことだ・・・滅ぼすにや丁度良いだろう？」

「だからといって、腐ってない部分まで滅ぼすというのか。」

「何が丁度いいんだ、この中二病患者が。」

反駁する2人を気にも留めず、相変わらず煙管をふかし続ける高杉。

「・・・晶をさらったのはお前だろう。」

桂が言つと、高杉はようやく2人と向き合った。

「俺がさらったんじゃないよ。向こうから飛び込んできたんだ。」

「それを捕まえたままなんだろうが。大して変わらねえよ。」

ニヤニヤと笑い続ける高杉に焦燥を含んだ声で、桂は言った。

「高杉、貴様・・・晶に何かしたのではあるまいな!？」

さらに高杉はニヤリと唇を歪める。

「5年前は青臭い小娘だったくせに、随分いい女になってやがった

なア・・・歯止めがきかなかつたぜ。」

「高杉、デメエ・・・！」

「貴様、あれほどお前を慕っていた晶に・・・許さんぞ！」

銀時と桂から凄まじい殺気が立ち上り、刀を構えた。

「慕っていた、ねえ・・・だったらアイツはどうして俺の元から消えた？」

「「！！！！」」

驚いた顔をする2人に、高杉は畳み掛けるように言った。

「晶は黙って俺の前から消えた・・・アイツは、俺を裏切ったんだ！」

カツと目を見開く高杉。

「だが、俺の前にまた戻って来たんだ。二度と逃げられなくしてやるよ。」

「晶はお前の所有物ではない！今のアイツは昔とは違う！」

「何をどうして生きてきたかは知らねえが・・・アイツはきつと、自分の居場所を作ってる。」

「ハン、居場所？だったら丁度いい、焰憎で全てぶっ壊せばいい話だ。」

「んなことさせてたまるかよ！」

「無論だ！」

2人が刀を構えなおすと、いつのいたのか、鬼兵隊が周りを取り囲んでいた。

それも、尋常な数ではない。

「邪魔はさせねエよ・・・。」

「くそっ！」

「くっ！」

2人は舌打ちした。

高杉はニヤリと笑って、言った。

「俺はただ、壊すだけだ・・・この腐った世界をな。」

あの、興信所って何？

鬼兵隊相手にかなり奮闘していた新八と神楽だったが、それでも戦力の差が出てくるのは否めなかった。

大多数は1撃か2撃で倒せるのだが、いかんせん、人数差が大きすぎる。

しかも、また子の銃撃を避けつつ、万斉の太刀を受け流さなくてはいけない。

油断すると、銃弾や刀が体を掠める。

2人とも頑張っではいたが、体はズタボロになっていた。

「ガキのくせにここまで奮闘したのは認めるッスが・・・」

「そろそろ終わりでござるな。」

万斉とまた子が次の攻撃を加えようとしたとき、後ろの方から怒鳴り声が聞こえ、思わず振り返った。

「高杉、テメエ・・・！」

「貴様、あれほどお前を慕っていた晶を・・・！」

振り返った次の瞬間、新八が万斉に、神楽がまた子に飛び掛った。後ろに飛んで避わす2人。

「油断してつと、やられっぞ！！」

新八と神楽が威勢よく啖呵を切った。

「生意気言ってるんじゃないッス、ガキがあ！」

「油断していた訳ではないでござる。興味深い内容であつたが故。」

また子は睨みながら、万斉は飄々と答える。

そんな中、新八は万斉を睨みつけながら口を開いた。

「貴方、さつき晶さんのことを『藍獣姫』って言いましたよね？」

「それがどうかしたでござるか？」

「・・・晶さんと高杉さんの関係について、何か知っているんですか？」

「「！！！」」

それを聞いたまた子と神楽は驚いた顔をして、動きを止めた。

「何ゆえ、そんなことを聞く？」

「知りたいんです。何で晶さんが銀さんたちと知り合いなのか・・・
・あなた達の船に乗り込んでいった晶さんは、高杉さんに会いに行
つたんじゃないですか？」

「新八！？」

「貴様、何を言いたい！？」

神楽が叫び、また子が怒鳴るが新八は何も言わず、万斉を見つめ続けている。

万斉は新八をどこか感心したような顔でしげしげと眺めている。

「・・・大した少年でござるな。リズムは一定で大した特徴は無いが、揺るがぬ強さを持ち、熱いでござる。」
「???」

新八が当惑したような顔をしたのをよそに、万斉は話し始めた。

「拙者も昨日調べたばかりでな、大したことは知らないが・・・晶殿は、攘夷戦争に参加していたらしいでござる。」

「なっ・・・何を言ってるんですか！？晶さんが攘夷戦争に参加していたなんて！第一、」
「そうネ！攘夷戦争が起こったのは7、8年前アル！そのときはまだ・・・！」

———
まだ、ほんの子供でしかなかったはず。

「拙者も信じがたかった。だからさっき白夜叉達に問うたのでござる。そして、確信した。」

「晶さんが・・・『藍獣姫』だと・・・？」
「そうでござる。」
「ふざけるな！何でネ！」
「万斉先輩、どういうことツスカ!？」

一斉に全員が万斉に問うと、万斉はため息をついてから続けた。

「拙者として、昨日急に調べたばかりでござる。しかも、殆ど手がかりは無いのだ。詳しいことは全く分からないでござる。だが、一つだけはつきりと分かっているところがある。」

「「「・・・？」「」」

3人が疑問を顔に浮かべる。

「晶殿は、戦場で晋助に拾われ、攘夷戦争で活躍した・・・伝説の鬼兵隊の元副隊長でござる。」

「「「！！！！」「」」

3人の間に衝撃が走る。

「あ、晶さんが・・・」

「鬼兵隊の副隊長・・・？」

「じゃ、じゃあ何であの女は晋助様の前から消えたツスカ！？」

また子が半ば怒鳴るように叫んだ。

「詳細は分からぬ・・・だが、かつての晶殿は晋助を相当慕い信頼されていたと聞いた。それこそ、攘夷戦争が終わった後も晋助に付いていく程にな。」

「ならなんで・・・!？」

万斉はいったん息をつき、いつきに告げた。

「晶殿は丁度、鬼兵隊復活の目処が立ち始めた頃、姿を消した。つまり、晋助が本格的な倒幕活動を始めた頃だ。」

「・・・恐らく、晋助が怖くなって姿を消したのでござろう。」

——自分の知らない晋助が怖くなったのであろう。

「晋助も晶殿を妹のように可愛がっていたらしくてな・・・血眼になって探していたらしい。」

万斉がそう締めくくったとき、誰も何も言わなかった。

新八は、頭の中でぐるぐるといろいろな考えが回り、平常心を保つのが精一杯だった。

——1度だけ、近くで高杉晋助を見たことがある。恐ろしい男だった・・・。

—— 晶さんは、あんな風になった高杉が怖くなって、逃げ出したのか？

だが、神楽は別のことを考えていた。

—— 高杉晋助・・・確かに怖い男ヨ。

—— でも・・・逃げ出したのなら何でわざわざ乗り込んでいく必要があつたアルか？

—— 高杉に、何か言いたいことでもあつたんじゃ・・・？

一番最初に口を開いたのはまた子だった。

「・・・許せないッス。」

また子は怒りによって肩をブルブルと震わせていた。

「晋助様に信頼されておきながら、裏切って逃げ出すなんて・・・あの女、殺してやる！」

「落ち着くでござるよ、また子殿。晶殿をどうするかは、晋助が決めることござる。」

万斉の言葉に、黙っていた2人が反応した。

「・・・ふざけないでください。」

「そうヨ。アッキーナがどうするかは、アッキーナが決めることネ。」

再びジャキ、と武器を構える。

「とりあえず、家出娘を引き取らせてもらいます!!」

「ふむ、トークタイムはここまでの様でござるな。」

万斉が言つと、また子も銃をガチャリと構えた。

「・・・ここから先は、手加減するつもりはない。」

「いい加減、決着をつけてあっちの方にも行かなきゃいけないッスからね。」

――まずい。このままでは、ますます不利になる・・・。

新八と神楽が冷や汗を流しながらも戦闘態勢に入った、その瞬間。

バリイイイイイン!!!!!!

ガラスの割れる音が大きく響き渡った。

「初めてのおつかい」は感動するより笑う（前書き）

いつもは5本くらいストック溜めてたんで余裕があっただんですが・
・。

テスト週間で使い切っちゃったんでまた溜めなおさなくてはいいけ
ません。

結構大変です・・・。

「初めてのおつかい」は感動するより笑う

銀時と桂は鬼兵隊の面々を次々になぎ倒していったが、肝心の高杉はターミナル最上階の外に繋がる階段の所に行ってしまった。

しかも、鬼兵隊のメンバーは殆どが銃で戦っているために、なかなか直接攻撃がしにくい。

限界とまでは言わないが、このままでは戦局が悪くなることは明白だった。

「恐らく、内部の人間を全て外に追い出したのは中で変な巧作をされないようにするためだったのだな。それほど、焰憎の内側は弱いということか……。」

「んなことどうだっていいんだよ、ツラ。」

一旦背中合わせに立つ2人。

「……どうする、ツラ。もう1時間は経ったぞ。」

「ツラじゃない、桂だ。だが、このままでは本当に……。」

奥歯をギリ、と噛み締める桂。銀時もやや焦ったような顔になる。

少し遠くに離れ、相変わらず肥大化し続ける焰憎を眺めて、高杉は相変わらず薄く笑っていた。

一方、ターミナル外でも真選組がヘリによる爆撃を続けていたが、焰憎がダメージを受ける様子は無かった。

土方がこれで10本目になるつかという煙草を吸わずに握りつぶし、焦っている。

土方が拳を握り締めたとき、携帯からまた着メロが流れ始めた。掴みかかるように携帯をポケットから取り出し、耳に当てる土方。

「総悟ですぞ、土方さん。そうピリピリしないでくだせエ。」

「ピリピリもするだろ、お前が落ち着きすぎなんだ！」

『マヨのせいで血圧上がってるんでしょう？短気な人間についていく人間はいみせんぜ、ということで俺が土方さんの代わりに副長やります。』

「さっさと用件言いやがれ総悟オオ！」

とひとしきりコントを繰り広げたあと、総悟がようやくシリアスな口調を取り戻した。

『やー、さっきから爆撃を繰り返してるんですが、一向に効き目がねエですねイ。』

「早くアレをぶっ壊さねえと、江戸がヤベェんだよ！」

『・・・どういことですかい？やばいのは世界全体でしょう？』

土方の放った不穏なセリフに、総悟の声が低くなる。

「・・・上が、これ以上やっても破壊できねえようなら、とつっあんの船を出撃させると言っている。」

『！！・・・江戸が火の海になるのを知っててそんなことを！？』

「ああ。世界と一つの国なら、秤にかけるまでもねえとよ。」

『・・・くそっ！』

総悟が珍しく焦った声出した。歯噛みしている様が、目の前に浮かぶようだ。

土方も齒がゆい思いで、電話を切ろうとした。

が、

『・・・あ？何だ、ありゃ？』

総悟が変なものでも見つけたような声を出したために、電源ボタンにかけていた指が止まる。

「どうした、総悟？」

『小型の船が近づいてきてます。』

「んだそりゃ！？真選組のか、鬼兵隊のか！？」

『鬼兵隊のモンでしょうけど・・・一人しか乗ってませんぜ。』

「一人！？誰だ！？」

『何か、細長い棒みたいなの構えてて・・・藍色っぽいような・・・』

「はつきり言え！」

『つつても、よく見えないんですよ・・・あ！？待て、あれ女か！？』

「女ア！？」

「晶ア!!」

「……晶。」

船に乗って槍を構え、思いっきり窓に突っ込んできた晶だった。

映画でよくあるじゃん、体ごと突っ込んでドアとかガラスをぶち破るヤツ。

（前

あれって痛くないんでしょうか。

CGなんですかね？

その藍色が視界に入ったとき、銀時と桂は一瞬も気の抜けない状態であるのにも関わらず、思わず安心して、口が自然と弧を描くのが分かった。

鬼兵隊の面々も、船でとらわれているはずの女がガラス越しに飛んできたのを見て、呆然としている。

「あのバカ娘が……。」

「昔からお転婆すぎる。」

が、その笑みも徐々に凍り付いていった。

なぜなら、晶が思いっきり銀時たちのいる窓ガラスに突っ込んできたからだ。

「え？ いやちょっと待て。危なくね？ 危ないよね！」

「あああ晶！ その窓ガラスは、超特質硬化ガラスでな——」

聞こえないと分かりつつも、晶に向かって叫ぶ2人。

一方、ガラス越しに銀時と桂の姿を見つけた晶は顔を綻ばせた。
何か叫んでいるらしいことは分かったが、気にしなかった。

そして、ガラスと船の距離が5メートルに縮んだとき――――船
から思いっきり前方に飛んだ。

ガラスが眼前に迫った瞬間。

かろうじて見えたのは、晶が槍を構え、振ろうとしている瞬間だった。

数本の閃光がガラスを走った。

ガラスが碎け散る音が響き渡る。

ダン！

数秒後、粉のように細かく散ったガラスの破片を身にまとった晶が、銀時達の前に着地した。

「あ・・・・・・・・」

呆然としていた鬼兵隊の面々も騒ぎ出す。

「藍獣姫だアアアア！」

藍色の獣は、ゆっくりと顔を上げた。

女はメソメソ泣くのより強い方が丁度いい

ゆっくりと立ち上がった晶に銀時と桂は声をかけた。

「よオ、晶。不良に喧嘩売りにいったって言うから来てみりゃあ、元氣そうじゃねえか。」

「全くだ。お父さんに心配をかけるのもいい加減にしろ。」

「誰がお父さんだよ。どれかって言えばお前はペットだろ？」

「何だと貴様アアア！そのペットは犬なのか！？まさか猫なのか！？」

「食いつくところそこかよ！」

余裕そうな2人の会話を聞いて、振り返った晶の顔にも笑みが浮かんでいた。

しかし、右手にはいつの間にか書いたのか、紙が一枚。

『ヅラ兄はペットになるなら絶対ペルシャ黒猫だと思つ。』

「お前もかアアア！食いつくところちげーつってんだろ！」

「晶、何故ペルシャ黒猫なのだ！？」

『髪の毛長いから。』

「テメエらいい加減にしやがれエエエエエ！」

銀時がシャウトして、ようやくペットボケに終止符が打たれた。

桂もようやく真面目な顔になり、心配そうに晶に問いかけた。

「晶、お前大丈夫なのか？高杉に・・・何かされたのか？」
「ッラッ！」

晶の顔が少し歪んだのを見た銀時が、制止するように声を掛ける。

「・・・・・・・・（どんっ ぶんぶんっ ばたばたっ）」

『その話は後でにしてくれ。今は・・・・・・・・』

「ああ、そうだな。」

「とりあえず、こいつらを片付けねば・・・・・・・・。」

銀時と桂が武器を構えなおした鬼兵隊の前に立つと、スッと晶がその横をすり抜けた。

「「晶!?!」」

その声に振り返らず前に進む晶。と、一枚の紙をほうった。
ひらりと目の前を舞った紙を掴み取れば、

『私が食い止めるから、銀兄とツラ兄は行ってくれ。』

・・・・・・・・しんすけにも、話があるんだ。

そう締めくくられた文章を読み終わったあと、顔を上げれば。

晶が真っ直ぐに見据えていたのは、いつの間にか近くに来ていた高杉だった。

高杉の顔には、もう薄笑いは浮かんでいない。
憎しみにも似た目で、晶を睨んでいた。

臆することなく凜とした佇まいで見返す晶。

「・・・分かった。だが、俺達は最低限しか倒せねえからな。」
「決して油断をするでないぞ。」

今度は、2人の声に振り向いた晶。その顔には、不敵な笑みが浮かんでいる。

手話もしないし、紙にも書かなかったが、銀時と桂には何を言いたいのかすぐに分かった。

——誰に何を言ってるんだ？

——簡単に死ぬようでは、簡単に貴方達と戦えなかった——
|。

「フン、いつの間にそんな顔するようになったんだよ。」
「おなごの成長は男よりも早いのだぞ。知らぬのか、銀時？」
「んなこと言ってるんじゃないよ！」

冗談を言い合いながらも、それぞれの武器を改めて構える3人。

「・・・行くぞ。」

「ああ。」

「・・・（グツ）。」

白夜叉、狂乱の貴公子、そして藍獣姫。

3匹の獣が、再び牙をむき出す――。

名前の由来とか割と適当だったりするんだよ（前書き）

「あれ？近藤さんがいなくなね？」と思ってる方！

すみません。忘れてたら出す機会失くしました。

名前の由来とか割と適当だったりするんだよ

2人が階段に向けて、1人が鬼兵隊の群れの中に飛び込んでいったのは、遠くで戦っていた新八達にも見えた。

最初は晶を置いて2人だけあの「焰憎」とかいうものを破壊しにいくなんて、何を考えているんだと憤りすら覚えた。しかし、すぐにそんな考えは打ち消された。

晶に対峙した鬼兵隊の奴らは、次々に血飛沫を上げて倒れていったからだ。

どうやら相当に長い槍のようなものを振り回しているらしいが、厳密には槍ではないらしい。

なぜなら、その槍のようなものは時折短くなったり長くなったり変化を遂げているからだ。

「あれは、式虎槍しきこやう。とつくにこの世から消え去った武器だと思っていたが……。」

呟いたのは万斉だった。それに反応し、

「万斉先輩、何か知ってるんスか!？」

と問うまた子。

「10年近く前、鍛冶職人の藤丸が十数本だけ世に送り出したといわれる伸縮自在の幻の長槍だ。最も、当時は攘夷戦争の真っ只中。まともな扱いを受けず、あつという間にその殆どが壊され、消失し

たと聞いたが・・・まだ残っていたのだな。」

「何でそんなモンを、あの女が・・・？」

「知らぬ。ただ、あの武器は生み出されてからすぐに天人たちに奪い取られたと聞いた。戦場で拾ったとかそんなところでござろう。」

万斎達が話をしているとき、新八と神楽は啞然としながら晶を見つめていた。

神楽は夜兎だから、その華奢な体からは信じられない力が出る。それは分かる。

しかし、晶は地球人の女性なのだ。

晶の戦い方には無駄が無かった。

式虎槍を伸ばして遠くの敵を倒したと思えば、近くに迫ってきた敵を槍を縮めてなぎ倒す。

着物の裾が乱れるのも構わず、足技で鳩尾や顔に足を入れる。

どんな手を使うことも厭わず、ただ戦い続けるその様は、まさしく獣だった。

「晶さん・・・本当に藍獣姫って呼ばれてた人だったんだ・・・。」
「アッキーナ、凄いアル・・・。」

思わず呟いた2人に、万斉が声を掛けた。

「何故、晶殿が『藍獣姫』の異名をとったか分かるでござるか？」

「「!!!??」」

唐突な問いに、戸惑いの顔を見せる2人。それに構わず、万斉は続けた。

「美しい藍色の髪を持ち、凜とした佇まいはまるで姫の如く。しかし、戦いとなればそれをかなぐり捨て、血を求める獣のように殺す。だから『藍獣姫』なのでござる。」

少し息をついてから、さらに続ける。

「しかし、この異名は殆ど広まってはいない。知っていた者の殆どが、死んでしまったからな。」

新八と神楽は晶を見つめながら考えていた。

ああ、そうか。

だから藍獣姫なのか。

だからあんなに、哀しそうな目をしていたのか。

だからあんなに強いのか。

あの人も、銀さんや桂さんと同じように、世界を憎んでいるのだから——うか——。

「んなこたどうでもいいツスよ、万斉先輩！」

また子が焦ったように叫ぶ。

「このままじゃ、焰憎が破壊されるツス！」

気がつけば、銀時と桂は邪魔するものを全てたたき斬り、階段の近くに走りよりつつあった。

既に鬼兵隊の8割を倒しつつある晶。

それらを邪魔するそぶりも見せず、ただただ晶を睨みつけている高杉。

「確かなな・・・また子殿！拙者は白夜叉と桂を食い止めにいく！この場はまかせた！」

「了解ツス！」

「「させるかアアアアア！！！」」

新八と神樂が万齊に飛び掛ろうとするも、また子の撃った弾丸によりそれは叶わなかった。

その隙に素早く走り去る万斎。

鬼兵隊の残党も、次々に向かってくる。

「どうするヨ、新八！」

「どうもしようがないよ！とりあえず、早く倒すしかない！」

再び窮地に追い込まれたことで、焦る2人。

しかし、その焦燥はバズーカによって撃ち壊された。

「はい、真選組です。動くんじゃねえぞ野郎共お。」

スピーカーによつて響き渡つた声。窓の方を見つめれば、沖田がへりに乗つたまま室内に向けてバズー力を構えて居るのが見えた。

・ ・ ・ 室内に向けて。

「沖田さんんんんんんんんんんん！！！？？？」

「サドオ！何するネ！」

2人が大声を出すと、総悟はフツと黒い笑みを浮かべた。

「何って・・・テロリストを捕まえに？」

「何で語尾疑問系なんだアアアア！」

「かてえこと言っなよオ。」

もう一度ニヤリと笑んだ沖田は、バズーカを思いっきりぶっぱなした。ターミナル内に向けて。

ドガアアアアアアアアン！

焦燥は撃ち壊された。

文字通り、バズーカによって。

いきなりやってくる中学生の打ち上げほど迷惑なものはない（前書き）

実際めっちゃ迷惑だと思う。

中学生の打ち上げは。

いきなりやってくる中学生の打ち上げほど迷惑なものはない

「真選組、突入しろオ！」

『『『おおー！』『』』』

土方が無線で怒鳴ると共に、ヘリに乗っていた真選組が突入を開始した。

もちろん、晶が弑虎槍でぶちあけた大穴からである。

かくゆう土方もヘリに乗り込んでターミナル内に行こうとしていたりするが。

「総悟！中はどうなってる！？」

既に中に入った総悟と連絡を取る。

『あー・・・鬼兵隊と万事屋の連中が暴れまわってますねイ。』

「万事屋と桂はどこに行った！？」

『よく分かりやせんが・・・凄いことになってますア。』

「あゝ？どうゆうことだ？」

『さっき窓ガラスぶち破って中に入っていった女ですがね・・・鬼兵隊相手に暴れまわってますア。』

「マジか！？」

『ええ・・・軽く40人はいってますねイ。』

思わず目を剥いて、土方は怒鳴った。

晶が一通り鬼兵隊の面々を倒して一息つき、あたりを見渡せば凄
いことになっていた。

—— ずっと外で爆撃を続けていたはずの真選組が、何でい
んだらう？

しばらく考えて、ポンと手を打った。

—— そういえば、窓ガラス一面を粉々にしたっけ。

と、そこまで考えてからハッと思い出した。

—— 忘れてた！しんすけはどこに行った！？

慌てて辺りをキョロキョロと見渡したが、真選組と鬼兵隊の乱闘が
凄まじく、一人ひとりを判別できるような状況ではなかった。

それでも彼女は、黄金の蝶をまとったその人を探し続けた。
走り回って、ただひたすらに目を凝らす。

と、視界に紅色が入った。

「! ! !」

その方向を見れば、高杉がターミナルの外にある着陸場に出ようとしていた。

「・・・・・・っ! !」

出ない声を必死で振り絞ろうとしたら、息が詰まった。

・・・・届くはず無い声が届いたのだろうか。

高杉がゆっくりと振り返った。

そして、クイと手で合図をした。

「・・・・・・。」

——『来い』って・・・・そう言ってるの？

そのひどく陰気で嫌な臭いに、2人は思わず顔を顰めた。

「コイツをどうやって破壊すればいいのか……。」

桂が考え込んでいると銀時が焰憎の傍まで寄り、木刀でぶにぶにとつつき始めた。

と、渾身の一撃を叩き込む。

しかし、焰憎は一瞬ぶにりと形を歪めただけで、すぐに元に戻ってしまった。

「外側からの攻撃は本当にダメなんだな。」

苦々しげに銀時が吐き捨てた。

「うむ……。一か八かだが、これしかあるまい！」

しばらく考え込んでいた桂がパンと手を叩いて、銀時へ向き直った。

「銀時！俺が今から振動性爆弾を焰憎に投げ込む！そうしたら一瞬だけ焰憎が浮く！」

「したら何なんだよ！？」

「そうしたら、お前がコレを思いっきり打ち込め！」

桂が銀時に投げて放ったのは、直径約50センチはあるつかという巨大な爆弾だった。

「んだよこれ！？ていうかどこに仕込んであったんだ！？」

銀時が両手で受け止めると、桂はそれに構わず怒鳴った。

「いいから聞け！一瞬だ、焰憎が浮いた隙に、それをぶち込むしか破壊する方法はない！」

「・・・チャンスは一度つて訳か。」

銀時は焰憎を見上げた。限界までに大きくなり、今にも破裂しそうな焰憎。

「行くぞ！時間はない！」

「ああ、分かってらあー！」

知らない場所で2人つきりは気まずい

「あつれー？あの女どこに行つたんだー？」

総悟が鬼兵隊を斬りながら、先ほどの藍色の女を探していた。

「一応事情聴取はしておきた——ぶふおっつ！」

走り回っていると、いきなり殴り飛ばされた。しかもグーで。

「てんめエ、何しやがんでイ！」

殴った相手を見ると、どこかで見たような朱色の髪と眼鏡。

「サドオオオオ！何するネ！バズーカあちこちでぶっぱなしやがつてこのチンピラ警察！」

「か、神楽ちゃん落ち着いて！」

まだぐらぐらする頭を右手で押さえながら見上げると、万事屋のチャイナが今にも殴りかかろうとしていた。眼鏡は、それを羽交い絞めにしてなんとか抑え込んでいる。

「いつてえな、市民の平和を守るためにやってんだよコラア。文句あつか？」

「市民の平和を守るんなら私達の平和も守るネ！」

「てめえは市民じゃねえよ。不法入国チャイナ娘だろうが。」

「んだとゴラアアアア！」

「か、神楽ちゃん！」

眼鏡がチャイナを抑え込んでいる間に立ちあがって2人を見てみれば、体中怪我だらけの埃だらけ。

「お前ら、どこかで爆撃でもされたのかイ？」

「いやアンタのバズーカのせいでしょうがアアアアア！」

眼鏡のツツコミでようやく気付いた。ああ、さっきのバズーカの巻き添え食ったのか。

「まあいい。今はお前らに構っている暇はねエ。藍色の女を見なかったか？」

「藍色・・・？もしかして、晶さんのことですか！？」

「あゝ？晶つてのはお前らが探してるヤツだよな。男だろ？」

「何言ってるネ！アツキーナはぴちぴちの女の子ヨ！」

「えゝ、マジ？」

真選組で事情聴取をしたとき、神楽が「晶（+アツキーナ）」と連発していたので、ずっと男だと思っていたのだ。

「そつえば、高杉さんも見当たりません・・・。」

「どこに行ったヨ!？」

途端に心配そうに辺りを見回し始める眼鏡とチャイナ。なんだこいつら、本当に知らないのか。

と、その時。

「真選組だア！神妙にお縄につけエ！」

「で、出たぞ！鬼の副長、土方だア！」

土方さんがやってきた。

遅い出番のくせに何決め台詞言ってるんだか。ほんとバカじゃねーのアイツ。死ねばいいのに。

「総悟オオオオオオオ！」

やべ、心読まれた。

ターミナルの離陸兼着陸場は見晴らしがよくて、晴れの日なら眺めは最高だったのだらうと、晶は思った。

そして、その近くにはしんすけたちが乗ってきたであろう小型船が停めてあった。

しんすけが離着陸場の中心でピタリと足をとめて、振り返ったからだ。

その目は相変わらず憎しみを滲ませていたが、仄かな哀しみも浮かんでいた。

5メートルほど離れて、互いを見つめ合う。

重苦しくはない、空気のような沈黙が辺りを流れた。

「・・・なんでここまで来た。」

ゆっくりとしんすけが口を開いた。その口調は戸惑いを隠しきれずにいる。

「お前は5年前、俺のもとから逃げたんだ。そうだろう?。」

否定も肯定もせずに見つめていると、しんすけはさらに続けた。

「何で俺に会いに来る必要があった? 分かっているんだ、お前は、黒く染まっていく俺が嫌いになったんだろ?。」

ハッとして首を振ろうとしたが、しんすけは構おうとしなかった。

「テロを起こして、全てを壊そうとする俺が嫌いになった。許せなかったんだろ？」

「・・・・！！」

必死で首を振った。

話せなくても、この気持ちが届けばいいと。

「・・・否定するな。俺が何か間違ったことを言ったか？お前は俺から逃げた。その事実には、何の偽りもない。」

「！！！！」

痛いところを突かれ、首を振るのも止めてしまう。

しんすけの眼に、再び強い憎しみ、そして喪失感が宿った。

「俺は、お前を――」

「晋助！」

しんすけが何か言おうとした瞬間、ヘッドホンをつけた人がやってきた。

「白夜叉と桂が焰憎まで来ている！このままでは、破壊されるぞ！」

「・・・ちつ。」

晋助は舌打ちして、走って行った。

「・・・。。」

——晋助を止めなくては。

晶もそのあとを追って走り出した。

喧嘩しないのっていうけど突っかかってきたのアイツだからね？

「いいか、銀時。俺が『行くわよっ！』と言うからお前が『はいっ！』と言つて爆弾を――」

「打つわけねーだろ！」

「げひやぶっっ！」

何故かバレーボールを構える桂を銀時が思いっきり殴る。
このやり取りがかれこれ十数分続いている。

「何故だ！打つと言つたらこれしかなかるう！」

「お前バカだろ！？真性のバカだろ！？前話のシリアスな雰囲気返せ！」

「バカじゃない桂だ！」

そこだけは律義に返す狂乱のバカ貴公子。

「おい、ヅラ！いい加減やるぞ！」

今にも破裂しそうな焰憎を眺めながら、銀時は焦ったように怒鳴った。

「うむ・・・仕方あるまい。こうなれば、俺が『エリー』と叫んで爆弾をなげたらお前が『ザベス』と」

「いやなんでそこでエリザベス！？関係なくね！？」

「だって、いつのまにか自然消滅さ」

「言うなアアアアア！それは突っ込んだじゃいけない大人の世界なんだアアアア！」

「えー、でもお．．．。」

「うぜエエエ！イラツと来るわ！もういいよそれで！いいからやるぞ！」

銀時がとうとう折れ、桂が腰を落とし、振動性爆弾を投げる態勢に入る。

「行くぞ！エ」

「させねエよ。」

「邪魔はさせないで！ごめん。」

「！！！！！！」

2人が後ろを振り向けば、刀を構えた高杉と万斉。

「ようやくこの世界をぶっ壊せるんだ．．．テメエらなんかこい

ッを壊されるわけにはいかねエ。」

「右に同じだ。焰憎は間もなく破裂する、俺たちはそれを眺めていよう。」

もはやいつもの薄笑いではなく、殺気をこめた眼でかつての戦友を睨む高杉。

万斉も、いつものござる口調ではない。

「今はテメエをたたつ斬ってる暇はねエ。」

「斬るのはまた今度にしてやる。邪魔はするな。」

4人の侍の間に殺気とた闘気が流れ始めた。

一種触発の状態で、下手に動けばその瞬間に命は無い。

しかし、両者の間で決定的に違うのは、高杉と万斉はどことなく余裕そうで、銀時と桂は表にこそ出さないが非常に焦っているということだった。

銀時がギリ、と奥歯を噛みしめた。

——くそっ、このままじゃ……！！

だが、簡単には動けない。

対峙が続いたのは、実質数十秒だったのだろう。だが、4人には何十分にも感じられた。

4人が同時に動こうとした――その時。

高杉と万斉の背後から、藍色の閃光が飛び出した。

もちろんそれは、巨大な長槍を構えた、

「――！」

「あ――――！」

「――！！！！」

桂が叫びかけると、高杉と万斉が振り向いたのはほぼ同時だった。とっさに身を屈める2人の上を、槍の柄が通過していった。

2人が一瞬で飛び退くと同時に、藍色の閃光――晶が地面に着地した。

が、着地した瞬間に高杉が刀を構えて、晶に飛びかかる。

ガキイイイイイイン！

金属でできた槍の柄と刃がぶつかり合い、大きな音を立てた。

と、そこに万斉も参戦し、刀を思いっきり柄にぶつける。

2人の男の力には耐えきれず、晶は後ろにその力を流すため、跳んだ。

後ろに着地すると、間髪入れず、再び高杉と万斉に槍を構えて突っ込んでいく。

そして、2人に飛びかかる寸前、晶が銀時と桂を見た。

もの言えぬ彼女ではあったが、その瞳が何を語っているのか、分からないはずはなかった。

——私が食い止めるから。早く、早く……！

「……行くぞ、銀時！」

「ああ、分かってらァ！」

「万斉！テメエはあいつらを止める！」

「了解でござる！」

「・・・！！！」

爆弾って雷管抜けばすぐ止まるんだって（前書き）

ようやく終わりそうな雰囲気が出てきました。

爆弾って雷管抜けばすぐ止まるんだって

鬼兵隊との乱闘騒ぎの中、再び音を立て始めた携帯電話を土方は取った。

「ああ、近藤さんか何かあつ・・・本当か!？」

血相を変えて大声を上げる土方。

「くそ、マジかよ・・・!」

携帯を切り、頭を抱えて唸る土方に、総悟が声をかけた。

「どうしたんですかい？」

「ああ、上が・・・とつっあんの船をもうこの近くによこしてる。あと数分後に、爆撃開始だよ。」

「!!!!・・・マジですか!？」

珍しく顔をゆがめる総悟の後ろから、「?」という顔をした2人が出てきた。

「え?松平さんの船を出撃って・・・どういうことですか?」

「とつっあんの船で、何するつもりアルか?」

2人の問いに答えたのは、総悟だった。

「・・・とつっあんの船で爆撃なんてやってみろ。江戸が火の海になる。」

共学に見え開く新八と神楽。

「大方の人間は死ぬ。．．俺たちもだ。世界を守るためなら、国一つは安いとよ。」

呻くようにして神楽が悔しげに地団太を踏んだ。

しかし、新八はまっすぐに焰憎の方を見つめていた。

そこに煌めく、銀色を。

[illegible]

すううう、と桂が思いつき深呼吸をした。

「エエエエエエリイイイイイイイイイ！」

そして、爆弾を投げようとした瞬間——万斉がその背後に斬りかかろうとした。

「ッラッ!!」

その声に振り返り、とっさに身をかわす桂。しかし、完全には避けきれず、肩から血が流れ出した。

「邪魔はさせぬ！」

「甘いな、手遅れだ！」

「何!？」

不敵な笑みを浮かべる桂。万斉が焰憎を見れば、球状の物体が焰憎にぶつかる寸前だった。

それが、焰憎に触れた瞬間。

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイン！

耳を塞ぎたくなるような衝撃波の音が辺りに響き渡った。

流石に桂のお墨付きだけあり、凄まじい振動性だった。

おそらくターミナルの下にも届いたのではないかという音が止んだ時、

焰憎が一部分だけ、ほんの１メートルほどめくれ上がっていた。

「ザアアアアアアアアアベエエエエエエエエエ………」

「……っ……」

晶が、何かを叫ぶように口を開いた。

空耳っていうのは、誰かの想いが聞こえたものなんだ

まもなくターミナルに爆撃が開始されるとその場に居た全員が知ったとき、そのパニックには真選組も鬼兵隊も関係なかった。

怒号と悲鳴が響く中、何とかそれを鎮めようと新八と神楽が走り回っている。

ギイイイイイイイイイイイイイイイイイーン！

鼓膜が破けてしまいそうな甲高い音と、凄まじい衝撃波がターミナルの全体を揺さぶった。

まわりにいた者達が爆撃が始まったのかと騒ぎ出す。

「な、何だこれ・・・？」

「頭がキーンとするネ・・・。」

2人かが頭を抱えてクラクラしていると。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアーン！

二発目の衝撃がターミナルを貫いた。

[illegible]

「くそっ、何が起こつたんだ!？」

2つの衝撃に思わずバランスを崩して倒れこんでしまった土方は、イライラと立ち上がった。

「うわ、土方さんダツセエ。もう副長やめちまえよ。」

ぶくくく、と笑っている総悟に若干顔を赤くしながらも、照れ隠しで刀をブンブンと振り回す。

「土方だ！何かあったのか！？・・・は、ちょ、どういことだ！？」

いつも開いている瞳孔をさらに開かせて驚いた顔をする土方。その雰囲気、総悟も黙る。

「・・・あ、ああそうか。分かった。こっちから調べる!」

ピツ、と音を立てて土方が携帯を切った途端、総悟が土方に噛み付いた。

「土方さん、何が起こったんですかイ!？」

総悟が言つと、土方はいまだに信じられないといった様子で告げた。

「・・・焰憎が爆発して、木っ端微塵に吹き飛んだらしい。」

「!!!!どうなったんですか!？」

「陰の気が世界中に広まったわけじゃないみてえだ・・・何が起こったかは知らねえが、要は内部爆発を起こしたらしい。」

それを聞いた新八と神楽が土方に詰め寄った。

「て、いうことは・・・!」

「ああ、当面の危機は免れた。」

「「よ・・・」」

よっしやあああああああああああ!

そう思って、銀時が爆弾を打つ前に背中に斬りつけようとした瞬間。

——お願い、しんすけ！

——やめて！もうやめて！

聞いたことの無い、若い女の声。
でも、耳に心地良い、知っているような声。
それが突然、頭の中に響いた。

「——っ！……？？」

その声に不意を突かれて驚いた俺は、手元が狂った。

銀時の背中を深く斬る筈だった刃は、代わりに銀時の右肩を、浅く掠めただけだった。

肩から血を流している銀時とツラの元に駆け寄った晶を見ながら、
ようやく気がついた。

あれは、おまえ晶の魂の声だったのか。

「晋助！真選組が来ているでござる！」

やや切羽詰ったように万斉が叫んだ。

「……………撤退だ。動けるやつだけでも連れて船に戻れ。」

「了解した！」

万斉が船に向かって駆け出すと共に、俺も走り出そうとした。

が、視線に気がついて、振り返る。

3人が俺を睨んでいた。

いや、晶は違う。戸惑ったような、しかし凜とした瞳で、俺を見つめていた。

その口がまた開きそうになるまえに、俺はニヤリと笑って言った。

「またな。銀時、ツラ……………晶。」

そう言って、俺は走り出した。

大切なものなんて人によって様々

真選組全体が歓声を上げているとき、鬼兵隊の連中が見当たらなくなったことに、土方は気がついた。

「おいお前ら！鬼兵隊を捕まえろ！」

胸騒ぎを覚えて指示を出したときには既に遅かった。鬼兵隊の殆どが船の方へ移動を開始していたからだ。

「追え！船のほうの人員配置はどうなってる！？」

「そ、それが人員不足のために手薄で・・・！」

「くそっ！とりあえず、奴等を追うんだ！」

鬼兵隊の船のほうまで駆け出し、離着陸場まで行くと、殆どが船に乗り込み、高杉が甲板に立っているのが見えた。

「奴等を止める！」

土方が無線でヘリに乗っている真選組隊員に告げた途端。

発進しかけていた筈の鬼兵隊の船の周りの空気が歪んだかと思うと、忽然と姿を消した。

「な！？」

「船が、突然消えた・・・！」

「ワープ機能か!？」

土方はしまった、というように唇を噛み締めた。

恐らく高杉はいざというときのことを考えて、白狐族から焰憎と共に船に取り付けるワープ装置でも買っておいたのだろう。

――迂闊だった。目の前に気を取られすぎてた・・・!

土方が心の中で深く後悔していると、

「神楽ちゃん、銀さんたちの所へ行こう!」

「了解ネ!」

万事屋の2人の声が聞こえた方向を見れば、ターミナル最上階外、ついさっきまで焰憎が張り付いていたところへ走っているのが見えた。

「・・・総悟、あいつらの後を追うぞ。」

「分かってまさら。」

――そこに、桂がいるかもしれない。

――何より、万事屋と高杉の関係について何か掴めるかも・・・。

土方と総悟も、2人を追って走り出した。

[illegible]

銀時と桂は、晶によつて傷口に軽い応急処置を施してもらつていた。しばらく3人とも無言のままだったが、桂が口を開いた。

「・・・何故だろうな。あの時、高杉ヤツは確実に銀時おまえの背中を狙えたはずだ。」

それは、問いかけているというより、独り言に近かった。

「俺には見えた。高杉が、一瞬だが、驚いたような顔をしたのが。」

「そうなのか？」

銀時の問いには答えず、桂は晶に向き直った。

「晶。お前、何かしたのか？」

晶は黙って首を振った。本当に、何もしていないのだから。

「そうか……。」

そう言って桂は再び黙り込んだ。

次に口を開いたのは、銀時だった。

「分かるよな、晶。俺達がもう、昔の関係じゃないことは。」

晶がピクリと反応をして、銀時の方を見た。

「俺達は、高杉に会ったら、アイツを全力でぶった斬る。そう決めているんだ。」

一言一言、噛み締めるように。

その言葉の重さを受け止めるように、銀時は言った。

「俺達が、アイツを斬ったら……お前は俺達を憎むか？恨むのか？」

桂が顔を上げた。その顔には、少しの不安が浮かんでいた。

知っているからだ。晶が命の恩人である高杉を、兄のように慕っていたことを。

——その慕情の中に、淡い恋心があったことも……。

晶は下を向いていたが、やがてどこからか取り出した筆と紙で何かを書き始めた。

書き終わったそれを、晶は2人に見せた。

『憎まないし恨まない。銀兄とヅラ兄がしんすけを斬るっていうのは、大切なものを護るためだろうから。』

2人は晶の顔を見た。その顔は泣き出しそうになっていたが、確固たる意志を持っていた。

『しんすけは昔のしんすけじゃない。私は、攘夷戦争が終わってしんすけに着いていったとき、晋助が変わっていくのを目の当たりにしたから分かる。』

晶の脳裏に浮かぶのは、幼い頃の思い出。

いつも優しく頭をなでてくれた手。笑っていたその人。命の恩人。何よりも大切な人だった。

しかし、それは徐々に変わっていく。

手からは血の臭いが取れなくなり、いつもどこことなく生臭い臭いがした。

私に優しいことは変わらない。でも、瞳が変わってしまった。

——世界の全てを激しく憎み、嫌悪する哀しい瞳……。

それでも、一緒にしようとした。一緒にいたかった。

あの人を一人ぼっちになんて、したくなかったから。

でも、その決意が揺らぎ始めたのはいつ頃だったのか。

あるとき、しんすけが刀を血で染めて帰ってきたことがあった。

どうしたの、と聞いてもただ薄笑いを浮かべているだけ。

怖くなってテレビを着けたら、目に飛び込んできたのは真っ赤に染

まった殺人現場。

幕府の役人と天人、そしてその場に居合わせた一般人が20人近く惨殺されたというニュース。

それを行った男は紫混じりの髪の毛に煙管を咥え、薄笑いを浮かべていたという。

——怖くて哀しくて辛くって、でもそのとき、あの人と私の歩む道は違うのだと分かった。

だからしんすけの元から立ち去った。
置手紙一つ残さずに。

——結局、それもただ、逃げただけだったのかもしれない・・・。

ずっと、そう考えて悩み苦しんできた。

『でも、銀兄達が護りたいもののために戦うんなら、私も戦う。』

「……………」

「晶……………」

『私にも護りたいものはある。そのためなら、しんすけを斬ることもなるかもしれない。でもね、』

やっと分かった、自分の答え。

『私の護りたいものの中には、しんすけも入ってるんだよ。』

そう言う晶は泣いていた。
でも、確かに笑っていた。

銀時は鬼兵隊が溶けるように消えていった空を、ゆっくりと仰いだ。

心の中で、高杉に呼びかけてみる。

—— なア、高杉。

—— こいつはな、お前にゃ勿体無いくらいのいい女だよ。

—— お前だって、分かってたんだろ？

—— テメエにゃ、眩し過ぎたのかもしれないなア。

その声に対する返事が、あるはずも無く。

手紙ってやつはどうしても詩的になる

とある海洋の上空。

数百人乗りかという大きな船に、せいぜい100人乗り程度の小型船が横付けしていた。

その船から、20数人が出てくると、大型船に乗って、その者達の帰りを待っていた連中が、質問攻めにした。

「高杉様！ 焰憎はどうなったのですか！？」

「60人は乗っていったはずですが、その者達は！？」

「お怪我はされていませんか！？」

それらの問いにどれ一つ、高杉は答えない。

怒っているわけではない。もっと複雑な表情だった。

「晋助。船をどこに向けるでござるか？」

万斉が言うと、その場に居た全員が静まり返った。

「・・・蝦夷に向ける。しばらくはそこで待機する。」

「了解ッス！」

また子は言つと、てきぱきと指示を出し始めた。それに合わせて動き出す船員達。

自室に入っすぐ、高杉は床にどすんと腰を下ろした。
晶が中に入っていたはずの布団一式は、畳まれて壁際にきっちり
置かれている。

アイツらしい、と自嘲気味に笑い、何気なくあたりを見回すと。

文机が目に入った。いや、目に入ったのはそれではない。

文机に、「しんすけへ」と流麗な文字で書かれた手紙が置かれて
いた。

無意識のうちに手を伸ばす。

手に取ったそれは、どこことなくアイツの藍色を含んでいる気がした。

見ることなく、丸めて捨てても良かった。

——見るのは、単なる気まぐれだ。

そう言っ自分を納得させると、高杉はそれを開いた。

『しんすけへ

思えば紙に書いて言葉を伝えることは今まで何度もあったけど、手紙を出すのは初めてだね。

どうやって書き始めれば良いのか分からないけど、まあ、どうでもいいか。

突然ですが、5年前、何も言わずに蒸発して御免なさい。』

いや、突然すぎるだろ。今の文脈からどうしてそこに繋がった。

どこか冷静にツツコミながらも、俺の頭は次の文章を読めとうるさいくらいに指示を出していた。

『憎まれても仕方ないと思ってる。あれだけ大切にしてもらったのに、何も言わずに出て行くなんて、恩知らずもいいところだと思う。

でも、絶対に勘違いされたくないのは、

私は、しんすけが怖くなったとか、嫌いになったとかの理由で消えたんじゃない。』

ドクリ、と俺の心臓が脈を打ったのが分かった。

『確かに、血に染まっていくしんすけを怖いと思ったことがあるのは事実。でも、じゃあ根本的に怖くなったのかと言われれば違う。

単純に言えば、昔みたいにしんすけの全てに賛同できなくなったんだ。』

ああ、分かってたよそんなことは。

お前が、闇に堕ちていく俺を悲痛な目で見てたことぐらい。

俺はそれに気がつかないフリをした。

気がつかないフリをしながらも、分かってた。

こんなことを続けてたら、やがてお前は、俺の元から離れていくだろうってことも。

『結局、私は逃げただけだったんだ。

勝手にいなくなっでごめんなさい。

憎ませてしまっでごめんなさい。

一人ぼっちにしまつてごめんなさい。

でも、それでも分かつて欲しい。

私は昔も今も、ずっとしんすけが
□

手紙はそこで途切れていた。

俺は無意識のうちに強く握り締め、くしゃくしゃになった手紙のし
わを伸ばし、文机に置いた。

——バカが。何で謝ってるばかりなんだよ。

ふつと口元に笑みが浮かんだそれは、恐らくいつもの薄笑いじゃないんだろつ。

分かってたんだよ、俺だって。

お前だけが悪いんじゃないんだよ。お前は逃げてなんかいないんだよ。

俺が逃げてただけだったんだ。

俺はただ、気がつかないフリをした。

お前が荷物持つてある日突然姿を消した時だって、驚きは無かった。

ああ、とうとう行ったか。そんな感じすらしたんだ。

だが、その何十倍も、虚無感のほうが大きくて、変になりそうだった。

だから俺は、お前を憎んで、その虚無感を埋めようとした。

自分を無条件に慕ってくれた存在を憎むことで、虚無感を埋めようとしたが、できなかった。

だって本当は、憎んでなんかいなかったから。

お前を襲おうとした時だって、涙を見て、最後までできなかった。

確かに欲情したのに、罪悪感のほうが勝った。

ただお前を抱きながら眠っているだけで、心の虚無感が憎しみとは別の感情で満たされていくのが分かった。

もつと温かくて、気持ちいい想いで。

それに、お前は最後まで俺を一人にしないようにしてくれた。

周りの奴等が離れていくか死んでいくかという時期が終わりを迎えた頃、つまり鬼兵隊復帰の目処が立ち始めた頃だった、お前がいなくなったのは。

攘夷戦争が終わった時も、お前には他に選べる道があった。

俺なんかじゃなくても、銀時やヅラ、坂本についていく道もあったのに。

ただ一緒についてきてくれた。

お前は俺を一人ぼっちになんかしてねえよ。

今、ようやく気づいた。

俺が何でお前がいなくなったただけでこんな虚無感に襲われたのか。

お前と一緒にいて、満たされていたのは。

年の差とか、そういうのを関係なしに。

お前を、愛していたんだ。

手紙ってやつはどうしても詩的になる（後書き）

なんか・・・ムリヤリ感が強い気がする。

やっと終わりますか

「・・・白状しろ、万事屋。」

「白状も何も、ねえ・・・。」

「『ねえ』じゃねーよ!」

土方は今、銀時と向き合って尋問をしている・・・筈なのだが、全く持って尋問という雰囲気ではない。

それはひとえに、銀時が饅頭をもそもそ食べているからだ。

銀時の態度にイライラしつつも、今日だけで何度繰り返したか分からないセリフをもう一度繰り返した。

「何もないなら何であの時桂と一緒に居た!？」

「だから、道端でばったり会ったんだってば!よくあるでしょそんなこと!」

「ねえよ!何で道端でばったり攘夷志士と出くわすんだよ!」

このやり取りが何度も続いている。

眼鏡とチャイナのあとを追えば、負傷した万事屋と桂、そして藍色の女が居た。

捕まえようとしたら「ばいびー!」と飛び降りられた。

慌てて下を見れば、ヤツは忽然と姿を消していて、その代わりに夕

ーミナルの下に停められていた軽トラックが発進し、ウザいロン毛がたなびくのが見えた。

後を追えと下に居る連中に命令を出した後、チャイナが「晶アア！」と叫んで女に殺人タックル（抱きつき）をかますのを見て、驚いた。晶というからどんな男かと思えば、どれだけ見積もってもまだ20歳程度の若い女だったとは。

とりあえず万事屋も晶とかいう女も傷を負っていたから病院に運んだ。

意外に軽い傷であつたらしく、2人が事情聴取できるまで回復するのを待つ必要もなかった。

女は別室で山崎による尋問を受けていたが、ものの30分ほどで釈放された。

山崎によれば、知っている限りのことには答えようとしてくれたらしいが、ほとんど何も分からなかったのだという。

高杉との関係については「命の恩人」としか答えなかったらしい。凶悪テロリストである高杉が人助けをするなんて到底信じ難かったが、

「あの人が嘘をつくような人には見えない」

と山崎に言われて、黙るしかなかった。

確かに晶という女の瞳はとても澄んでいて、鬼兵隊数十人相手に闘った女とは重ねることが難しかったし、何より性根がまっすぐだということ、見ていれば分かった。

疑うことが前提の警察としてはダメなのだろうが。

結局、5時間に及ぶ銀時の尋問に音を上げたのは土方の方だった。

「・・・ちつ。もういい、今回は見逃してやる。」

「へーへー。どうもありがとうよ。」

ちやっかり机の上に置かれている饅頭を2、3個わしづかみにすると、銀時は出て行った。

土方は大きいため息をつく、山崎から報告書に目を通した。それはふざけた作文のような報告書ではなく、晶の尋問に関する報告書だった。

いた。

しかし、「十分治った」と言い、自分の家に帰ると言い出したのだ。特に神楽が寂しがり、「もっここにいてヨ」「万事屋に住めばいいネ」などと言い、かなり足止めしていた。

晶は嬉しそうな、困ったような顔をしていたが、「そろそろ行かないと」と、歩き出した。が、歩き出す直前に銀時に頭を掴まれ、髪の毛をわしゃわしゃとなでられた。

「???」

「・・・なんでもねエよ。」

その、妹を見守る優しい兄のような眼に、晶の顔もほころんだ。

言葉に出さずとも、言いたい事は分かった。

「ばいばい!!」

「いつでも遊びに来てくださいね!」

新八と神楽がだんだん小さくなる背中に呼びかける。

振り返ることなく手を振る晶。

「晶!」

銀時が大きな声で叫んだ。

「悪い男に引つかかるんじゃないぞ！」

晶はピタリと足を止めた。

そして振り返ると、満面の笑顔でもう一度手を振った。

今度は、振り返ることなく、歩き出す。

な妹分だ。

お前は一人じゃない、昔も今も、俺達の大切

やっと終わりますか（後書き）

まず一言。

やっと完結だよー！

いやあここまで長かった長かった。

途中何度もスランプに陥りましたから。

こんな駄作を見に来てくれた皆様に、心より感謝を申し上げます。

・・・で、何か完結っぽいけど、終わりません。（往生際悪っ！）

なんかかんやで晶の過去を全部出せてないし、何より神威を絡ませたくて仕方ない。

というわけで、第二部に続きまーす！

第二部は神威が出張ってるよ！

そして番外編からスタートしますが本編と密接に関わってくるので読んであげてください。

第二部にも付き合ってやろうという方、よろしくお願いします！

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（前書き）

はじまっちゃいましたー

神威を書きたくて書きたくて仕方がなかったんです！

誰もいない廊下を、一人の男が書類と荷物を抱えながら歩いていた。その男の眼は確かに死んでいたが、体には鋼のような筋肉が無駄なく付いており、戦闘経験のあるものなら、男の体に染みついた血のにおいを敏感に感じ取ったはずだ。

男は黙って歩いていたが、やがて立ち止った。

立ち止ったのは、大きな扉の前。

その扉にはプレートが貼りつけられていた。子供の殴り書きのような文字で書かれたそれは、

『だんちよう（ていとく）室』

と記されていた。

男はそれに構うことなく、ドアを開けて入っていく。

おく方まで歩いて行くと、大きな仕事机と、回転椅子があった。

いや、正確に言えば回転椅子に人が乗っていた。後ろを向いているため、顔は見えないけれど。

「団長、どうかの星の麻薬売買に関する書類、置いとくからサイン書いといてくれよ。」

男はどさっ、と音を立ててデスクに書類を置いた（厚さ約15センチ）。

「……………あゝぶと。」

それまで無反応だった椅子の主が声を掛けてきた。同時に、椅子をくると回転させる。

「書類整理ばつかでつまんないよ。何か面白い任務無いの？」

回転椅子に座っていたのはまだ20歳にも満たないであろう、少年の面影を残した青年だった。

彼の名は神威。史上最年少で宇宙海賊春雨に入団、師団長にまで成りあがった人物だ。

端正な顔立ちと、透き通るように白い肌。髪はオレンジ混じりの桜色で、三つ編みにしてお下げにしてある。目は海のように青く、体も引き締まっている。

つまり、どこをどうとってもいわゆる「イケメン」と呼ばれる容姿をしているのだ。

が、今のその顔は不機嫌さを隠そうともせず、むしろ険悪なまでに周りに振りまいていた。

「おもしろい任務っていつでもねえ……。」

阿伏兔と呼ばれた男は、やれやれといったように溜息をついた。

「団長の言う『おもしろい任務』っていうのは、敵の殲滅とかだろ？」

「そつ！それだよそれ！」

嬉しそうに阿伏兔を指差す神威。

だが、阿伏兔はさらに深い溜息ひとつ。

「提督にんなデケエ任務が回ってくるはずねエだろ。」

「だったら俺、提督止めるー!!」

とうとう床をごろごろと転がり始めた神威。そんな上司に、阿伏兔は頭痛のしてきた頭を押さえた。

神威は先日、阿呆提督というのを殺して、その後釜に収まったのだ。

・・・収まったのは良いのだが。

団長という仕事ももちろんそうだが、提督となれば地位は更に高い。そんな高い地位故に、なかなか実践任務が回ってこなくなり、かわりに書類整理の仕事ばかりが回ってくるようになってしまったのだ。

神威は型破りの戦闘狂だ。

そんな神威に書類整理ばかりをやらせるというのは、ライオンに野菜を食べさせるのに等しい。

しかもなかなか外に出て行けないので、神威の不機嫌さは臨界点を突破しようとしていた。

「もーやだ。阿伏兔、暇つぶしに俺に殺されてよ。」

「丁重にお断りさせていただくぜ。」

もう一度、阿伏兔はため息をつく、部屋を出て行こうとしたが、

「待ちなよ、阿伏兔。」

ふと神威が呼び止めた。

神威の視線は、阿伏兔が持っている手荷物に注がれている。

「どっかに行くの？」

「……………」

阿伏兔は何も答えない。しかし、その頬には冷や汗が流れている。それを見た神威が、にこにこしながら言った。

「もしかして、何かの任務にでも行くの？」

「……ああ。第七師団に裏切り者が出てな。そいつが地球に逃げ込んだっていうから、俺がそいつの始末をしてくるのさ。」

「ふん。」

にこにこ微笑み続ける神威。
その笑顔にヤバいものを感じ取った阿伏兔は、迅速に立ち去ろうとした。

それから数時間後。師団員2人が団長室の中に入っていた。

「失礼します団長！この間の任務の報告書をお持ちしました！」

団長室の椅子は回転しており、団員達に背を向けているため、顔は見えない。

しかし、常時より明らかに高いところに桜色のアホ毛がぴよこんと飛び出している。

「うん、わかった。そこに置いといてよ。（ダミ声）」

「・・・声、低くないですか？」

いつもよりあきらかに低いその声に、団員が不審の色を示すと。

「風邪ひいただけだよ。ぐだぐだ言っていると、殺しちゃうぞ？」

「・・・分かりました。」

本物の殺気が籠った声に、団員は言い返すことなどできず、部屋を出て行った。

一方、部屋に残っていた椅子の主は。

「団長……無理あんだろ……。」

桜色のカツラをかぶり、顔を引きつらせた阿伏兔だった。

そのころ、数時間前に第七師団の船から飛び出した一艘の小型船に居る人物は。

「ひっさしぶりの外だな。」

機嫌良さそうに船の自動操縦機能を、地球に設定していた。

桜色のアホ毛を楽しそうに揺らしながら。

いわずもがな、神威だった。

団長よ

頼むから早く

帰って来い

（阿伏兔 心の一句）

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（前書き）

修学旅行でしばらく更新できないと言っのをわすれていました。

すみませんでした！

「裏切り者を始末するのは楽なんだが、厄介なのが逃げ込んだところなんだ。」

行く気満々（さっきまで殺気満々だった）の神威に溜息をつきながら、阿伏兔は任務の具体的な説明を始めた。

「そいつが逃げ込んだらしいところは、大小様々だが、20以上の山が辺り一面に広がっているせいで、下手に迷えば二度と出てこれないなんて事もザラにあるらしい。」

「ふん。」

神威は変わらずにここにこしている。外に出て、久しぶりに殺し合いができることが嬉しくて仕方ないらしい。

「だから、その山にはゴロツキどもが逃げ込んで山賊みたいになってるんだとよ。」

「うん、分かった。じゃあもう行くね。」

「ちょっと待て団長。まだ話し終わってない。」

早く行きたくてたまらない神威は、頬をぶくつと膨らませて阿伏兔の説明を待っている。

「だから、団長にはとりあえず、ここの村に行ってもらおう。」

とまあそんなわけで。

俺は裏切り者の始末をするために宇宙船に地図をいんぶつと？させて村の近くに船を停めておいたんだけど。

見れば見るほど辺り一面山しかないね。

草のおいがこれでもかっつくくらい充満していて、木々が茂っているせいで日光があまり差し込んでこない。

まあ、夜鬼の俺にとっちゃ、そっちの方がありがたいんだけどね。

と、適当に歩いていたら、急に木々が開けた。

開けたそのさきにはわずかな平地が広がり、20数軒の家がぼつぼつと立っている。

家の外にでている人間も、見える限りでは10人くらいはいるんじゃないかな。

「あ、ここが村か。」

俺はポンと手を打った。何だ、そこそこ大きいね。

さて、適当な人間に道案内させて、裏切り者の始末をしてくるかな。

「あのさ、ちょっと頼みたいことがあるんだけど。」

俺が人間に近づいて、にこやかに（まあいつも笑ってるけど）話しかけると。

「ひっ……………！」

10人くらいいた人間は、蜘蛛の子を散らしたように家の中に駆けこんでしまった。

「おーい、どうしたの？」

話しかけてみたけど、返事が一切ない。

仕方ないから、村の奥に進んでいくと、また数人の人間が。

「そこの人たち！。」

「……うわっ……！」

またしても怯えたように逃げられた。
なんでだろう？ 返り血まみれなんてわけじゃないし、殺気だってないのに。

「むー……………」

あれからずっと、村を歩き続けては、見つけた人間に話しかけ続けてはいるけど。

結局同じだ。みんな怯えたように逃げていく。

何なんだよ、ここの連中。

任務とかどうでもいいや。うざいし。

弱いヤツに用は無いけど、憂さ晴らしに殺しちゃおうかな？

そう思った矢先に、井戸で水汲みしてる女を見つけた。

後ろ姿しか分からないけど、見たこともないような綺麗な藍色の髪をしている。

よし、決めた。あの女で最後だ。あの女が逃げたら、この村を憂さ晴らしに壊す。

「おい、そこで水汲んでるお姉さん。ちょっと頼みたいことがあるんだけどー。」

大きな声で呼びかけた。

女はゆっくりと振り返った。

髪とおそろいの藍色の瞳が、俺を映す。

女は、逃げなかった。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（後書き）

神威の口調が掴めない。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？

「……………」

振り返った女は何一つ言葉を発することなく、俺を見ている。

（へえ……………」

年齢は多分俺と同じくらい。ひよっとすると、ひとつくらい年上かもしれないけど。

海みたいに深くて長い藍色の髪に、星空みたいな瞳。夜兔かってくらい、肌は白い。

細身だけど出るべきところはちゃんと出てるな、ぼんきゅっぼんだ。

（なかなかお目にかかれない美人さんだね、これは。）

と、女が突然懷に手を入れた。

何か武器でも出すのかな？とか思ってた見たら、筆と紙だった。

さらさらものの3秒くらいで書き終えると、それを俺に見せてきた。

『用は何？じろじろ見られても困る…………』

「あ、ごめんごめん。」

俺としたことが、觀察に気を取られていた。
ていうかさ、それよりも。

「何で普通に喋らないの？」

『喋れないから。』

「そうなんだ。」

それにしてもすごい速筆だな。2秒かかってないよ。

『で、用は何だ？』

「ああ、忘れてた。ちよつと、道案内してほしいんだ。」

『道案内？どこへ？』

もちろん俺は正直に答えた。

「俺さ、とある組織の一員なんだけど、裏切り者がこちら辺に逃げ込んだらしいんだよね。そんでもって、多分山賊どもとつるんでると思うんだ。だから、山賊どものいそうなところまで。」

アバウトすぎない？とか言わないでよネ。

『・・・無理。』

「え？何で？」

返答によっちゃ、ただじゃおかないけど。

『雨が降ってくる。』

「雨？」

俺が首をかしげた瞬間、さしていた傘にポツリと雫が落ちた。

正直な感想を述べると、女が呆れた顔で見えてきた。しょうがないじゃん。春雨の船にいたから感覚が変わってきたんだもん。

女が連れてきたのは、村の奥に位置する古くて小さな家だった。古いけどしっかりした家みたいだ。これだけ雨が強いのに、一切雨漏れが無い。

部屋は台所を含めないで2つしかない。

「一人暮らしなの？」

『そうだよ。』

なるほど、一人暮らしなら十分な広さだす。

でも、危機感ってものが無いのかな？

「男を家に連れ込んで平気なの？襲われるかもよ？」

俺が首をかしげながら聞くと、女はきょとんと見つめてきた。

『貴方は私を襲うつもり？』

「・・・ふふつ。いや、そういうつもりじゃないけど。」

思わず小さく笑うと、女は訳が分からないと言った顔をした。

面白いな。

俺が今まで会った女とは、いろいろ違う。

『座つて。お茶淹れるから。』

「苦いのはやだからね。」

俺が言うと、女は可笑しそうに笑つて、台所に消えた。

座布団に座つて辺りを見渡せば、部屋の割にはものが少ない。タンスと、卓袱台と、小さな本棚。

「・・・ん？」

ふと、血の臭いがして、立ち上がった。

ほんの僅かな臭いだけど、俺の鼻はごまかせない。

部屋を歩き回つて、その臭いの根源を突き止めた。

「何だろ、これ？」

見たところ、直径10センチ、縦30センチくらいの円柱だ。でも、間違いなくこれから、血の臭いが滲み出てきている。

「どうなつてんだらう？」

角度を変えて見ていたら、ボタンのようなものが突きだしているのが見えた。

「へえ……。」

そつと、そのボタンを押そうとした時、足音が聞こえた。

「ま、いいか。」

それを元の位置に戻し、座布団に座ると、お盆の上にお茶と茶菓子
を乗せた女が歩いてきた。

『麦茶でよかったかな?』

「あ、大丈夫。」

女が卓袱台に茶菓子を置くと、それをすぐにとって包装紙を破く。
饅頭か、地球のは美味しいんだよな。

『で、用件のこと。』

「おつと、忘れてた。それで、引き受けてくれるかな?」

『……貴方は裏切り者をどうする?』

「殺すに決まってるだろ。」

『そうか……。』

言い終わった後、女はしばらく黙っていた。

うーん、殺すって言わない方が良かったかな?

嫌がったところで、脅してでも案内させるけど。

『・・・一つ、条件がある。』
「条件？」

女は頷いた。

この俺に条件を突き付けるなんて、度胸あるね。

『ひとつは、一緒に山賊を軽くボコること。奴ら、たまに食べ物脅し取りに来る。もううんざりなんだ。』

ああ、なるほどね。

「いいよ。それぐらいならお安い御用だ。」
『あともう一つ。』
「何？」

『この雨がやむまでは案内できない。』

俺が窓を見ると雨はますます強くなっていた。

「ありやりや。この雨、いつまで続くかな？」
『勘でいえば、あと2、3日。』

マジでか。

『寝床はどうするつもり？』

「え？ここに泊めてくれないの？」

『決定事項！？別にいいけど・・・』

わーい、やった。

予定がちよつと狂ったけど、まあいいよね。

「よろしくね、えつと・・・。」

『そつえば、まだ名前すら名乗ってなかった。』

あ、ほんとだ。

「俺の名前は神威だよ。」

『与謝野 晶だ。』

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？

俺が女——晶の家に泊まり始めてから2日立った。

晶は2、3日で雨は止むとか言ってたけど、雨は殆どぶっ続けで降り続けている。

あと、この数日間で分かったことがある。

一つは、この村と住んでる連中のこと。

最初は俺を見ただけで逃げ出したが、晶が説明してくれたらしい。ちよつと外をすれ違つと、軽く頭を下げられるくらいにはなった。何で俺を見ただけで逃げたのかって聞いたら、「ここの人間は外の世界の人間が怖いんだ」と言われた。

詳しくは分からないけど、ここに住んでる連中は、数年前まで「えた」とか「ひにん」って呼ばれて、要は身分が低くて差別されていたらしい。

何でこんな不便なところに住み着いてるのか、と聞いたら、晶は哀しそうに笑った。

「もちろん、一度は出ようとしたんだよ。」

集団でこの村から出て、都市に下ろうとしたこともあった。でも、またすぐにここに帰ってきた。

帰ってこざるを得なかった。

人里に下った村人達を待っていたのは、人々の根深い差別と、酷い迫害だったからだ。

迫害に理由なんて無い。昔からそう言われてるから。ただそれだけ。

幕府は解放令を出したが、実質的には何もしなかった。名称を変えたくらいでは、人々の差別意識は消えなかったのだ。

何もしていないのに。外見だって何も変わらないのに。外を歩けば白い目で見られ、塩を撒かれ、石を投げつけられた。

だから、今もこの土地に住み着いてる。必死でしがみ付いてる。

——怖いんだよ。外の人間が。私も、彼らの心を開くのに時間が掛かった。

そう言った晶の顔は本当に哀しそうだった。

あと、もう一つ。

晶は随分変わった女だ。

さっきの言葉から分かったことだけど、晶はもともとここに住んでいる人間じゃない。

そつだろつな、とは思っていた。晶のまとう雰囲気は、村人のそれとは完全に異なる。
凄く凜としてるから。

でも、この村の人間には信頼されてるらしい。

雨だからできないとは言つてたけど、いつもは畑とか行つて野菜を育てたり、山に入つて獣を狩つたりしに行くらしい。

それから、瞳に全然卑しい光が無い。

俺が今まで会つてきた奴等は（一部を除いて）媚を売つて、俺に取り入ろうとした。

俺の地位に目をつけたり、容姿目当てだったり、様々だったけど。

晶はそういうのが全く無い。
それを言つてみたことがある。

「ねえ、晶はさ。」

「・・・・・・？」

「俺とやりたいとか思わないの？」

ガタガタッ

言つた瞬間、卓袱台に肘を突いて本を読んでいた晶は思いつきりバランスを崩して、顔を卓袱台にぶつけた。

「・・・・・・・・!？」

顔を真っ赤にしていつもの涼しげな顔はどこへやら。
そういうことに関して免疫ないのかな？

『な、ななな何を・・・・・・・・!？』

律儀に返す辺りが流石だね。ていうか筆談なのに点とかいらん
じゃ・・・・・・・・。

「いや、別に。気になっただけ。」

『おおお前、会う女にいちいちそんなこと言ってるのか!？』

「そういう訳じゃないけど。」

ようやく落ち着きを取り戻したらしい晶は、卓袱台に再び肘を付い
た。

それを見た俺は、言葉を続けた。

「あのさ、俺ってカッコいいだろ？」

「・・・・・・・・。。。」

あ、今の晶、物凄く呆れた顔してる。
しょうがないじゃん、ほんとのことなんだから。

「だからさ、やたら女が寄ってきたんだよね。」
『それで?』

「でさ、そういう女達はさ、俺に媚売って、抱かれようとしたんだ。」

女達は確かに美人だった。ぼんきゅっぼんのね。
でも多少の違いはあっても、共通するのは同じ点。

香水臭い体。べたべたに塗りたくった化粧。

何より、卑しい下心に満ちた目。

俺に取り入って、俺の体と金を手に入れようとしているのは一発で分かった。

気まぐれにそんな女達を抱くことはあった。でも、それはあくまで性欲処理のためだ。

それだけですがみ付いてこようとした女は皆殺した。

――女は鬱陶しい。

それが俺の結論。

そう言えば、晶は黙って考えこんだ。

しばらくした後、晶は何かを書いて俺に見せた。

『私とその女たちは、どう違う?』

「えっと、髪の毛でしょ、体でしょ、それから」

『そういう意味じゃない! 内面的についてこと!』

どう違う、かあ。

そんなこと聞かれてもなあ・・・。

しばらく俺は晶の顔をじろじろと見た。若干恥ずかしいのか、晶は頬を染めた。

あ、分かった。

「瞳、かな。」

『め?』

当惑したような顔をする晶。

うん、やっぱり違うな。

「うん、瞳だよ。藍色の目なんて見たことないし。」

『だからそういうことじゃないって言ってるのに・・・。』

「あと、もうひとつ。」

『?』

こっちが根本的に他の女と違うところ。

「何かこう、全然いやらしくないし、凄く澄んでて綺麗なんだよね。」

卑しい光が宿ってないのはもちろん、綺麗で、キラキラしてて。

『・・・一昔前のドラマみたいなこと言う奴だな。』

晶は若干呆れた顔をしていたけど。

とても嬉しそうに、笑っていた。

こんな表現使いたくないけど。

それこそ、俺の心が温かくなるような、可愛い笑顔だった。

昨日の土砂降りが嘘のように晴れている空。むしろ日差しが強すぎるくらいだ。

外に出て歩いてみれば、村の人間たちが畑を耕したりしていた。歩いてきた俺を見て、軽く頭を下げる奴もいれば、にこやかに手を振ってくる奴もいる。

晶が俺のことを説明してくれたからだと分かる。

「本当に信用されてるんだね……。」

独り言を呟きながら歩いていると、腹のあたりに鈍い衝撃が走った。見下ろしてみれば、まだ10歳にもならないだろう男の子が鼻を押さえてうずくまり、同じ年頃の子供が数人、それを心配していた。

どうやらこの子は、俺にぶつかった拍子に鼻を強く打ちつけたらしい。

「あらら。大丈夫？」

「……っ、だいじょぶ……。」

半分涙目になっているが、泣かずに立ち上がる男の子。

「ん、そーか。えらいえらい、男は強くなかつちやね。」

ぽんぽんと頭を叩いてやる。

こつという根性のある子が、強くなるんだろっね、嬉しいな。

不意に、周りにいた子供の一人が声を上げた。

「あー！思い出した！あきらおねーちゃんの家に住んでるおにーちゃんでしょー！」

「へえ、よく知ってるね。」

それを聞いた子供たちは警戒心が無くなったのか、次々に話しかけてきた。

「ねーねー、何でここに来たの？」

「晴れてるのになんで傘差してるの？」

「髪の毛、不思議な色だねー！」

「おにーちゃんはいつまでここに居るの？」

（この村に住んでるから、外から来た奴が怖いんじゃないのかな？）

俺はその質問のどれにも答えず、逆に質問した。

「ねえ、俺が怖くないの？」

そう聞くと、皆一様にきよとした。そして、

「怖くないよ！良い人だからって、あきらおねーちゃんが言ったもん！」

「そうだよ、それに、おにーちゃん優しいそうだし！」

「あきらおねーちゃんも優しいよ！」

と口々に言ってきた。

——この俺を、「優しそう」とはね……………。

子供らしい純粹さに思わず苦笑いを浮かべる。

けど、晶はどうしてこんなに信用されてるのかな？

「ねえ、晶は他所から来たんでしょ？何でそんなに信用してるの？」

言つと、子供たちは顔を輝かせて答えた。

「あきらおねーちゃんはね、僕たちが猪に襲われたところを、助けてくれたんだよ！」

「うん、それにいつも遊んでくれるし！」

「皆にすつごく優しいんだよ！」

「へえ……。」

正直、猪の件は驚いた。

あんなに細い体で、どうやって猪を撃退したんだろう。

いや、でも、部屋の隅に置いてあつたあの円柱状のものは……。

「おにーちゃん。」

くい、と袖が引つ張られて、そつちを見ると、小さな少女が俺の服を引つ張っていた。

——一瞬、その子供が、桜色の髪を持ったチャイナ服の幼
い少女の面影に重なった。

「なあに？」

その面影を頭を振って追い払い、身をかがめて子供の視線に合わせ
る。

「おにーちゃん、すっごくかつこいいね！」

「そう？ありがとう。」

につこり笑ってやれば、頬を赤く染める少女。

こうして見ると、何であの顔がよぎったのか分からない。まったく
の別人なのに。

「おにーちゃんはさ、」

「ん？どしたの？」

少女は言葉を続けた。

「あきらおねーちゃんの”こいびと”なの？」

「へ？」

予想もつかなかった言葉に目をぱちくりさせると、

「え！？そーなの！？」

「おにーちゃん、あきらおねーちゃんと結婚するの？」

「いいー！」

「あきらおねーちゃん、びじんだもんね！」

子供たちが次々に聞いてくる。

俺はちょっと面白くなって、こう言った。

「うん、そうだよ。」

「」「」「わあああ・・・。」「」「」

子供たちが感嘆の息を吐いたすぐ後、不意に一人が声を上げた。

「あ、おねーちゃん！」

「え？」

指差す方向を見れば、必要最低限の荷物をまとめたらしい晶がこっ

ちに歩いてきていた。

寄ってくる子供を優しい目で見ながら、頭をなでたりしつつ、俺のそばにやってきた。

「晶、早かったね。」

『そう？もうすぐ1時間たつけど。』

じゃ、と続けた。

「道案内、よろしくね。」

『こちらもよろしく。』

そうして、山の方向に向かって歩き出そうとした直後。

「あきらおねーちゃん！おにーちゃんとけっこんするの！？」

『・・・・・・・・・・は？』

ぽかんとした顔の晶。

あ、面白いな、その顔。

「おにーちゃんとこいびとなんじゃないの？」

『な！？そんなことあるわけ』

「あるよねー」

「！！！！！！！！」

ぎゅっと肩を抱き寄せると、途端に真っ赤な顔をしてもがく晶。

「いつけっこんするのー？」

『するわけあるかあああああ！！！！』

晶が極太筆で、絶叫した。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（後書き）

神威がデレてる・・・。

まあアレです、ちょっとずつでいいから特別な存在になってほしいんです。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？

「ねー、晶あ。」

「……。」

「まだ引きずってるの？」

「……。」

「もー。しつこいなー。」

すると、前を歩く晶から紙が投げつけられた。

『しつこいとかじゃないだろ！あんなタチ悪い嘘つくな！』

「はいはい、もうしないから。」

状況は分かったかな？俺と晶は今、山道を歩いているんだ。

だけど、晶が俺の5mくらい先を歩いていて、決して振り返らない。

何故かって？俺がふざけて「晶の恋人」と言ったことを、いまだに引きずってるのさ。

照れ半分、怒り半分って言ったところだろうね。

ていうかさ、晶は、

「俺の恋人になるのとか、そんなに嫌なの？」

普通の女だったなら喜びそうだけど。ていうか確実に喜ぶけど。嫌なのかな？

——そこまで拒絶されてると思うと、流石に傷つくな。

その途端、晶は振り返った。

『嫌とかそういうんじゃない！神威と私はそもそもそういう関係じゃないでしょ！』

顔を真っ赤にさせて極太筆で書かれた言葉を見せてくる晶。

その必死な様子に、思わず笑みがこぼれた。

「何だ、照れてるだけなんだネ。」

『なっ！？』

「じゃ、いこーか。」

あえて晶の後ろを歩いてたけど、拒絶されてないならその必要も無い。

隣に立つと、晶がまだ赤い顔を、フイと横に逸らした。

それを見て、またくすりと笑った。

[illegible]

山道を歩き始めてから2時間はたった。あちこち歩き回つてはいるが、いまだにゴロツキ共の巣窟は見つからない。

晶いわく、一箇所にとどまらないで移動を繰り返してるから、見つけにくいんだそうだ。

あと、さっきから晶が顔を逸らしっぱなしだし、黙りっぱなしだからつまらない。

何か話題が欲しいな。

あ、そういえば、

「晶ってさ、恋人とかいたことないの？」

「！！？？」

いきなりの質問に驚いたのか、晶が顔をこっちに向けてきた。また真っ赤になってるけど。

『なななな何でいきなり……………！！』

「いや、単なる興味から……………って、もしかしていたことない？」

『余計なお世話だ！』

ありやりや、また怒っちゃったネ。

意外だナ。

晶って結構美人だから、モテるのかと思ってた。ていうか、実際モテると思う。

「何で？ 晶、大失恋でもしたの？」

軽く言ってみた。冗談的な感覚で。

でも、その瞬間、晶の顔が哀しそうに歪んで、微笑んだのを見て、ほんの少しだけ後悔した。

『似たようなもの・・・かな。』

「似たようなもの？」

うん、と頷いて晶は続けた。

『大好きだった人がいたんだ。でも、その人はどんどん黒くなって、私は怖くなって・・・逃げた。』

「・・・・・・・・。」

『数年ぶりに再会したその人は、もつと黒くなっていた。私の知っているその人じゃなかった。』

「・・・・・・・・。」

『分かってたんだよ。分かってた、逃げるのがあの人にとってどれだけ酷いことなのかって・・・・。』

———
それなのに、逃げ出してしまった。

語り終わった晶は、突然立ち止まった。

見ると、俯いて肩を震わせている。

晶の言う『その人』が誰なのかはわからないけど。

晶は、凄く悩んで、苦しんだ拳句に逃げたんだろう。

十分尽くしたはずの晶を罪悪感で未だにで縛りつけているそいつに、

酷く、腹が立った。

無意識のうちに、晶の頭に手を置いていた。

髪の毛のさわり心地がとても気持ちいい。

晶が驚いたように顔を上げた。

目から零れ落ちる雫が、頬を濡らしている。

「俺は晶のことをよく知らないから、なんとも言えないけどさ。」

これだけは言える。

「晶は頑張ったんだろ？それでも黒くなっていったのはそいつのせいだ。晶は悪くないよ。」

自分のために泣く女なんて、うざいとか、鬱陶しいとしか思ったことはなかった。

でも、誰かを想って泣く、晶は。

——綺麗だと思った。

『ありがとう……。』

晶はそう言ってにっこり微笑んだ。

「ん。大したことはしてないよ。それより、よく俺なんか話す気になったね。」

俺が言っと、晶は少し考え込んだ。

『何でだろう・・・神威になら、話しても同情されないと思ったから、かな・・・？』

ああ、確かにね。

俺は同情なんてしない。

ただ、自分の思ったことをそのまま言うだけだ。

その方がいいのかもしれない。

同情なんて、軽々しくしていいもんじゃないしネ。

『本当にありがとう。』

「少しは楽になった？」

『・・・少し、ね。』

「
そっ
か。
」

少しでも、
楽になれたのなら、
それでいい。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（後書き）

うん、神威が神威じゃないですね。
神威ファンの方すみません。

現時点では神威と晶は友達ですね、多分。

あと、彼は晶を慰めたんじゃないで、思ったことをそのまま言っただけ……だと思います。

彼女は、「分かっていたのに逃げだした」と自分を責め続けていました。

高杉も晶も、自分だけが悪いと思い込んでいるんです。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（前書き）

親が勉強しろってうるさいです。

1時間もパソコンやってないのにすぐやめろって言われます。

まあ、受験生だから仕方ないんですが。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？

歩き始めて3時間はたった頃、晶が不意にぴたりと足を止めた。

「何か見つけたの？」

と聞くと、唇に人差し指を当てた。静かにしろ、と言いたいらしい。

そして、親指で差したその先には

「へえ、なるほど。如何にもって感じだね。」

直径5メートル以上はある洞穴が、山の壁にぽっかりと開いていた。

そして、その奥に数十人くらいの気配がある。

「ここにいるのかな？」

『それは分からないけど・・・山賊たちはひとまとまりになっているから、多分居ると思う。』

「じゃあいるだろうね。」

ていうかもしいなかったらどうしよう？

また晶の家に住み着くかな？

・・・それもいいな。

『とりあえず・・・どこから忍び込むか・・・』

「すみませーん。」

「!?!?。」

後ろで晶がびつくりした効果音が聞こえた気がするけど、そんなのは気にしない。

え？何でびつくりしてるかって？

さあ、俺が堂々と洞穴の前に立って呼びかけているからかもしれないな。

「すみませーん、山賊いませんか？」

たとえば、洞穴の奥から数人の気配が向かってきた。
出てきたのは、いかにもゴロツキっぽい顔をした男達が5人。

「あゝあゝ！？誰だデメエは！？」

「あのさ、とりあえず全員出てきてくれない？確認したいことがあるから。」

「ふん、ソイツはかなわねえな。」

「え？どして？」

「てめえは此処で死ぬんだ、よッ！」

その声とともに、3人が武器を構えて飛び掛ってきた。
けど、構えがなっていない上に隙がありすぎる。

——弱いね、虫けらみたいに。

後ろで晶が息を呑むのが聞こえた。

「ひっ……！」

残った2人が豚みたいな声を上げると、洞穴に向かって叫んだ。

「てっ、敵だアアアアア！3人殺られたアアアアア！」

その十数秒後、洞穴の奥から山賊たちがぞろぞろと。
うっん、100人以上はいるんじゃないかな？

「良かった、手間が省けて。」

俺がニコニコ笑って言うと、リーダーらしい男が前に出てきた。

「君がリーダーかい？」

「だったらどうした・・・にしても、こんな優男に殺られたのかア？」

ふうん・・・見たとこ、他の連中とは格が違うみたいだね。

「そだよ。こんな優男に、君達の部下は殺されたのさ。」

そう言うと、声が上がった。

「ま、待ってください死羅縫伊さん！」

人ごみを掻き分けて出てきたのは、えーと・・・云業、だっけ？

違うな、けど云業に似てる。ていうか、俺の師団は皆似たような顔してないか？

ああ、こいつか。裏切り者。

「そっ・・・そいつ、春雨第七師団団長です！」

そいつって、飯にも元上司だろ？

途端、男達がざわめきだした。

「第七師団団長!？」

「あの、『雷槍』か!？」

ざわざわと騒ぎ出す男達。

けど、死羅縫伊と呼ばれた男が手に持った槍を地面に突き立てた瞬間、あっというまに静まり返った。

ふうん・・・少しはやれるみたいだね。

流石に、山賊たちを束ねているだけはあるヨ。

「ガタガタ言ってるじゃねえ。・・・殺れ。」

それを合図に、男達が次々に武器を構え、つつこんできた。

「やれやれ。弱いヤツに用は無いんだけどね・・・。」

でも、阿伏兔に無理言っ て来てるからなあ。

ここでもし任務放棄しちゃったら、今度こそストレスでぶっ倒れるかも。

・・・うん、それは困る。

書類整理を担当してくれる部下が、いなくなっちゃうからね。

「仕方ないなあ・・・」

そういつて、俺も構える。

「来なよ。面倒くさいから、いっぺんに。」

そして――

阿鼻叫喚の宴は始まった。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（前書き）

更新が不定期になっていくと思いますが、見捨てないでください！
（土下座）

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？

ずしゃっ。

ざくっ。

びしゃっ。

「むー……本当に手ごたえが無いなあ。」

あれから数分間。

50人近い男達を殺したけど、まだまだいるみたい。
流石に飽きてくる。

「く、くそおおおおっ！」

また一人、悲鳴に近い声を上げながら斬りかっってくる。

「遅いよ。」

言って、攻撃を避けるとまた殺した。

「な、何なんだコイツ！」

「バカみてえにつええじゃねえか・・・」

「このままじゃ・・・全員・・・！」

殺される――。

そんな雰囲気か辺りを包んだ瞬間。

「雷槍！そこまでだ！」

やけに自信満々の男の声が聞こえたから、振り返れば。

気絶した晶が、死羅縫伊という男に抱えられ、喉元に刀を突きつけられていた。

「……ありやうや。」

小さく呟く。

「この女は、お前の仲間か？」

「……だったらどうするの？」

ニヤ、と男が笑った。

「決まったらア、人質にするんだよ。」

ぐい、と喉に刃を当てる。

白くて折れそうな晶の首に、斬れるか斬れないかギリギリで食い込んでいる。

「さて、まず地面に膝をつけ。手を頭の上に置いてもらおうか。」

「そんなこと、俺がすると思ってるの?」

「しなくてもかまわねえぜ?この女が死ぬただだ。」

あーあ、予想外の展開だな。

どうしよう?

「仮に俺がそれをやったら、どうするの?」

「お前を殺して、この女は・・・そうだな、たっぷり可愛がってやるよ。」

うわ、出たよ。お約束のセリフ。

周りの山賊共もニヤニヤ笑ってるし、超キモい。

ドラマだとこのあとすぐに救いのヒーローが現れるんだろうけど、そんなもんがこの山奥に現れるはずはないしネ。

ていうか、予想以上にムカつくな。
すんごい腹立つ。

「10秒以内に膝をつけ。さもなきゃ、この女は殺す。」

そして、楽しそうにカウントダウンを始めた。

・・・どうしよう？

つか俺、どうしたんだろ。
普段の俺なら、部下が人質に取られようと何だろうとなんとも思わなかったのに。

俺が死ぬのもヤだ。

晶が陵辱されるのもヤだ。

こんなこと思っただのは初めてだ。
どうしよう・・・？

「さーん、にーい、いー・・・」

死羅縫伊の口が、いびつに歪んだその瞬間。

気絶していたはずの晶の目が、一瞬で見開かれた。

「・・・ありゃりゃ。」

また、さっきと同じ眩きが口から漏れた。

何だ、気絶したフリしてただけなんだね。

ドゴッ。

晶が刀に手を添え、一瞬で、死羅縫伊の鳩尾に肘を叩き込んだ。

「なっ……！この女、意識が……！」

死羅縫伊は、最後まで言えなかった。

晶が高々と掲げた踵が、死羅縫伊の脳天に真っ直ぐ落ちたからだ。

おー、ナイス踵落とし。

「な、何だこの女！？」

「只者じゃねえぞ！」

「気絶したフリしてたのか！」

ふうん。やっぱり、晶はただの女じゃ無かったや。
全身から立ち上る殺気はその証拠だ。

「何で、気絶したフリしたの？」

背中合わせになって、後ろの晶に問いかける。
すると、一枚の紙がひらり。

『その方が、リーダーを討ち取りやすそうだったから。』
「なる。」

ぽん、と手を打った。

と、また紙が一枚。

『・・・何でこんなに殺した？』

「え？そりゃ、刃向かってきたから。」

それにさ、と続けた。

「殺してくれって言ったのは、晶だったよネ？」

『・・・私は軽くボコれとしか言っていない。』

「そうだったけ？」

でもさ、大して意味変わらなくない？

「ま、とりあえずお説教は後でにしてヨ。」

「・・・・・・・・。」

まだ、50人くらいは残ってるんだからさ。

「や、やれエエエエエエエエ！」

まだ刃向かってくる山賊共。

本当は、とつくに裏切り者なんて殺しちゃってるんだけど。
暇つぶしには、なるかな？

「さて、もう一仕事。」

そう言って、俺達は飛び出した。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（前書き）

ついに到達しましたよ50話。

100話いくまでに終わるでしょうか。

〈番外編〉 暴君兎とお姫様？

そこから先は驚くほどスムーズに全てが終わった。

山賊たちは4分の3は死に、4分の1は気絶してぶっ倒れている。
4分の3は俺が殺して、残る4分の1は晶がやった。

見えて分かったけど、やっぱり晶は只者じゃない。
鳩尾に肘を叩き込んだり、手刀を首筋に的確に入れる様は、どう見てもケン力慣れしていた。

本当に殺す気だったら、もっと別の顔が見れたかもしれないけど。

全部片付いたあと、晶は震える死羅縫伊に極太筆で

『もう二度と村に近づくな』

とだけ書き残し、足早に去っていった。

俺もその後を追った。

[illegible]

いつの間にか夕暮れ時になり、山々にもオレンジ色がかっていた。

帰り道を歩き出してから１時間はたつけど、晶はずっと黙り込んでいる。

何かを考え込んでいたけど、その後姿にはただならぬものがあって、話しかけられなかった。

やがて、晶が決して歩を止めないまま、振り返った。

泣きそうな、怒っているような、複雑な顔で、紙を押し付けてきた。

『神威が春雨第七師団団長って、本当？』

——それだけのことを聞くのに、何であんなに考え込んだんだろう？

聞かれた内容よりも、そっちの方が気になって仕方なかった。

俺が山賊どもを殺したのを見た時だって、驚きはしていたけど、それだけだった。

分かってたんだろう、俺が戦うのに慣れていて、殺すことを何とも思わないことぐらい。

じゃあ、それだけ何で春雨ことに、敏感なんだろう？

「・・・そうだけど、それがどうかしたの？」

隠しても無駄だろうと思ったし、正直に告げた。

すると、晶の顔がますます歪んだ。

何かに葛藤している顔。

「……春雨に、何か思いいれでもあるの？」

思わず口をついて出たその言葉に、びくりと肩を震わせて反応する晶。

図星……らしいけど、多分思い入れがあるとか、そんなに生易しいものじゃない気がする。

あきらかに反応が大きすぎる。

それこそ、一生トラウマになるような恐怖を、憎しみを植えつけられたとか……。

「春雨が嫌い？」

「……………（しゅっ）。」

「憎んでる？」

「……………。」

晶は顔を背けた。

でも、それは誤魔化しにしかなくていない。

「ふうん、それで俺のことが嫌いになったわけ？」

嫌われてもおかしくないかな、と思った。

多分だけど、晶は春雨を物凄く憎んでいるはずだ。

故に、春雨の一員、しかも団長である俺を自分の家に泊め、ほんの少しだけ近くなったことに対して複雑な感情をもっているに違いない。

だから、晶の返答は意外だった。

『嫌いとか・・・軽蔑とか、そんなんじゃない・・・。』

「え？」

びっくりだ。

てつきり嫌われたのかと思ってた。

「じゃあさ、」

『頼むからもう何も聞かないで。』

俺が何かを言う前に、紙に書かれた文字に止められた。

俺の前を早足で歩いていく背中に、何も言わずついていった。

——そして、俺も布団に入って夜明けに近い頃。

俺は眠っている晶を起こさずに家を出て、村はずれに停めてある小型船の元へ向かっていた。

逃げるとかそんなんじゃないで、ただ単に、「任務が終わったし、帰ろっかな。」と思ったただけだ。

それに、これ以上居たところで晶を悩ませるだけだろうし、そんな晶を見ているのは、面倒くさい。ていうか嫌だ。

置手紙も残さず出てきたけど、晶は多分理解するだろう。

そういう女だから。

俺は船の行き先設定に「帰投ポイント」とだけ打ち込むと、席に寝転んだ。

船に僅かな衝撃が走り、少しずつ上昇していくのが分かる。

窓を見れば太陽が上がり、夜明けをゆっくりと告げていた。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（後書き）

何だ、この無理やりすぎる展開・・・。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？（前書き）

やっと終わりますよ番外編。

まさか10まで続くとは・・・。

〈番外編〉 暴君兔とお姫様？

突然、ぱっちり目が覚めた。
がばりと身を起こして、辺りを見回す。

私の布団に3メートルほど間を空けて敷かれた布団は掛け布団がめくれ上がり、誰も居なかった。

「・・・・・・・・！」

慌てて玄関に行くと、あの桜色の髪を持った彼の靴と、傘がどこにもない。

外を見ると、太陽が明るく昇り始めていた。

時間帯で言えば、5時半から6時と言ったところ。

「・・・・・・・・。」

——帰ったのか・・・・・・・・。

謝ろつと、思っていた。

昨日は考えることが多すぎて、神威にだいぶ不躰な態度を取ってしまつたように思う。

言い訳になつてしまふけれど、頭の中がごちゃごちゃになつていたので。

初めて会つたときから、気づいていた。

神威がかなりヤバイ組織の一員であることも。それ以上に、神威自身がとても危険な人物であることも……。

いつもニコニコ笑っているが、その笑みを絶やさずに人を殺せるような男だと。

攘夷戦争でそれだけの修羅場を潜り抜けてきたのだから、分からないはずもない。

だから、神威が「裏切り者は殺す」と言つた時も、大して驚かなかつた。

この村の人間だけは傷つけさせない。そう思つただけだった。

でも、数日間見ていた神威は、その片鱗すら見せなかった。

寝転がってゴロゴロしたり、子供と戯れたり、（めちゃくちゃ）
飯を要求してきたり。

あえて言うなら、土砂降りの雨が降る山に入って行って、熊を担いできたときはびっくりした。

でも、「晶は悪くないよ」と言われた時、微かに心が救われた。救われてしまった。

—— 本当は、悪くないヤツなのかも・・・。

そう思い始めていた。

山賊どもの口から「春雨第七師団団長」という言葉が飛び出す前は。

どうすればいいのかわからなかった。

神威自身はそこまで悪いやつではないのかもしれない。

でも、春雨は極道集団の集まりで。

なにより、春雨は、あの男は……。

別に神威が嫌いになつたわけではない。

それだけは断言できる。

でも、神威は恐らく勘付いただろう。

私が、春雨にただならぬ思い入れがあることを。

神威の視線が痛くて、私は逃げるように布団に潜り込んでしまった。

——また、逃げてしまった……。

謝りたかった。謝れなかった。

見上げた空には天空高く上っていく、飛行機雲ができていた。

[illegible]

「むー……」

「どうしたんだ？ 団長。」

阿伏兔は、さっきから珍しく考え込んでいるらしい自分の上司に声を掛けた。

彼は何とか数日間、神威の不在を誤魔化しき（めっちゃ怪しまれたけど）ったのだが。

5、6時間ほど前にいきなり神威が戻ってきて、ずっとペンを指でクルクルやって考え事をしているから困っているのだ。

「・・・あぶとー。」

「あん？何だ？」

突然、むくりと起き上がった神威が、阿伏兔に言った。

「あのさ、春雨の過去記録とかって、どっいつのがある？」

「どうしたんだ、藪から棒に。」

「いーから。」

神威にせかされて、阿伏兔は指を折りながら数えていく。

「そっだなあ、任務記録、商品売買記録、経費報告書・・・。」

ある単語のところで、神威のアホ毛がぴよこんと揺れた。

「じゃあさ、その記録から『藍色の髪地球人』を調べてヨ。」

「あゝ？何だよ。」

「いーの。早くしないと……………」

殺しちゃうぞ？

背後に脅しの言葉を浴びながら、阿伏兔は団長室から退室した。

数時間後。

「あ、阿伏兔。早かったね。」

「まーな。藍色の髪の地球人なんて、コイツくらいしか見つからなかったぜ。」

阿伏兔がバサリと資料を神威に向かって投げた。

綺麗にキャッチする神威。

ぱらぱらとめくりだすと、神威の目が少しだけ見開かれた。

「そいつがどうかしたのか？」

阿伏兔も一緒に資料を覗き込む。

それは、とある過去記録。

藍色の髪を短く切った、男か女か分からない、幼い子供の写真が貼り付けられていた。

まだ10歳程度にしかならないであろうその子供は、鋭い目でこちら側を睨みつけている。

「昔の記録だからな、そうとう雑だぜ？」

「・・・確かにね。」

神威はふう、と息を吐いた。

（マジで、何があつたのかねえ・・・。）

そんな神威を、阿伏兔は横目で見た。

彼がこんなに他人に執着するのは極めて珍しい。

銀髪の侍以来ではないだろうか。

そんな阿伏兔には構わず、神威は外を眺めた。

「成程ね……………」

眩きは誰にも拾われることなく、宇宙の闇に溶けていった。

〈番外編〉 暴君兎とお姫様？（後書き）

えっと、書き終わって一言。

訳分からない上にとてつもなくグダグダですみません！！（スライディング土下座）

次から第2章に入っていきます。

え？今更第二章のプロローグ？

その部屋は、凄まじい緊張感で満たされていた。

円形に並べられた机と椅子。それに座っている人物達の顔は見えない。

その円の中央に、宇宙三大傭兵部族——辰羅の男が立っている。

男の顔には、一切の余裕が無い。

無理も無いだろう。

身も竦む様な殺気が、男一人に向けて一瞬の間を空けることなく注がれているのだから。

「・・・・・・・・我等は、お前を甘く見すぎていたようだ。」

椅子に座った人物の一人が、重々しく口を開いた。

びくりと震える男の肩。

「此度の失態は、おいそれと許せるものではあるまい。」

別の人物が口を開くと、男が顔を上げた。

「お、お待ちください!」

懇願するような男の声。

「待つものか。さっさと処刑してしまえばいい。」

また別の声が、冷酷に吐き捨てた。

「お頼み申し上げます！どうか、私めに一度だけ、償わせる機会を

ください！」

もはや祈りに近い男の叫び。

「償うだど？何をする気だ？」

その声に、男は希望に顔を輝かせ、高らかに告げた。

「白夜叉を

——始末してごらんにいねます！」

月夜の晩ばかりと思つなよ（前書き）

塾の夏期講習が殺人的すぎる。
書く暇も何也没有せん。

月夜の晩ばかりと思うなよ

「いやあゝ、パチンコの神様っているもんだねえ。」

フンフンフン、と鼻歌を歌いながら、銀時は夜道を歩いていた。彼が上機嫌なのはいわずもがな、パチンコで珍しく大当たりしたからだ。

そのおかげで懷が温かくなるどころか、3時間つけっぱなしにした電灯並みに熱くなっており、スキップでもしそうな足取りだった。

が、そんな彼に突然、背後から声が掛かった。

「おい、その銀髪。」

「はい？銀髪イケメンお兄さんに何か用ですか？」

「誰もそこまで言っただねえぞ！？」

律儀に突っ込んできた背後の人物を振り返れば、蛙みみたいな顔をした天人が立っていた。

「んで？銀髪イケメンモテモテ金持ちお兄さんに、何か用？」

「だから誰もそこまで言っただけ！つかグレードアップしてるし！」

天人がイライラと突っ込んでも、相変わらず上機嫌のままな銀時。

「はいはい。んで、何の用？」

「貴様、白夜叉だな？」

「……！」

突然天人の口から出てきた言葉に僅かに目を見開く銀時。
しかし、一瞬の後には平静さを取り戻し、

「知らねえな、何の話だ？」

「とぼけても無駄だ。銀髪で紅の瞳^めを持つ地球人など、そうそうおらんからな。」

天人が言つと、銀時は参ったというように手で頭をガシガシとやつた。

「知らねえって言ってるのになあ。つか、仮に俺が白夜叉だったらどうするわけ？」

「じつするのだ。」

蛙頭がニヤリと笑い、右手を上げた。

すると、そこらへんの暗がりから、ぞろぞろと天人が出てくる。

その数、およそ20といったところ。

「突然で悪いが、貴様には死んでもらう。」

蛙頭が宣言する。

辺りを見渡し、銀時はため息をついた。

「かしーな」。最近結構真面目に生きてきたつもりなんだけど。」

こんなにたくさんの人に恨まれるようなことしたっけ？

銀時が呟いた瞬間、天人の一人が飛び出した。

それを合図に、次々と飛び掛かってくる天人達。

——が、人数差はあれども、如何せん實力には天と地ほどの差があった。

刹那、銀時が動く。

数十秒後、全ての天人は地にはいつくばっていた。

「な．．．！」

蛙頭が絶句する。

その蛙頭のところへ銀時が歩を進めると、蛙頭は後ずさった。

「き、貴様ア！」

逆ギレして飛び掛ってくる蛙頭を地面に受け流すと、銀時は木刀を突きつけた。

「答える。何で俺を殺しに来た。」

それに、と続ける。

「依頼主は誰だ。 テメエらみたいな雑魚はただ雇われただけだろう。」

その瞳には、冷酷な光が宿っていた。

「答える。」

「う、あああ……。」

蛙頭がうめきながらも、何かを言おうとしたそのとき。

バギューン!!

一発の銃声。

それとほぼ同時に、蛙頭が倒れる。

蛙頭のこめかみには風穴があき、血がどくどくと流れ出ていた。

銀時が振り返ると、ついさっき倒したはずの天人が走り去っていくのが見えた。

もうそれは既に、追える距離ではなくなっている。

「ちっ、やられたフリまでして、詳細を話したくねえってか……。」

思わず舌打ちする銀時。

「てかこれ、どーしょ。」

辺りはぶっ倒れた天人の山と、一つの死体。

「……まあいい。帰るか……。」

やや不機嫌そうな顔をしながらも、銀時は家への帰路を急いだ。

人の噂は70・・・あれ、35日だっけ？

ゴウンゴウンと音を立てて宇宙を航行する春雨第七師団戦闘船。
その中にある団長室の椅子で、神威はぐるぐると回転させながら遊んでいた。

バン！！！！！！

と、突然ドアが音高く開いた。

ちよつと驚いた顔の神威がドアへ目を向けると、阿伏兔が息を切らして立っていた。

「だ、団長！いるか！？」

「どうしたの阿伏兔？何でそんなに慌ててるの？」

神威が不思議そうな視線を送ると、阿伏兔はホツとした顔つきになった。

「い、いやあ、ちよつと心配になったただけだ。気にしないでくれ。」

「ねえ、ちよつとあ」

神威が言うよりも先に、阿伏兔は逃げるように立ち去った。

「???何なんだろう?」

小首をかしげて考える神威。

だが、一向に阿伏兔の変な態度に対する理由が分からない。

「ま、いつか。」

そろそろオジサンだし、ボケが始まってるんだよね、きっと。

自分を納得させる。

しかし、その理由は意外にも早く分かることになった。

あれから数時間後。

そのとき、ふと物陰から声が聞こえてきた。

「おー、聞いた聞いた。霜龍団長のことだろ？」

「相当ヤベエって話じゃねえか。処刑されないのか？」

「いやあ、聞いた話によると、地球にいる侍を始末できたらチャラにするらしいぜ。」

「へえ、その話、詳しく聞かせてくれない？」

「ああ、いいぜ……って、団長オオオオ！？」

突然割り込んできた声に、こたえてからオッサンはびびった。

会話にいきなり乱入してきた声の持ち主が、桜色のアホ毛を揺らした神威だったからだ。

「だ、団長！？どうしたんですか！？」

「どーもしてないよ。それより、さっきの話を聞かせてヨ。」

「いいですけど……何ですか？」

言うつ、神威は首をかしげた。

「んー……侍って言葉に、ちょっと引っ掛かってね。」

ていうか、早く話せよ。

言っと、2人は顔を見合わせ、片方が口を開いた。

「第六師団の団長、霜龍団長のことは知ってますよね？」

「知らない。」

あっけらんかんと云う神威に、思わずずっこけそうになる2人。

――飯にも第七師団団長が、何でそんなこと知らないんだ！！

気を取り直して続ける。

「ま、まあその霜龍団長つてのは、10年くらい第六師団を引っ張り続けてる古株なんですがね、その10年間、春雨の資金をネコババしてたらしいんですよ。」

「へえ……。」

「で、その額が半端じゃないそうです。他にもヤクをちよるまかしたとも言いますしね、元老に呼び出されて、処刑されかけたそうなんです。」

「何で処刑されないの？」

神威が不思議そうに言うと、おっさんの片方が後を引き取って続けた。

「実は、地球にいる目障りな侍を始末するから殺さないでくれと、元老に掛け合ったみたいですよ。」

「目障りな侍？誰？」

神威が言うと、今度はおっさんが不思議そうな顔をした。

「あれ、知りませんか？桃源郷の密輸を邪魔したっていう、銀髪紅目の侍ですよ。」

「・・・・・・・・!!!!!!」

神威は目を見開いた。

次の瞬間、おっさん2人に目もくれず駆けだす。

「どうしたんですか？だんちょー!!」

「ちょっとねー!!」

神威が叫び返した頃には、おっさんの目に映る神威はだいぶ小さくなっていた。

思い立ったが吉日（前書き）

こんなに更新の遅い作品でも見捨てないでくださる皆様に感謝。

思い立ったが吉日

ピンポンパンポーン♪

突如、第七師団の船に放送が流れた。

『阿伏兔く、2秒以内に団長室に来てね。早く来ないと、殺しちゃうぞ?』

ブツツと声が途切れた。

「なあ、今の、団長の声だったよな?」

「・・・ああ。」

さっきまで神威と話をしていた団員2人が顔を見合わせていると。

「だああああああんちよおおおおおおお!」

久しぶりに目が生きている阿伏兔がその傍を駆け抜けていった。

「遅いよ阿伏兔！。2分18秒立ってるよ？」

ぷくうと頬を膨らませる神威。その前には、

「こんだけ、バカデカい船で、3分以内につけた方が、すごいっての……。」

息を切らせた阿伏兔が、文節ごとに区切りながら喋っていた。

「さて、阿伏兔。」

相も変わらずニコニコと笑っている神威が、突然話題を切り出した。

「俺が何で呼び出したか、分かるかな？」

「……………オジサンよく分かんない」

必死で可愛い言い方をして誤魔化しを試みる阿伏兔。しかし、

「次に、その気色悪い喋り方したら・・・殺すよ?」

いや、マジの殺すですか。いつもの殺しちゃうぞじゃなくて。

神威から本物の殺意を向けられた阿伏兔は、がくりと項垂れた。

——俺の、負けだ・・・。

「さて、もう一度聞くけど、何で俺が呼び出したか分かる?」

「・・・大方、第六師団の霜龍団長のことだろ。」

諦めた阿伏兔は半ばやけくそで言った。

「うん。何かいろいろパクってその埋め合わせをするために——

」

あの銀髪のお兄さんを殺すって言ってるそうじゃないか。

そう言った神威の顔は、笑っていなかった。

自分の獲物に手を出されて怒り狂う獣の目。

「前に、俺がちゃんと部屋にいるかどうかを確認したのも、」

「そうだよ。アンタがもしその話を聞いてたら、仕事ほっぽりだして地球に行きかねないからな。」

阿伏兔が後を引き継ぐと、再び神威がニツコリ笑った。

「俺のこと、よく分かってるネ、阿伏兔。」

「いやあの、まさかホントに……。」

冷や汗を流す阿伏兔に、神威は一言。

「行くよ。行くに決まってるじゃないか、地球に。」

「ま、待てよ団長！確かにあの銀髪の兄ちゃんを気に入ってるのは知ってるけどよ、いきなり地球になんて行けな」

「阿伏兔。」

阿伏兔の言葉は途中で遮られた。

「あのお兄さんは強いけど、ただの人間だ。大した権力はない。それに、霜龍は処刑されかかったって言うじゃないか。多分本気で、殺^やりに行く。」

「でもよお、」

「俺はね、あのお兄さんとサシでやり合いたいんだ。誰にもその邪魔なんてさせない。」

神威の目はいつもの笑い目ではなく、カッと見開かれている。

「それに、霜流は処刑されかけた身だろ？殺したって、大したお咎めはないだろ？」

――俺は、俺の魂を潤すためなら、誰を敵に回したって構わない。

その一言を聞き、阿伏兔はため息をついた。

――ダメだ、こりゃ。

「・・・分かったよ。とりあえず、俺と団長が抜けてもいいように都合をつけてくるわ。」

「あり？阿伏兔も行くつもりなの？」

「あつたりまえだが、すつとこどっこい。どっかの団長サマをこないだみたくにほつとくわけにはいかねえんだよ。」

「・・・ま。そーかもネ。」

再び神威の顔には、仮面のような笑顔が張り付いていた。

世間は意外と狭いのさ

「・・・つまり、失敗したと？」

薄暗いビルの一室。

辰羅の男が低い声で言った。

「はい。やはり、そこらへんのチンピラ共では相手になりませんでした。」

その背後に立った女が言った。

顔かたちは美しいが、氷のような雰囲気を纏った女だった。

「ふん。伊達に『白夜叉』と呼ばれたわけではない、か・・・。」

「どうするのですか？師団員を送りましょうか？」

「いや、とりあえずはいい。できるだけこちらの正体を晒したくは無い。」

女がふうと溜息をつく。

「そのように悠長にしていって構わないのですか？早く始末をしなければ、危ういのはあなたですよ？」

「俺だけ？よくまあ、そこまで他人事のように言えるものだな。」

男がハッと嘲笑した。

「貴様とて俺に加担してきたんだ。危ういのは同じだろう？」

なあ、と振り向かずに言う。

「商品番号P - 209。」

その瞬間、凄まじい殺気が女から立ち上る。

「それは番号であって名前ではありません。私の名前は魍じです。」

「ああ、済まなかったな。」

男が笑い混じりの謝罪の言葉を言うと、魎と名乗った女は更に深い溜息をついた。

「もっと危機感を感じてください——霜龍団長。」

霜龍と呼ばれた男の顔がスツと本気になる。

「分かってるさ。元老達に向けられたあの殺気、この身が嫌ってほど覚えてる。」

「なら構いません。私だって、貴方に死なれては困るんです。」

霜龍が振り返った。

数多の修羅場を潜ってきた彼の顔は、多くの傷がついてもなお、端麗さを失っていないかった。

が、その奥底に眠るのは、残酷で自分本位の暗く淀んだ光。

しかし、今はその顔に疑問符を浮かべている。

「困るだど？可笑しなことを言うヤツだな。お前は、俺を憎んでいるんじゃないかったか？」

その言葉を聞いて、魍は冷静に返した。

「当たり前ですよ。私は貴方を憎んでいます。今更それがどうかしたんですか？」

「いや、お前が憎しみを忘れたのかと思ってな。」

「寝言は寝てから言ってください。私は

「貴方も、この世界も、全て憎んでいるんですから。」

迷っても迷わなくてもとりあえず行動しろ

ガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラ……。

「ちょ、ちよつと晶ちゃん！何やってるの！？」

「……！！??？」

村人のおばさんに声を掛けられて、晶はハッとなった。

晶は井戸で水汲みをしていた、が。

ぼんやりしていて、気がつけば水を汲んでは井戸の中に戻し、汲み上げては戻しを繰り返していたのだ。

おばさんに声を掛けられなければ、多分それをずっと繰り返していたのだろうと思う。

「まったくもう、どうしたんだい？ぼーっとして、何か悩みでもあるの？」

『……いや、ちよつと。』

言葉を濁すと、おばさんはさらに聞いてきた。

「そういえばさ、晶ちゃんの家泊まってたキレイな髪のカッコいい男の子いたろ？あの子、どうしたの？」

「・・・・・・・・。」

「子供達が『おねーちゃんに恋人ができたー』とか騒いでたけど、いつのまにか居なくなってる——」

ガタッ

『すみません、ちょっと急いでのので。』

おばさんを置いて、晶は足早に井戸端を去った。

そんな晶の後姿を眺めながら、おばさんは首を傾げていた。

[illegible]

家の中に急いで飛び込み、後ろ手に戸を閉める。

走ったわけでもないのに、息は若干荒くなっていた。

ほう、と息をつき、その場へたり込む。

あれだけのことで、心を乱されるなんて……。

神威が居なくなった後も、いろいろと考えた。

そして、思い浮かんだ最悪のパターン。

——もしも、神威があの男に私のことを話したら……。

可能性はごくごく低い。

でも、藍色の髪を持った地球人なんて、そうそういるものじゃない。

あの男がそのことからあの頃の私を連想したとしたら・・・。

私を、また・・・。

——思い出されるのは、地獄のような日々。

舞う血飛沫。断末魔の悲鳴。

その記憶に、体が自然と震えるのを感じた。

自分で自分を抱きしめて、何とか震えを抑える。

いやだ。いやだいやだいやだ。

あんな地獄になんて、もう二度と帰りたくない……………！

うつすらと雫がたまり始めた目を、キッと引き締める。

誰か、誰かに、話せたら……………。

頼れそうな人を思い浮かべる。

私の過去を知っていて、信用できて、どこにいるか分かる人・・・。

当然、浮かんできたのは、鮮やかな銀色で。

—— 明日あたり、銀兄のところに行こう。

この胸に宿る不安を、少しでも信頼する人に話せる。

そう思うだけで、彼女の気持ちは少しだけ楽になるのだった。

手え出すなって言われたら絶対に手を出すな

神威が笑顔で事務職の人たちを脅し。

阿伏兔が居なくなる分の仕事を埋め合わせるため奔走した結果。

今、2人は宇宙を小型船でフワフワ漂っていた。

「ところでよお、団長。」

「ん？何？」

丁度地球が見えた頃。

阿伏兔がふと口を開くと、上機嫌な神威は普段にもましてニコニコしながら答えた。

「地球に行くのは良いが、どこに行くんだ？」

「んゝ・・・とりあえず江戸に行こうか。まず銀髪のお侍さんを見
つけなきゃいけないから。」

「あいよ。」

阿伏兔が蛇輪を切った。

背後の神威が、おもちゃを見つけた子供のように蛇輪を見つめていたことを・・・。

[illegible]

は昼寝をしていた。

が、いつもならジャンプを読むかテレビを見るかぼんやりするかしている銀時だけが、いつも違った。

どこかピリピリとした雰囲気を身に纏い、鋭い目で虚空を睥みつけている。

その様子をちらりと見た神楽が、新八にひそひそと耳打ちした。

「銀ちゃんどうしたアルか？一昨日くらいからずっとあんな調子ヨ。何があつたネ？」

新八もひそひそと返す。

「僕もよく分からないけど・・・一昨日の夜、銀さんパチンコに行つたんだよね？その時に、何かあつたのかな？」

「パチンコで大失敗したわけじゃないヨ。だって、昨日からずっと朝ごはんに沢庵と納豆がついてるネ。」

「うん、豪華なのか分からないや。ていうか、沢庵にしても納豆に

してもご飯に付け合せるものじゃん。どうやって食べてるの?」

「まず、納豆を混ぜてから、沢庵をみじん切りにして……」

とまあ、いくらか話は脱線してしまったが、一昨日からピリピリしている銀時に、2人は頭を悩ませ続けていたのだった。

そんな二人にお構いなしに、相変わらずどこともなしに睨みつける銀時。

考えているのは、連日連夜起こっている天人達の襲撃だった。

一昨日、殺そうとしてきた天人達を倒したはよかったが、それが合図だったかのように、銀時が町を歩けば狙われるようになったのだ。

そこらへんのチンピラレベルのヤツもいれば、それなりに修羅場を潜ってきたヤツもいる。

共通してるのは、銀時が人気の無い路地などに入ると、これ幸いと言わんばかりに襲い掛かってくるということ。

訳が分からなかった。

心当たりが本当にないのだから。

じゃあ何で、奴等は――と、考えが延々と堂々巡りしている状態だ。

と、悶々としていたところ。

ピンポン♪

「あ、誰か来たみたいですね。出てきます。」

「宗教勧誘アルか？」

「懐かしいね、そのネタ。」

と新八が応対に行つて十数秒後。

「あ、晶さん！！？！？」

という叫びが玄関から響いてくると、

「アッキーナ！？本当アルか！？」

神楽が一目散に駆け出していった。

その声に銀時も反応し、無言で晶が入ってくるのを待つ。

「おい、何か土産は……………」

と言い掛けて、銀時は口を閉じた。

入ってきた晶の顔が、あまりにも思い悩み詰めた顔をしていたからだ。

もともと雪の様に白い肌だが、今は若干青ざめているようにすら感じた。

そんな晶の様子に、両隣に立つ新八と晶も心配そうな顔をしている。

「おい、どうした。何があった。」

とりあえずソファに座るように促すと、そつと音も無く晶は座った。

「おい、晶。」

「あ、あの・・・。」

「何かあったアルか？」

3人が声を掛けるが、俯いてしまふ。

だが、

「晶、俺はお前が話したがないことは無理に聞こうとは思わない。けどよ、お前は話したいことがあったから此処に来たんだろ？だったら全部話せ。」

銀時が諭すように言うと、晶はようやく顔を上げた。

「・・・・・・・・（スッ）」

「いやだから手話じゃ分かりませんってば。」

新八がツッコむとおもむろに懷から紙と筆を取り出す。

そして、流麗な筆遣いでさらさらと書き綴り始めた。

『先日、妙な男が私の住む村に来たんだ……。』

「妙な男？どんなヤツだよ？」

銀時が眉を寄せる。

『何かこう・・・悪いやつではないと思うんだけど、春雨の師団長だったらしくて・・・。』

「は、春雨の師団長！？どんな人だったんですか？」

新八は泡を吹かんばかりに慌てるも、とりあえず聞いてみた。

『いつもニコニコ笑ってて、髪の毛はオレンジ交じりの桜色。アホ毛があった。』

その言葉に、3人は息を呑んだ。

若干一名、思い当たる人物がいたからだ。

神楽がせいたように言葉をつむぐ。

「そ、それってまさか――！！！」

か、と神樂が言葉を続けようとしたとき。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ……

何かが落下してくるような音が響いた。

「え？ちよ、コレ、何の音？」

「何か、飛行機みたいな音ですけど・・・。」

「にしては近すぎるネ。」

音は段々と万事屋の上空を覆い始めた。

「「「え・・・？」「」」

『ま、さか・・・。』

そのまさか。

ド
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
！

耳を劈く、とはまさにこのことです。

小型の宇宙船が万事屋に突っ込んできたとき、4人は鼓膜が破れたかと思った。

そして、宇宙船が砂埃を上げて万事屋の半分を壊していく様を、呆然としながら眺めていた。

砂埃が収まり、誰も動かなくなつて数秒後。

シュイン、と軽やかな音がして、船の扉が横に開いた。

そこから現れた人物は、桜色の髪をおさげにしてたなびかせ。

ちよつとびっくりしたらしいその顔の上では、アホ毛がひょこひょこ揺れていた。

トン、と音を立てて万事屋の中に着地すると、拳を額に当て、舌をペロッと出した。

「着陸失敗しちゃった、えへ」

「「「えへじゃねーだろがこのアホ毛EEEEEEEE!!」
「!」

反省の無いヤツはタチが悪い

万事屋の半分を瓦礫の山とした宇宙船から出てきた神威。

啞然としていた一同だが、神威の「てへっ」「発言で何とか息を吹き返した。」

「アンター一体何なんですか！！何で登場早々人の家ぶっ壊してるんですか！！」

口火を切ったのは新八である。

「いやさー、地球に来たのはいいんだけど、どこに船を停めればいいのか分からなくてね。んで、フツと見たら『万事屋』なんて書いてあったもんだから。」

「意味わかんないですよ！万事屋だからアレですか！？宇宙船でも停めてくれるんじゃない？みたいな発想ですか！？」

「むしろ『停めてくれなきゃ殺す』だね。」

「暴君だ！ここにヒトラーも真っ青の暴君がいるよ！！」

「大体デメー」てへっ」って何なんだよ！最後の　がイラッてく

るわ！」

言ったのは銀時。

「言えばすぐに元に戻るかなあと思ってね。」

「んなご都合主義がこの小説にあると思うなアアアアアアア！」

銀時のツッコみをどこか遠いところで聞いているような気がしながら新八は思った。

——ああ、ダメだこの人。

だって存在がボケだもの。自分が悪いってひとかけらも思っていないもの。

そして数分間に及ぶボケとツッコみの応酬をした後、ようやく神威と銀時が一息ついた。

「それにしても、嬉しいな。銀髪のお兄さんにこんな簡単に会えるなんて。何かの縁かな？」

「んな中二病患者との縁なんざいらねーよ。にしても、何だその口ぶりは。俺に何か用があるみてーな言い方じゃねえか。」

「うん、それがね――」

神威の言葉は途中で途切れた。

なぜなら、ついさっきそこでフリーズしていた神樂が、神威に思いつきりとび蹴りをかましたからだ。

「このクソ兄貴iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

「。りゃりゃ。」

神威がおどけたように言った瞬間、またしても凄まじい砂埃と騒音が轟いた。

神楽の蹴りは、室内でとどまることを知らず、野次馬が集まる外にまで突き抜けた。

それをかわして外に飛び出した神威と共に。

「神威！アンタ何しにきたネ！！」

突きと蹴りを繰り出しながら神楽が問う。

「それを説明しようとしてたんだろ？全く、人の話を聞かない妹だなあ。」

突きと蹴りをにこやかにかわしながら神威も答えた。

「銀ちゃんを殺^やりにきたアルか！？そんなのさせないネ！」

「それが今回は違うんだなあ。」

神楽の突き出した足を片手で掴むと、そのままバランスを崩させる神威。

一瞬で神楽は地面に叩きつけられ、神威はその首を片手で絞めた。

「がっ……。。。」

息ができずに神威の手を掴むが、離そうとする気配は無い。

「言っただろ？弱いやつに用は無いって。———死になよ。」

その言葉共に、神威が神楽の首を本格的に絞めようとした瞬間。

その首元に、殺気と共に刃が突きつけられた。

「誰？」

神楽の首を締め上げながら、にこやかに振り返る神威。

そして、彼の顔は少なからずの驚きに満ちた。

「晶？」

晶が、式虎槍を構えて立っていた。

驚きと混乱を、その目にはじませながら。

人前で話していいことがダメかは考える

神楽と神威が飛び出していった頃。

阿伏兔がのそのそと船から出てきた。

「くそつ、団長め、『面白そうだから』って理由で勝手に船を操縦しやがって・・・死んだらどうするつもりだったんだあ？」

ぶつぶつと呟きながら出てきた阿伏兔に、残った3人はびくりと反応した。

「デメエは・・・！」

「あれエ？銀髪のお侍さんじゃないかい。何でこんなところに？」

「こんなところにはこっちのセリフです、此処は銀さんの家ですよ、えっと・・・目が死んだ人！」

「誰が目が死んだ人だ。否定はしねえよ、しねえけど名前が分からないならそう言え。阿伏兔っていうんだ、俺は。」

ぼりぼりと頭をかいて阿伏兔は続けた。

「奇遇なこともあるもんだねエ。アンタに用があって来たら、たま

たま突っ込んだ家がアンタの家とは。」

「んなことどーでもいい。テメエら、何しに来やがった。」

「あー、それがなあ……………」

ふと、阿伏兔の言葉が止まり、視線がただ一人に突き刺さる。

先ほどから一言も喋らず、阿伏兔を警戒の目で見ていた晶に。

「その藍色の髪…………アンタ、もしかして…………。」

「……………」

一気に動揺した顔になる晶。

その前に、銀時が立った。

「おい、テメエ、何を知ってるかは知らねえが、とりあえず今は黙
つとけ。」

牽制するような目で阿伏兔を睨む銀時。

「・・・どーにも複雑な事情があるみたいだねエ。」

阿伏兔がやれやれと溜息をついた。

新八は3人のやり取りを聞いて混乱していた。

阿伏兔は何を言おうとしていたのか。

銀時は何で怒っているのか。

—— 晶さんは何で、そんなに怯えた顔をしているのか。

晶は銀時の後ろで微かに震え、銀時の着流しの端をぎゅっと握り締めている。

そんな彼女をかばうように、銀時は牽制するように言った。

「いきなり人んちぶっ壊して、一体何の用だ？」

「何の用ってねエ……。」

銀時の隠そうともしない殺気を受け流すように、阿伏兔は飄々とした態度で言った。

「俺はいつでもよかったんだが、あの団長サマがどうしてもあんたに用があるっていつてなア。」

「あ？あの中2病患者が俺に何の用だよ？」

眉をひそめながら銀時が言うと、阿伏兔はやれやれと肩をすくめた。

「それはあの団長に説明してもらいたいんだがな。早速妹と飛び出していっちゃったんだよな・・・。」

それを聞いた新八が途端に慌てた顔になる。

「そうだった！」

大きく開いた穴から顔を覗かせると、十数メートル先で神楽と神威が激しい攻防をやり取りして居るのが見えた。

「おいおい、大丈夫かよあいつ。」

銀時も大穴からのぞきこむと、おずおずといったように晶もそれにならった。

「あゝ、下手すると殺されるかもなあ。」

「じっ………!」

新八が絶句すると、戸惑ったように晶が銀時を見上げた。

「……………（ぢゅ　　くゐくゐっ）。」

『殺されるってどっぴいっとなっ。』

「……詳しい話は長くなるんだけどな、簡単にいえば——」

「——あの男は、自分の妹を簡単に殺せるような男だっってことぢゅ。」

いつのまにやら一緒に覗き込んでいた阿伏兔があとを引き継いで答えた。

「……………!?!?」

『（妹……………神楽ちゃんが!?!）』

「あ、抑えにかかった。」

「……………!?!」

気の抜けた阿伏兔の声に反応すれば、神楽が神威に喉元を抑えられていた。

「あ、あのままじゃ——！」

新八が息を呑んで、銀時が木刀に手をかけて飛び出しかけたとき。

それよりも早く、藍色の閃光が飛び出していった。

「晶！？」

人前で話していいことがダメかは考える（後書き）

書いてて思いました。

晶、どれだけ速いんだろうと。

あと、説明不足ですけど、船は阿伏兔が着陸場所を探しているときに神威が脇から「ねえ、ちよつと交代してよ」と阿伏兔を突き飛ばし、操縦桿を取ったらてへってことになっちゃったことになっています。

「昨日きやがれてどづいう意味なんだろうね

「晶？こんなところで会えるなんて思っても無かったヨ。」

いつのまにか気絶した神樂の上からどいた神威が、いつもの2割り増しのニコニコ顔で立ち上がった。

それを見た晶も、式虎槍を神威の首筋からどけると、柄についていたボタンを押した。

カチリという音が鳴ったかと思うと、2メートル近かった式虎槍がカチリカチリと音を立ててあっという間に縮んでいく。

最終的に30センチほどの円柱になったそれを、袂に放り込んでから改めて神威と対峙する。

「へえ・・・そういう仕組みになってたんだね。面白いや。」

式虎槍が縮む様を興味深げに見つめていた神威が感心したように言った。

あくまでもゆるい態度を崩さない神威に対して、晶から口火を切った。

『どういこと！？何であんたがここに居るの！？』

「どういことって、ねえ……。」

うーん、と思案顔で首を傾げる神威。

『私に何か用があるの？』

「あ、そうじゃなくて。」

手をヒラヒラと振って否定の意を示す。

「今回は、銀髪のお待さんに用があつて来たんだよね。」

『銀髪って……銀兄のこと！？』

「銀兄？」

その呼び方に眉根を寄せる神威。しかしそれも一瞬のこと。

「ま、そだよ。あのお兄さんに会つために、だよ。」

『……何のために？』

「ああ、それはね……。」

神威があつさりと説明しようとしたとき。

ファンファンファンファン……。

サイレンの音が遠くから近づいてきた。

「ありやうや。ちょっと目立ちすぎたかな。」

『ちょっとじゃないだろ。どうするつもり？』

「んー、考えてなかったや。」

身軽な動きで、神威は窓から船に体を滑り込ませた。
そして、晶のほうを振り向いて、言った。

「おまわりさんに見つかりと面倒だから、とりあえず行くね。銀髪のお侍さんには、今夜辺りにまた来るからって伝えておいてヨ。」

そして、晶が返事をする前に窓が閉められた。

高性能らしいその船が、青空の彼方に消えていくのを、晶はやや呆然としながら見つめていた。

——今夜、もう一度来るから——。

頭の中で何度も響く、神威の言葉。

「う・・・・・・・・。」

「!?!」

うめき声のほうを見ると、気絶した神楽が胸を押さえて苦しそうに唸っていた。

慌てて助け起こし、体を調べてから、特に重傷を負っていないのを確かめてほつとする。

肩を持つて立ち上がり、下を見下ろすとパトカーが万事屋の前に止まり、中から煙草を啜えた鋭い目つきの男と、栗色の髪少年が出てくるのが見えた。

—— 確か、土方と沖田、だったかな・・・？

気配を殺して見つめていたが、2人が同じタイミングで晶の方を見上げた。

「!?!?!」

思わず動揺する晶。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

2人は何かを喋っているらしいがあいにく晶には聞こえない。

やがて、話を終えたらしい2人は、万事屋へと続く階段を登っていった。

一昨日きやがねってどついう意味なんだろうね（後書き）

久々の更新ですね、ホントすみません。
ただいま大スランプに陥っております。

でもでも、できるだけ更新ペースを安定させていきたいと思っておりますので、どうぞお付き合ってくださいませ。

だって分からないんだもん（前書き）

ご無沙汰しておりました。久々の更新です。

だって分からないんだもん

万事屋に小型の宇宙船が墜落した。

しかも、桜色の髪の子と女が戦っているらしい。

その知らせが入ったとき、土方は取り組んでいた書類を投げ出してパトカーを発車させた。

ちゃっかり総悟が乗り込んでいるのを知ったのは発車してから数分後。

流石に走っている車から振り落とすわけにもいかず、そのまま交通法をぶち破る勢いで土方は車を爆走させた。

普段ならば大抵の事件は平隊士に任せておく土方がわざわざ出向いたのは、事件が起こったのが万事屋だったからだ。

鬼兵隊のテロの場に居合わせた彼等から、結局詳しい話を聞きだすことは叶わなかった。

しかし、そのテロから数週間とたたない内に変な船が突っ込めばそれは誰でも疑うだろう。

——万事屋の面々は、もっと深い闇の人物達と複雑なつながりを持っているのではないかと。

という訳で万事屋に出向いたはいいのだが、とつくに船は飛び去っていつてしまったらしい。土方と沖田の目の前にあったのは、万事屋とそれに空く直径3メートル小ほどの大穴だった。

とりあえずパトカーから出ていこうとすると、ふと視線を感じた。

それは沖田も一緒だったらしく、2人揃って見上げた先にはどこかの家の屋根に乗り、気絶した神楽を抱えて動揺した顔の藍色の髪の子が居た。

「あの女、確か……。」

沖田が呟く。彼の脳内に浮かんだのは、鬼兵隊相手に手負いの獣が如く暴れていた彼女の姿。

「ああ。口がきけねえ、確か……与謝野とか言ったか？」

「どうしますか？俺が一発捕まえてきましようか？」

I

「だからあー、嘘は言ってねえっての!!」

「どう聞いたって嘘にしか聞こえねえんだよ！」

家で柄の悪い男2人が怒鳴りあつてゐるなう。

思わずそんなことが新八の頭に浮かんでしまうほど、不毛なやり取りが続いていた。

いきなり「真選組だ!」と入ってきた土方は、いきなり銀時に食って掛かり、

「おいてめえ、今度は一体何をやらかしたんだ？」

と、メンチをきってきたのだ。

「あ、どーも旦那。お邪魔しまさア。」

と、口調だけは丁寧な沖田は茶菓子を探してあちこちをぐそぐそと漁っている。

そんな彼を放っておいて。土方はいきなり事情聴取と言つ名の尋問を始めた。

何で船が突っ込んできた、突っ込んだヤツは誰だ、桜色の髪の男とは誰だ、などなど。

隠す必要もないと思つた銀時はありのままを話した。

——中二病末期患者と死んだ目のおっさんがさ、宇宙船に乗って地球に観光旅行に来たんだよ。

……だいぶやる気の無い適当な説明ではあったが。

当たり前のように土方はキレた。

んな馬鹿なことがあるか、もっとマシな説明をしろ、と。

しかし、詳しい説明を求められても説明のしようがないのだ。

神威は何をするまでも無く（まあ大穴ぶちあけていったけど）帰っていつてしまったのだから。

晶はいつの間にか神楽を抱えて戻ってくると、黙って甲斐甲斐しく介抱をしている。

その表情はどこか暗く、何があったのか聞きたいところではあるが土方と沖田がいる手前、下手な会話をすればそこにも質問を突っ込まれるだろう。

結局、不毛な戦いは用事から帰ってきたお登勢が怒鳴り込んでくるまで続いた。

だって分からないんだもん（後書き）

・・・ただいま猛反省中です。

真選組を出すことに何の意味があつたのか・・・。

殆ど中身がゼロに等しいですね、これ。

久々なのに申し訳ありません。

ご都合主義でお願いします。（前書き）

えと、後書きに結構重要なお知らせがあるんで読んでやってください。

「ご都合主義でお願いします。」

まあいろいろとひと悶着があった後。

とりあえず土方と沖田とお登勢は帰って行き、大穴の開いた万事屋をどうするかが問題となった。

未だ気絶している神楽を布団に寝かせたあと、銀時、新八、晶の3人で話し合い、あちこちに散らばった瓦礫を集めて捨て、木の板で大穴を隙間無く埋めて釘を打った。

（なお、どっから木の板持ってきたのかとか、そんな簡単に埋まるモンなのかという疑問に関してはご都合主義でお願いします。）

そんなこんなで、ようやくひと段落ついたころには西の水平線に夕日が沈もうとしていた。

[illegible]

「あー！！！！疲れたー！！」

銀時が勢いよくソファにダイブすると、新八も伸びびをして溜息をついた。

「はあ……ほんとに大変でしたよ。」

そして、ふと思い出したように呟く。

「にしても、あの人、何をしたかったんでしょかね？あつさり帰

「っちゃいましたし……。」

「中二病患者の発作だよ、多分。何かを壊したくなるみたいな。」

そこまで話した後、ずっと黙りこくつてもくもくと作業をしていた晶がさらさらと紙に筆を滑らせ始めたのに気が付き、2人が晶に目を向けた。

『あいつは、帰っていったわけじゃないよ。』

「え？どういことですか？」

新八が困惑と不安を顔に滲ませながら聞いた。

『船に乗って行く寸前……神威が、「今夜辺り、また来るよ」って……。』

「おい、それマジか。」

ソファにグデっていた銀時が起き上がって真剣な顔をした。

「もしかして、銀さんを狙いにきたんじゃない？」

『何それ、どういうこと？』

新八のセリフに眉根を寄せて首を傾げる晶。

「えーっと、どこから話せばいいのか……。」

「んな込み入った話じゃねーよ。」

悩みつつ話し始めようとした新八を遮って、銀時がめんどくさそうに言った。

「前に観光旅行に来たアイツに会ったら何故か気に入られて、今度会ったら勝負しろーとか言われたただだよ。」

そんな銀時をじっと見つめていた晶だったが、特に何も言うことはなかった。

「それよりも、お前に聞きたいことがある。」

ずっと銀時の目が真剣な光をおび、晶を見据えた。

「俺達は一度もあの三つ編みアホ毛野郎を『神威』なんて呼んでない。アイツが名乗ったとも考えづらい。なのに、何でお前はアイツの名前を知ってるんだ。」

「銀さん、それってどういう、」

「お前、アイツと知り合いなんじゃないのか？」

銀時の核心を突いた問いに、晶がぴくりと反応を返す。

「え！？神威さんを知ってるんですか！？」

驚いた新八の声に、晶が暗く重い顔で答えようとした。

『じつは……。』

「それ、どういうことアルか？」

「」「！」「！」「」

隣室に寝かせておいてあるはずの人物の声が聞こえ、3人とも声が聞こえた方向に体を向けた。

そこには、大きな目をさらに見開いて唇を微かに震わせた神楽が立っていた。

『神楽ちゃん……。』

「ねえ、どういうことヨ！何でアッキーナがアイツを知ってるネ！」

晶のところまで早足で行くと、肩に手を置いてしっかりと掴んだ。

「アイツに関わっちゃだめヨ！アイツは――」

神楽が続けようとしたときだった。

「酷いなあ、実の兄にそこまで言わなくなっただけじゃないか。」

「そこまで言われても仕方の無いことばっかしてきたんだろ。」

不意に、部屋に2人の男の声が響いた。

振り返らずとも分かる、声の主達は、固まったままの4人に構うことなく、応接間を横切って銀時の向かいのソファに座った。

「約束どおりに来たよ・・・晶、と、銀髪のお兄さん。」

「俺は引っ張られてきたんだけどな。」

ニコニコ笑う神威と、くたびれたような声を出す阿伏鬼。

晶は一瞬固まっていたが、すぐに信じられないといった目で神威を見つめていた。

体を起こして目の前の2人を見つめていた銀時は、溜息と共に言葉を吐き出した。

「
・
・
・
・
・
俺は、約束してねえけどな。」

「ご都合主義でお願いします。（後書き）」

ぶっちゃけたった一つの連載すらともに更新できていないのに滅茶苦茶無謀ですし、ここに書いていいのかも迷ったんですけど・・・。

最近、薄桜鬼にはまり始めまして、（私は千鶴至上主義です）銀魂との混合小説を読みたくてしかたないのですが、あまりないし、夢小説が多いので、なかなか理想の小説に出会えません。

なので、自分で書いてみようかと思いました。

薄桜鬼のキャラが銀魂世界にトリップする話を。

ですが、どこからどこまでのキャラをトリップさせようか悩んでいます。

なので、軽い「世界に噛み付く鬼」の感想と共に、トリップさせたいキャラを投票していただけないでしょうか。

それを参考にして書きたいです。

最悪誰も書いてくれなかったとしても、どっちにしろ書きますが。

勝手なわがままですみませんが、どうぞよろしくお願いします。

他人の家に行くときは茶菓子ぐらい持っていけ

突然現れた2人に、驚いた者、けだるそうな態度を取る者など、4人の取る反応はさまざまだったが、約3人に共通しているのは石のように硬直しているという点だった。

が、当然といえば当然か。

一番最初に硬直をといたのは怒りに体を震わせた神楽だった。

「死ねエエエエエバ神威イイイイイ！」

そして昼間のときのように再び神威に飛び掛ろうとした神楽を羽交い絞めにしたのは新八だった。

「ちょ、神楽ちゃん落ち着いて！まだ安静にしてないといけないんだから！」

「んなこたどうでもいいネ！今はコイツを追いつことが先アル！」

ギャーギャー騒いでいる2人を見てその原因は溜息をついた。そして晶のほうを向いて、

「ねえ、晶。『今夜もう一回来る』って伝えておいてくれなかったの？」

問いかけられた彼女はようやく硬直をとき、乱暴に筆を滑らせた。

『今さっき伝えたばかりだよ。』

「えゝ、遅くない？」

「そりゃ遅くもなるだろうだ、団長。」

阿伏兔が面倒くさそうに頬を膨らませた神威に横槍を入れた。

「何で？」

「そりゃ、あんだけの大騒ぎを起こしちゃったからな。警察^{サッ}は来る
だろうし穴はふさがなきゃいねえし、むしろこれだけの短時間で収
拾つけてここに入れること自体が驚きだね。」

流石は歴戦の夜兎と言えようか。この場に来てから僅か数分だとい
うのに既に辺りを少し見渡しただけで簡単な状況を読み取ってしま
った。

「ま、それもそうだな。」

納得したらしい神威はそう言って暴れている神楽とそれを抑える新
八に見向きもせず反対のソファに座っている銀時に目を向けた。

銀時はと言うと、呆れたような顔で前の2人を見ている。

「いい根性してるよな、全く。あんだけ派手に人ん家ぶっ壊しておいて、のこのこやって来るとはよ。」

「へへ、ありがと。」

「団長・・・本気で褒められてると思ってるのか？」

「ちょっと、やめてよ阿伏兔。その可哀想な子を見つめる目。」

と、そこへ晶が紙を投げつけてきた。

『いい加減にして！いつまでそんなほのぼのした会話繰り広げてるつもり！？こつちが持たないよ！』

「「「え？」「」「」

銀時、神威、阿伏兔の3人が晶のほうを見やると。

神楽が周りのものを壊さんばかりに暴れ、それを新八と晶が必死で取り押さえていた。

新八はそのついでに殴られたらしく、頬が真っ赤にはれてとても喋れる状態ではなかった。

晶の傍には筆が落ちており、どうやら書いた直後に取り落としたらしい。

そして、3人は話していたために気づいていなかったが、神楽はさつきから「とつとと出て行けヨ馬鹿兄貴ィ！」と叫びまくっていた。

そんな様子を見た神威はやれやれと溜息をついて立ち上がると、神楽のところへ歩いていった。

ようやく神楽が暴れるのをやめて、じつと神威を睨みつけた。

「全く、こっちが何も話してないのにいきなり暴れだそうとするなんて・・・本当にできの悪い妹だなあ。」

「デメエが言えたことじゃないだろが。何しに来たネ。」

神楽が言つと、神威は嬉しそうに笑った。

「ようやく本題に入れそうだね。それを伝えに来たんだ。」

「どうせ銀ちゃんを殺しにきたに決まってるネ！そんなこと絶対にさせないヨー！」

神楽が再び暴れそうなのを見て、黙っていた阿伏兔が口を開いた。

「それは違っぜお嬢ちゃん。むしろ逆だと言ってもいい。」

『逆・・・？』

晶が怪訝な顔をした。

「どういうことだよ。その中二病患者は俺を狙ってたんじゃないのか？」

銀時が言うつと未だに喋れない新八もこくこくと頷いた。

「うん、俺はお兄さんとサシでやりたいんだけど、ちょっと厄介なことになってね。」

「厄介？」

そこまで言っつて、銀時の脳裏をよぎったのは、数日前の天人達の襲撃。

「・・・まさか、俺が誰かに狙われてるとか言っくんじゃないだろうな。」

「その顔からすると、既に襲われたみたいだねえ。」

阿伏兔が言つと、新八と神楽が目を見開いた。

——ここ数日、銀さんの機嫌が悪かつたのはそのせいだったのか……！

阿伏兔がやる気のなさそうな声で続けた。

「春雨の第六師団の団長がとんでもない額の金を横領してたらしくてねエ、それがバレちまつたのさ。本来なら死刑もんだが、ある人物を始末することと引き換えに、なんとか免れたのさ。」

「……んで、その人物つてのが、」

「お兄さんだよ。」

「『……！……！』」

銀時は既に予想できていたのか表情一つ変えずに神威と阿伏兔を見

つめているが、新八、神樂、晶の3人は明らかに動揺した顔をしている。

「それを俺にわざわざ伝えに来たわけか。ご苦労なこつたな。」

「伝えにただだけじゃないさ。俺はその第六師団のなんとかって団長を始末しに来たんだよ。」

「あ？」

銀時が眉根を寄せた。

他人の家に行くときは茶菓子ぐらい持っていけ（後書き）

長くなりそうだったのでいったんきりました。

変なところできっちゃってすみません。

タブーを小6まで缶の上の押すやつだと思ってました

「どういうことだよ。そいつは失態を償うために俺を狙ってるんだろ？何でデメエがそいつを殺すんだ？」

「だから、言っただろ？俺はお兄さんとサシで殺り合いた^やいんだよ。それを殺されちゃったら元も子も無いじゃないか。」

「つまり、団長は今回に限って全面的にアンタらに協力するってことさ。」

それから、と続ける。

「春雨の団長クラスっていやあ殆どが化け物みてえに強え連中が多いからな。ついでに第六師団の団長と戦いたいとか思ってるんだろ
うよ。」

「あり？バレた？」

「何年アンタと一緒にいると思ってるんだ、すつとこどつこい！」

「あ、あの……。」

何？というように2人が振り向くと保冷財を頬に当てた新八がおずおずと口を開いていた。

「あの、銀さんを始末するってことで処刑から免れたんでしょう？
それなのに勝手に殺しちゃって平気なんですか？」

「ああ、それなら心配要らないよ。」

神威が明るい口調で言うと、阿伏兔がその後を引き取って続けた。

「上にも一応聞いてみたんだがな、どうもその処分に納得しない連中が多いらしい。何とも釈然としない感じだったからな、始末つけたところで誰も怒りやしねえよ。」

「そゆこと、俺としても一石二鳥で嬉しいんだよねー」

「・・・それを信用する根拠がどこにあるネ。」

神楽が相変わらず睨みつけたまま言う。

「銀ちゃんが襲われたのだって、全く別の奴等かもしれないヨ。」

「そうだね、無いよ、今のところは。」

あっさりと認めた神威に拍子抜けしたような顔をする神楽。
しかし、阿伏兔が続けた。

「だがあくまでも今のところ、だ。そのうち嫌でも分かるだろうよ。」

「ど、どういふことですか？」

新八が問うと、新八に死んだような目を向けながら更に阿伏兔は続ける。

「春雨の一師団が本気で一人の地球人を狙ってみろ、それこそ場所どころか、昼夜問わず襲ってくる。仮にそこのお兄サンがやられなかったら、次に刃を向けられるのは周りの人間達だ。」

しかも、とそこで息をつく。

「既に一回撃退しちまったみてえだからな。次は本気で手を打ってくるはずだぜ。」

「でも！」

「やめろ、神楽。こいつの言ってることは多分本当だ。」

なおも言い募ろうとする神楽を止め、銀時は続けた。

「んで、テメエらはどんな手を打つつもりなんだ？」

「どうもこうもないよ。」

「こつちも情報が少なすぎるからな。相手が尻尾出してきたら、そこから辿って頭を潰すしかねえだろう。」

2人の言葉を聞いて、やや不安げな顔をする新八。

「何か、大分アバウトなんですけど・・・どう思います？」

晶さん、と視線を向けた新八は息を呑んだ。

彼女の顔が青を通り越して白くなって、体が微かに震え続けていたからである。

「ちょ、晶さんどうしたんですか!？」

新八の声に、全員の視線がそちらを向いた。

「おい、晶どうした。」

銀時の言葉も耳に入っていないかのように晶は顔を神威の方に向けた。

『その、第六師団の団長の名前は？』

「んーと、何だったかな？」

「もう忘れたのかよ。霜龍だよ、霜龍。」

「……………」

「おい、確かそいつは！」

銀時が焦った声を上げた。

その瞬間。

彼女の顔をよぎったのは、

哀しみ混じりの憎しみと、

小さな子供のような、怯え。

そして、彼女は膝から床に崩れ落ちた。

「ちよ、晶さん!？」

「アツキーナ、どうしたネ!？」

「おいおい、嬢ちゃん大丈夫か？」

次々に3人が同様の声をあげる中、神威だけは何かを考えるように晶を見つめていた。

当の晶は、眼を見開いたまま体を手で抱き、震えている。

銀時は大股で彼女の元によると、すぐに抱き上げた。

「ちょっと隣に寝かしてくるわ。」

それだけ言っと、あっというまに寢室に連れ去ってしまった。

襖を閉めた銀時は、未だに目を見開いた晶を布団に寝かせると、掛

け布団をかけてやった。

そして、

「ほら、目えつぶね。何にも怖くねえから。しばらく寝てろ。」

まるで幼子に諭すように、優しく言った。

晶自身も幼子のように、ゆっくりと目をつぶると、そのまま死んだように眠ってしまった。

それを見つめていた銀時は、頭をくしゃりと掴むと。

「どうしたもんかね、これは・・・。」

銀時の声には、いつもの彼らしからぬ苦渋に満ちていた。

タブーを小6まで缶の上の押すやつだと思ってました(後書き)

やっと動き始めたこの連載の本質。
ほんとうにやつとです・・・。

近々「薄桜魂」連載(↑なんというベタベタなネーミングセンス)
開始予定です。

誰にでも踏み込まれたくない部分はある

やがて銀時が戻ってくると、新八と神楽が詰め寄った。

「銀ちゃん！アッキーナに何があったネ！」

「晶さん、めちゃくちゃ震えてましたよ！？」

2人を軽く手でいさめながら銀時は言った。

「風邪だよ風邪。うちに来たときからずっと顔色悪かっただろ。ずっと我慢してたんだろうけどよ、限界が来ちまったんだろ。」

「嘘ネ！だって、アッキーナは、『そうりゆう』って名前を聞いた瞬間に――」

「黙れ。」

神楽は、はっと息を呑んだ。銀時が、普段決して新八や神楽に向けることの無い、微量な殺気を放っていたからだ。

神楽が黙り込むと、銀時はその殺気を消して、神楽の頭にぽんと手を置いた。

「とりあえず寝かしといたから大丈夫だ。それよりも、やんなきゃなんねーことがあるだろ。」

そう言つて、再び神威と阿伏兔の前に座った。

神楽は納得のいかない顔をして、銀時に問おうと口を開いたが、すぐに肩を掴まれた。

後ろを振り向くと、そこには戸惑いと、しかし既に何かを悟ったような新八が肩に手を置いていた。

神楽は激情のままにその手を振り払おうとしたが、できなかった。

神楽も悟つたのだ。

自分が今高ぶる感情のままに踏み込もうとしていたところが、晶の深くで思い部分だということに。

恐らくそれは、銀時も知っていることだろう。しかし銀時は、神楽にその場所に踏み込むことを許してはくれなかった。

新八はいち早くそれに気が付いたのだ。

——— きっとこれは、簡単に僕らが土足で踏みにじっていいよ
うなことじゃないんだ。

彼の目が、そう言っていた。

「・・・・・・・・・・。」

神楽は振り上げていた手を下ろして、俯いた。

自分の知らない晶や銀時の領域があることに、とてつもなく寂しさを感じた。

神威がやんわりと、しかしはつきりと阿伏兔を止めた。

「とりあえず、説明はしたよ。後は好きにしてね。」

そういうと、神威は立ち上がって玄関へ向かった。

「帰るのか、団長？」

「うん。あ、そうだお兄さん、何か分かったら連絡してね。」

そう言っで、一枚の番号が書かれた紙切れをぺらりと放った。

それを難無くキャッチした銀時は、黙って神威の後姿を見送っていた。が、やがて言った。

「・・・テメエ、晶^{あいつ}とはどこで会ったんだ？」

「んー、面倒くさいからそこらへんは晶から聞いてね。」

振り返らずにひらひらと手を振る神威と阿伏兔は、玄関から出ようとした。

が、しかし出る寸前に、神威は言った。

「安心してよ。晶のことを、霜龍にばらすつもりはないからさ。」

「……！」

「再び檻の中に入れて鎖に繋がれた獣にするには、あまりにも惜しすぎる。」

驚愕に目を見開いて何か言葉を発そうとした銀時に構うことなく、神威は怪訝な顔をした阿伏兔をつれて出て行った。

そのただならぬ様子に新八と神楽も戸惑いを隠せなかった。

そんな2人に訳を説明するわけにもいかず、銀時はただ額を抑えて俯いた。

彼の口元は歪み、晶を思いやる苦しみに満ちていた。

「なあ、団長。さっき言ってたこと、どういう意味だ？」

「あり？阿伏兔なら分かると思ってたのになあ。」

「分かるもクソも、俺はあのお嬢ちゃんとは初めて会ったんだよ。」

「そーだっけ？」

「どこまで自己中なんだよ、すつとこどっこい！」

「ふーん・・・そうだね、ヒントをあげようか。」

「ヒント？」

「うん。霜龍はね、十年以上前から人身売買ルートの大役なんだよ。」

誰にでも踏み込まれたくない部分はある（後書き）

どこまで出そうか迷いました・・・。

ここまでくれば多分殆どの人はおおまかなことは分かりますよね。

でもそれではあまりにも面白くないので（主に私が）もうちょい工夫を凝らして頑張ります！

黒幕？舞台の上の赤いヤツじゃなくて？

薄暗いビルの一室。

「霜龍団長。新しい情報が入りました。」

「新しい情報？白夜叉に関することか。」

霜龍は声音を変えずに答えた。

「いえ、それとは全くの別件です。第七師団の神威団長が地球にやってきたという情報が入ってきました。」

「何だと！？」

驚いて振り向く霜龍に構わず、魎は冷たい声で続けた。

「先ほど申し上げた通りです。第七師団の神威団長が――」

「それはさっきも聞いた！」

イライラしたように霜龍は怒鳴った。

「何である『雷槍』が地球にやってきたんだ！？」

「不明です。推測ならつきますが。」

「どんだ？」

魎は一息ついて語りはじめた。

「神威団長は戦闘狂で有名です。強い相手がいれば無理やりにも戦って殺そうとします。恐らく、今回の失態で団長が瀬戸際に立っていることを知り、『そんなクズは春雨にいらぬ』とでも理由をこじつけて公式的に貴方を殺すつもりなのでしょう。」

「そんな理由が――」

「通ります。事実、今回の失態で貴方に反感を持っているのは普通の団員達だけではなく、元老達も含まれているのですから、貴方が殺されたところで『処刑から無理に逃れた裏切り者を粛清した』とでもなつて、神威団長が罪に問われることは無いでしょうね。」

「・・・くそっ！」

思いつきり舌打ちをすると、霜龍は乱暴に壁を蹴った。

「計画変更だ。しばらく様子を見てから白夜叉に襲撃をかけるつも

——や、やめろ！殺さないでくれ！

ぢくっ。

——くそっ、こんな子供に・・・くそおおお！

びしゃっ。

——ば、化け物ッ！何だその氷のような瞳はッ！

ずしゃっ。

飛び散る血。

断末魔の悲鳴。

死の間際に向けてくる、恐怖と恨み、憎悪で満ちた視線――。

私の手についてるのは、血。

私の足跡につくのも、血。

私の体は、血塗れだ。

何で？

何で私の体は血塗れなの？

私のせいなの？

私が悪いの？

何で、

[illegible]

・
・
・
・
いや、違う。

私が悪いんじゃない。

私が悪いんじゃないくて、

——私をこんなところに押し込めた、世界が悪いんだ。

許さない。

許してやるものか。

憎んで、憎んで壊してやる。

ル・ノートル・ド・パリ

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ！！！！」

晶はがばりと跳ね起きた。

久方ぶりに見た夢だった。

数年前の、記憶を思い起こさせる、悪夢を見たのは。

「・・・・・・・・つ。」

深い呼吸を何度も繰り返し、気持ちを落ち着かせる。

気がつけば体全体にじっとりとした嫌な汗をかいていた。

「・・・・・・・・。」

辺りを見回すと、見慣れない部屋。

——前にもこんなパターン、あったな……。。

記憶の箱をひっくり返し、あさる。

『霜龍だよ、霜龍。』

「——っ……………」

注ぎ込まれるように記憶が蘇る。

それとともに、体に再び震え始める。

——どうすれば……！

ガラガラッ

「目えさめたか、晶。」

「……………」

銀時が中に入ってきて、襖を閉めた。

そして晶が震えていることに気がつく、優しく頭をなでてやる。

それだけで晶の震えは大分納まった。

「さっきなんで自分が倒れたか、分かるな？」

コクコクと頷く晶。

「お前が不安なのは分かる。でも、お前は何もするな。」

銀時は真っ直ぐに晶を見つめる。戸惑ったようにゆれるその瞳に、語りかけるように。

「絶対に、守ってやるから。」

黒幕？舞台の上の赤いヤツじゃなくて？（後書き）

一週間に一本は更新するつもりだったんですけど・・・。
すみません。

催眠ガスって売ってるのかな

その後、銀時は晶をしばらくの間万事屋に泊めると2人に宣言した。2人は何も言わなかったが、銀時が此処まで過保護になるにはそれなりの訳があるのだらうと自分達を納得させ、晶にも何も聞くことはなかった。

晶はそんな2人に申し訳なく思っているらしく、外には出ないもののいろいろと手伝いをしていた。

神威と阿伏兔はどこかへ消え、姿を現さなくなった。

そうして3日が過ぎた。

「ちよつくら銀さんで掛けてくるわ。」

「え、ちょ、良いんですか？」

や

新八が言くと、銀時は手をひらひら振りながら答えた。

「いーよいーよ。ほんとに5分で帰ってくるから。」

そういつて銀時が出て行ってしまうと、新八は深く溜息をついた。

「本当に能天気だな、あの人は。逆に羨ましくなってくるなあ。」

『まあでも、そこが銀兄の美点でもあるから。』

「そうですね・・・って晶さんどっから!？」

いつの間にか隣に立っていた晶にビビる新八。

洗濯籠をもっているところを見ると、どうやら洗濯物を干し終えたところらしい。

『あと他に、することはない？』

「他に、ですか・・・。」

新八は言葉に詰まった。

晶は「世話になってるから」と言っただけ家事をくるくると手伝ってくれていた。

彼女のおかげで普段整理できない棚や掃除できないところも掃除できたので、あとは特にすることがなかったのだ。

「あ!」

新八の頭に豆電球が輝いた。

「買い物にいつてきてくれませんか？」

『買い物？でも・・・』

「晶さん、ずっと外に出てないですよ？少しは周りを歩いて外の空気を吸ったほうがいいですよ。」

さりげない気遣いがにじみ出る言葉。晶が悩みを抱えていることを知りながらも踏み込まず、それでも心配してくれる言葉。

それに気づいているからこそ、晶は嬉しく、いたたまれなくなるのだ。

『やっぱり、』

「いいアルなー。私も一緒に行くアル！」

神楽がひよつこりと飛び出してくると、新八が呆れた声を出した。

「神楽ちゃんは押入れの整理してよ。何か変な臭いがしてきてるでしょ。」

「嫌アル！私も一緒に行くアル！」

晶に抱きついて駄々をこねる神楽。

それを見た晶は、神楽の頭をなでながらもこのままでは埒が明かないな、と思った。

『やっぱり一人で رفتてくるね。』

「えー！嫌アルー！」

『酢昆布買つてきてあげるから。』

「早く片付けないと！」

「変わり身早くない？」

と言いながらも買い物袋とお金、メモを手渡す新八。

「このメモに書いてあるものを買ってきてくれればいいですから。」

「酢昆布もアルー!!」

『はいはい、じゃあ行つて来ます。』

晶は2人に見送られて家を出ていった。

「・・・出で行つたぞ。」

「ああ。これで今あの家にいるのは、ガキ二人だけだ。」

「じゃあ行くぞ。」

[illegible]

「ちよつと神楽ちゃん、押入れの中どうなってるの！？何か異臭が増してるんだけど！？」

「女は謎多き生き物アル、詮索するだけ野暮つてものよ、坊や。」
「アンタ誰！？ていうか謎なのはオメーの思考回路だろうが！！」

新八と神樂が押入れをめぐってやりあっているとインターホンが鳴った。

「あ、依頼主さんかな？」

「きつとアッキーナが忘れ物したアルよ！私が行って来るネ！」

そういつと神楽は玄関にまっしぐらに走っていった。

玄関の戸をがらりと開ける。

「アツキーナ、何かあつ——」

神楽の声はそこで途切れた。

顔にいきなりスプレーを吹きかけられたからだ。

そして次の瞬間、スプレーを吹きかけた人物を認識する前に倒れた。

ばたん、と倒れる音がして、慌てた新八が走ってきた。

「神楽ちゃん！？どうした——」

黒いマントで全身を包んだ人物が新八の傍に音も無く寄ると、同じようにスプレーを吹きかけた。

がぐりと膝を折って倒れる新八。

黒マントの人物は後ろにいた部下数人に指示を出した。

「子供を運びなさい。私は霜龍団長に報告してきます。」

「「「分かりました、魍様。」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4185t/>

世界に噛み付く鬼、夜空を仰ぐ獣、慟哭の夜叉

2011年11月15日03時17分発行